
バカとカオスと原作ブレイク

零崎哀識

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとカオスと原作ブレイク

【Nコード】

N9813N

【作者名】

零崎哀識

【あらすじ】

原作知識を持っている少年、哀川 零が文月学園に転校してきた。

零が目指すのは、原作ブレイク。

始めの方駄文過ぎです。

ユーザーでない方も感想を書くことが出来るので感想をお願いします。

転校（前書き）

ヒロインが決まっています。
次から選んで感想とかで教えて下さい。

木下 秀吉

木下 優子

工藤 愛子

高橋 洋子

オリキャラ

転校

「ここが文月学園か。まさか、本当に存在するなんてな。それじゃあ、面白おかしく楽しみますか。」

この俺、哀川 零はラノベの世界のはずの文月学園の校門の前にいる。

何故ここに俺がいるかというと、一ヶ月前に学……あの糞ばあにデータ管理者としてスカウトされた。

その時に文月学園と聞いて驚いたが、高得点者の一覧を見たら原作キャラの名前がいくつかあった。

そこで俺はいくつか条件を付けてこの学園に転校してきた。

「おい、遅刻だぞ！」

人が回想してる時にだれた。

そこには、ゴリラが立っていた。

「動物園に連「おい、補習室に行きたいのか。」……………ああ、鉄人か。」

「やはり、補習室行き……お前、見ない顔だな。」

「ああ、俺は転校してきた哀川 零だ。」

「そうか。お前が物好きか。よりによってあのクラスを選ぶなんて。」

「

「その代わりに権限をいくつかもらったからな。」

「まあ、いい。わかっているなら早く行け。遅刻したら本当に補習室に連れて行くぞ。」

「はい、原作介入と行きますか。」

Fクラス」

Fクラス（前書き）

バカテスト 理解

調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金例を一つ上げなさい。

姫路瑞希の解答

『問題点……マグネシウムは火にかけると激しく酸素と反応するため危険であるという点

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』ではダメという引っ掛け問題なんです。が、姫路さんは引っ掛かりませんでしたね。

土屋康太の解答

『問題点……ガス代を払っていなかったこと。』

教師のコメント

そこは問題点じゃありません。

吉井明久の解答

『合金の例……未来合金（すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

哀川零の解答

『問題点……料理を作ったのが姫路だったので、鍋が溶けた。』

教師のコメント

姫路さんに失礼だと思います。

Fクラス

「やっと着いたか。」

Fクラスを探すのに時間がかかった。

普通、先生の案内があるよな。

Fクラスの扉の前には、ピンクの髪の子が立っていた。

「ああ、姫路か。てっことは。」

『ダーリン』

の太い合唱が聞こえてきた。

オエ、気持ち悪くなってきた。

姫路も苦笑している。

おっと、ここで姫路に話かけてみるか。

「おい、悪いんだがここでFクラスはあっているか？」

「えっ、あ、はいここがFクラスですけど……」。

「そうか、礼を言うよ。」

転校してきたばっかだからな。道が分からなくてな。」

「そうなんですか。えっと、姫路 瑞希です。」

「俺は哀川 零だ。それじゃ、教室に入るか。」

「はい。」

ガラガラガラ

「失礼します。」

明久サイド

「失礼します。」

「遅れて、すみません。」

僕の自己紹介が終わった時に、二人教室に入ってきた。

『えっ。』

一人は姫路さんでもう一人は誰だろ。

その二人を見て。担任の先生が話しかけた。

「ちょうど良かったです。今、自己紹介しているとこなんです。姫路さん達もしてください。」

「は、はい！あの姫路 瑞希と言います。よろしくお願いします。」

「

「はい！質問です。」

自己紹介を終えた、一人が言った。

「あ、は、はい。なんですか？」

「なんで、ここにいらっしゃるんですか？」

聞きようによつては、不快な質問だが、彼女は本来、学年主席でFクラスにいるはずのないのだから。

「その振り分け試験中に熱を出してしまって……………」。

『そういえば、俺も熱の問題が出たせいでFクラスに』

『ああ、化学だろ。あれは難しかった。』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて。』

『黙れ、一人っ子。』

『前の晩、彼女が寝させてくれなくて。』

『今年一番の大嘘をありがとう。』

「バカばかりだな。」

転校生が言った。

僕もそう思うよ。

「でっ、では、一年間よろしくお願いします。」

「そろそろいいか。学園長もとい糞ばばあに雇われて、転校してきた哀川 零だ。よろしく頼む。」

転校生か、だから、誰か分からなかったのか。でも、雇われたって一体。

哀川 零サイド

原作通り、明久達が教室の外に出た。

「ちょっといいかの。」

おっと、隣の席になった秀吉が話しかけてきた。

「ああ、いいぞ。えっと……。」

「わしは、木下 秀吉じゃ。よく間違えられるのじゃが男じゃ。」

「ああ、分かっているぞ。」
ガシッ

秀吉が抱きついてきた。

「初めてじゃ、わしを一目で男と見抜いたのは！」

「分かったから、早くどけ！クラスの連中がシャーペンを構えている！」

「すまないのじゃ。こんなに嬉しいことは久しぶりじゃからの。」

「そうか、まあ、いい。」

「坂本くん、君が自己紹介最後の一人ですよ。」

「了解。」

担任が言った。って、もうそんなに進んでたのか。

「坂本くんはFクラスのクラスのクラス代表でしたよね？」

雄二が頷く。

「俺がFクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも、坂本でも好きなように呼んでくれ。」

「じゃあ、ダーリン。」

「悪いがそれは辞めてくれ。」

「ワガママだな。しょうがない、名前で呼ぶか。」

「俺が悪いのか!？」

「そつだ。霧島雄二が悪い。」

「俺の名字は坂本だ！つーか、お前は転校生なのになんでそのことを知っている！？」

「雄二、話が脱線しているぞ。」

「お前のせいだろうか！」

雄二をおちよくるのもそろそろ辞めるか。

「はー、話もそれだが、みんなに問いたい。」

カビ臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れたちゃぶ台

「Aクラスは冷暖房完備のうえに、座席がリクライニングシートらしいが、不満はないか？」

『大有りじゃー！ー！』

Fクラス全員の魂の叫びだな。

「だろう？俺もこの境遇はおおいに不満だ。代表として問題意識を抱えている。」

『そつだそつだ！』

『いくら学費が安いからといって、この設備あんまりすぎる。改善を要求する。』

『Aクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大き過ぎる！』

ダムに穴を開けたときみたいに不満が出てくるな。自分達の自業自得でこのクラスになったのにな。

「みんなの不満はもっともだ。そこで、これは代表としての提案なんだが

FクラスはAクラスに試召戦争を仕掛けようと思う。」

戦争の始まりだな。

原作を壊してでも、Aクラスに勝つか。

まあ、原作ブレイクはやろうとしてたんだけどな。

Fクラス（後書き）

更新が遅めです。

Fクラス戦力(前書き)

バカテスト 国語

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1)得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『(2)悪いことがあったのに更に悪いことが起きることの喩え』

姫路瑞希

- 『(1)弘法も筆の誤り』
- 『(2)泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』

(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』等がありますね。

土屋康太

- 『(1)弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久

- 『(2)泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか!?

哀川零

『(1) 猿を木から突きおとす』

『(2) 泣きつ面蹴ったり殴ったり潰したりバラしたりきったり
etc』

教師のコメント

鬼より酷いですね!?

(2) は裏面までびっしり書いて

Fクラス戦力

『勝てる訳がない。』

『これ以上、設備を落とされるなんて嫌だ!』

『姫路さんがいたら、もう何もいらぬ。』

誰だ!? 姫路にラブコールん送った、最後の奴!

「そんなことない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる。」

随分と大きく出たな。

まあ、俺が勝たせてやるがな。

『何をバカなことを!』

『出来る訳がないだろう!』

『なんの根拠があつてそんなことを!』

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことの出来る要素が揃っている。それを今から証明してやる。」

さあ、どこまでバカ共を掌握するかな。

原作で知っているんだがな。

「おい康太。畳に顔を着けて姫路のスカートを覗いてないで前に来い。」

「……………（ブンブン）」
「は、はわー！」

あんだだけ、堂々覗いておいて、普通否定するか？
さすがムツツリーニってところか。
つか、気付けよ姫路。

「土屋康太。こいつがあ有名な寡黙なる性職者だ。」
ムツツリーニ

「……………！！（ブンブン）」

『ムツツリーニだと！！』
『バカな。奴がそうだとでもいうのか！』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠をいまだに隠そうとしているぞ。』

『ああ、ムツツリに恥じない姿だ。』

常人は、恥じる姿だな。

「????？」

姫路が頭の上に？が浮かんでいるが、名前の由来は教えなくていいよな。

「姫路のことは説明するまでもないだろう。皆もその力はよく知っているはずだ。」

「えっ？わ、私ですか？」

「ああ、うちの主戦力だ。期待しているぞ。」

『そうだ。俺達には姫路さんがいるんだった。』

『彼女なら、Aクラスにも引けを取らない。』

『ああ、彼女さえいれば何もいらぬ。』

本当に誰だ？さっきから姫路にラブコール送ってる奴。

「木下秀吉だっている。」

「呼ばれたから、行ってくるのじゃ。」

「おう、行ってこい。」

『おお！』

『演劇部ホープの。』

『ああ、あいつ確か木下優子の』

「当然俺も全力を尽くす。」

『確かに何だかやっとな奴だな。』

『小学校の頃、神童と呼ばれてなかったか。』

『てことは、Aクラスレベルが二人もいるってことか？』

今はただのバカだな。

「それに、吉井明久だっている。」

シン…………

凄い一気にテンションが下がった。

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！まったくそんな必要ないよね？せつかく上がってきた士気に下がりがりかけてるし。つて、なんで僕を睨むの！？士気が下がったのは僕のせいじゃないからね！」

「そつだぞ！学年一いや、学園一のバカを呼んだ雄二が悪いぞ！」

「零！僕をフォローしているふりをして、けなしているな！」

「いや、普通にけなしているぞ。」

「なんだと、このヤロー！表に出ろ！」

「お前ら落ち着け。そうか、知らないなら教えてやる。こいつの肩書きは『観察処分者』だ。」

『それつて、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

「ち、違つよ。ちょっとお茶目な」だから、言っただろうつ学園一のバカだと。「16歳に、つて、さつきから何なんだよ。零は。」

「そつだ、バカの代名詞だ。」

「バカ雄二！お前も肯定するな！」

明久が姫路に『観察処分者』について説明してる。

「とにかくだ。俺達の力を証明として、まずはDクラスを征服しようと思う。」

あんなテンションだったのに、無理矢理戻す気か？

「皆、この境遇におおいに不満だろ？」

『当然だ！』

戻っただと！？

どれだけバカなんだこのクラス。

「ならば全員筆を取れ。出陣の準備だ！」

『おおーーーーー！』

「俺達に必要なのはちゃぶ台じゃない！Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーーーーー！』

「お、おおー。」

姫路も雰囲気にはやられて手を上げている。

「明久には、Dクラスへの宣戦布告の使者のなってもらおう。無事大

役を果たせ。」

「まあ、いい。お前の成績を教えてくれ。作戦を練るためにな。」

「ちょっと待ってくれ。今、紙に書く。」

俺は自分の成績を紙に書く。

「ほらよ。明久を拾ってくる。」

俺も教室を出る。

「おう、行ってこい。……………なんだこの点数は！？下手したら
Aクラス並みだぞ。でも、バランスが悪過ぎる。」

Dクラス戦前の昼休み（前書き）

バカテスト 英語

次の文を訳しなさい

『 This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly
y.
』

姫路瑞希

『これは私の祖母が愛用していた本棚です。』

教師のコメント

『正解です。きちんと勉強してますね。』

土屋康太

『これは』

教師のコメント

『訳せたのはThisだけですか。』

吉井明久

『（火星語です。）』

教師のコメント

『出来れば地球上の文字でお願いします。』

哀川零

『俺、今鎖国中です。』

教師のコメント

『早く開国してください。』

Dクラス戦前の昼休み

明久「騙されたー！ー！ー！」

明久をDクラスから拾ってFクラスに戻ると明久が雄二に向かって叫んだ。

あんなんで騙されるお前が悪い。俺も騙したんだがな。

雄二「やはり、そう来たか。」

明久「やはりってなんだよ！使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！零が来てくれなかったら今頃どうなっていたか。」

雄二「それくらい予想出来なくて、代表が勤まるか。第一、零も騙したじゃないか。」

明久「少しは悪びれるよ！零が言ったことは正論だし、助けてくれたからいいんだよ。」

雄二「そついや、零。何なんだこの点数は？」

明久「スルーするな。」

零「いかにも、俺の点数だが。」

雄二「Aクラス並みだぞ。なんでここにいるんだ？」

零「学園長もとい糞ばあとの交渉で、Fクラスに行く代わりにいくつか権限をもらったんだよ。」

雄二「権限ってなんだ？」

零「後で教えてやる。」

雄二「分かった。Dクラス戦はお前は出さないぞ。」

零「端からそのつもりだ。」

おっと、明久がのたうち回っている。

雄二「おい、そんなことより、今からミーティング行こうぞ」

そんなことがあり、屋上に向かった。移動中、明久、島田、ムッツリーニが話していたが、ムッツリーニがドイツ語を知っているので、驚いていた。俺も『折檻』なら分かったぞ。だって一般教育っしょ。

屋上にて

雄二「じゃあ作戦会議を始めようか。明久しつかり時間を伝えてきたか。」

明久「あ、うん。今日の午後から開戦と伝えてきたよ。」

雄二「じゃあ、先に昼食だな。明久、今日くらいまともな飯食えよ。」

明久「そう思うのならパンくらいおごってくれると嬉しいんだけど。」

「
姫路「え？吉井くんって、お昼食べない人なんですか？」

明久「いや、一応食べているよ。」

雄二「あれは、食べていると言えるのか？」

明久「何が言いたいんだよ雄二。」

雄二「だって、お前の主食、水と塩だろ。」

明久「ちゃんと砂糖だって食べているよ。」

零「たいして変わらんわ！」

「
姫路「あの吉井くん、水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ。」

秀吉「舐めるが正しい表現じゃの。」

明久「し、仕送りが少ないんだよ。」

雄二「食費まで遊び代に使うお腹が悪い。」

零「はー明久、3回まわってワンと言ったら弁（クルクルクル）
ワン」当を…………お前にプライドは無いのか？」

明久「プライドじゃ、お腹は膨れない。」

零「分かったよ。分けてやるよ。」

まあ、明久に餌付けするために多めに作ってきたんだがな。

俺は重箱を開く。

零「今回は中華のフルコースを作ってみた。」

全員『は（ええ）—————!?!?』

姫路「すごく美味しそうです。」

美波「これ本当に作ったの?」

秀吉「店で売っているのみたいじゃ。」

康太「……………俺も欲しい。」

雄二「なんなんだこれ!?!」

零「だから、中華のフルコースだって。明久は何が欲しい?」

明久「なんでもいいよ!」

零「ほらよ。」

明久に中華まんを投げる。

明久「冷えてるのに凄く美味しい。」

零「たく、今回だけだからな。他の奴等も好きにつまんでいいぞ。」

雄二「いいのか？この酢豚凄く美味いぞ。」

康太「……………美味。」

秀吉「こんなに美味しい物、久しぶりに食べたのじゃ。」

零「まあ、五つ星のレストランでも出したことがありからな。おい、その二人はどうした。まさか、口に合わなかったのか？」

女性人、二人が箸の動きが止まっている。

美波「確かに凄く美味しいんだけどね……………」

姫路「はい、凄く美味しいんですけど……………」

姫路・美波（もの凄く悔しい。）

明久「これから毎日、こんな食べたいな。」

零「食費を俺の払うなら週一で作ってきてやるよ。」

秀吉「俺が払うのじゃ。」

康太「……………俺も。」

雄二「結構、高い物使ってんじゃないか？」

零「いや、普通の食材だぞ。だが、明久が参加しないなら作らんぞ。」

「

雄二「絶対に明久の生活を変えてみせる。」

明久「なんで、そういう事になるの!？」

康太「明久には、生活費がなくなりそうなら、何も売らない。」

明久「酷いよ。ムツツリーニ!」

零「そうか。頑張れよ。明日はやることあるから作れないがな。」

明久「みんな酷いよ。でも、ありがとう零久しぶりに固形物を食べたよ。」

姫路「そうなんですか!なら、吉井くん明日は私が作ってあげます。」

明久「ゑ。」

零「明久焦りすぎて、字が古いぞ。」

明久「本当にいいの?」

姫路「はい、明日の昼でよければ。哀川くんには劣ると思いますが。」

明久「全然いいよ!」

雄二「良かったな。愛妻弁当だぞ。」

姫路「愛妻弁当だなんて。」

康太「……………殺したい程妬ましい。」

美波「ふーん、瑞希って随分優しいんだね。“吉井だけ”に作ってくるなんて。」

凄い嫉妬だな。島田、それは吉井が好きって、言ってるようなもんだぞ。本人以外は気付いているぞ。

姫路「あ、いえ、皆さんにも。」

雄二「えっ、俺達にもいいのか？」

姫路「はい、嫌じゃなかったら。」

秀吉「それは楽しみじゃな。」

康太「……………（コクコク）」

美波「お手並み拝見ね。」

姫路の実力なら、被害者が増えるだけなんだがな。

明久「ありがとう姫路さん。僕、初めて会う前から君のこと好き。明久、今振られると明日の弁当がなくなるぞ。……………にしたいと思ってきました。」

秀吉「明久、それでは欲望をカミングアウトしたただの変態じゃ。」

雄二「お前はたまに、俺の想像を超えた人間になる。」

零「他に回避の方法は無かったのか？それに、『初めて会った時から』だろうが。」

姫路が全く引いてないし、それに、なにその計画通りって顔。

明久「うう、だってお弁当が。」

零「悪いな。俺は明日の昼は戦争のためにやりたいことがあるからな。」

雄二「何をやる気だ？」

零「確実に有益になることさ。まあ、俺に任しな。」

雄二「そうか。それなら、弁当は俺達だけでいただくか。」

零「明日のためにも、まずは今日のことだろ。」

雄二「ああ、そうだな。それなら本題に入ろう。」

秀吉「一つ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？段階を踏んでEクラスだろうし、勝負に出るならAクラスじゃし。」

雄二「理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからだ。」

明久「え？だって僕達よりクラスは上だよ。」

雄二「振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれないが、実際のところは違う。周りの面子をよく見てみる。」

明久「えーっと……………美少女が二人とバカが二人とムツツリと料理人が一人ずつだね。」

雄二「誰が美少女だ！」

明久「ええっ！雄二が美少女に反応するの！」

康太「……………（ぼっ）」

明久「ムツツリーニまで!?!」

零「お前にバカ呼ばわりされると思わなかった。飯までくれてやったのにな。」

明久「零に感謝してるから！そんなこと思ってないし！どうしよう、僕だけじゃ突っ込みきれない！」

秀吉「まあまあ、落ち着くのじゃ、代表にムツツリーニに零。」

零「秀吉、お前は美少女扱いされてることに気付け。」

雄二「ま、要するにだ。姫路に問題がなく、零がいる今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスとやり合っても意味がないってことだ。」

美波「それなら、Dクラスとは正面からぶつかったら厳しいの？」

雄二「ああ、確実に勝てるとは言えないな。」

明久「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ。」

雄二「初戦だし景気付けにしたいんだよ。それに打倒Aクラスに必要なプロセスなんだよ。」

姫路「あ、あの。」

雄二「どうしたんだ姫路？」

姫路「え、えつと。坂本さんと吉井くんは前から試召戦争をしようと話しあっていたんですか？」

雄二「それはな、明久が大好きな姫「それは、そうと。」

明久「そこまではれたくないのか。」

明久「さっきの話、Dクラスに勝たないと意味がないよ。」

雄二「お前達が協力してくれるなら勝てるさ。いいかお前達、俺達のクラスは

最強だ。」

美波「いいわね。面白そうじゃない？」

秀吉「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの。」

康太「……………(グッ)」

姫路「が、頑張りましょう。」

零「100パーセント勝てるようにしてやるよ。」

雄二「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう。」

こうして、俺達は作戦に耳を傾けた。

Dクラス戦（前書き）

バカテスト数学

(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのはどれか、 $?$ の中から選びなさい。

? $\sin A + \cos B$

? $\sin A - \cos B$

? $\sin A \cos B$

? $\sin A \cos B + \cos A \sin B$

姫路瑞希

(1) $X = \frac{\pi}{6}$

(2) ?

教師のコメント

そいですね。角度を『 \circ 』でなく、『 π 』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太

(1) $X = \text{およそ } 3$

教師のコメント

およそをつけてごまかしたい気持ちも分かりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久

(2) およそ？

教師のコメント

先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつけた生徒は君が初めてです。

哀川零

(1) X || 3 . 1 4 1 5 1 6 …… (裏面まで円周率を書いてある)

……… 無理だ書ききれない。

(2) ?????? のどれか。

教師のコメント

円周率を全て書こうとしないで、『』で構いません。それと、(2)はズルいと思います。

Dクラス戦

うん。始まったな。

俺は今、教室でコンピューターを使って学校の様子を見ている。

仕事のデータ管理でカメラの内容も見れるからな。
職権乱用。

で、戦況はと。

鉄人『さあ、来い！負け犬が！』

ザコ『て、鉄人！？い、嫌だ補習室は嫌なんだ！』

鉄人『黙れ！捕虜は全員この戦争が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるか分からんが、たっぷりと指導してやるからな。』

ザコ『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐えられない！』

鉄人『拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬する人は二宮金治郎、といった理想的な生徒に仕上げてやるう。』

前から思っていたんだが、それは洗脳じゃないか？

それより、

零「雄二、多分明久達逃げるぞ。」

雄二「ん、それじゃあ。横溝、伝達してこい。『逃げたら殺す』と。」

零「俺からも『女装した写真をばらまく』と。」

横溝「了解!」

雄二「なんで、そんな物持ってた?」

零「ムツツリーニ商会の会計になった。」

雄二「なるほど。」

明久『総員突撃!』

零「バカは単純でいいな。」

雄二「同感だ。」

零「雄二、悪い情報だ。」

雄二「なんだ?」

零「お前が使おうとしているAクラス戦の作戦は失敗するぞ。」

雄二「な、何!??どういう事だ!第一、お前に作戦が分かっているのか?」

零「分かっているよ。『無事故の改新』だろ。」

雄二「なんでお前がその作戦を知っているんだ!？」

零「俺は大抵のことは分かっているぞ。お前が変わろうと思った時のこともな、だがな、それじゃあつまらないから、変えようと思っている。」

雄二「お前は何者なんだ？」

零「俺か？俺は、

暇人

遊び人、

請負人、

詐欺師

偽善者

大泥棒

欠陥製品、

人間失格、

まあ、ただの技術者だ。このことは内密にしといてくれ。」

雄二「わ、分かった。(今、こいつの空気が変わった)」

零「そうか、良かった。それでAクラス戦はお前の成績の悪さで負けるぞ。」

雄二「何？小学生レベルの問題だぞ。いくらなんでもそれはないだろ。こつ見えて元神童だぞ。」

零「『元』だろ。じゃあ、1919年には何があった？」

雄二「……………くっ。」

零「やっぱりな。ちなみに三・一独立運動だ。分かったら勉強しろ。」

雄二「ちっ、分かったよ。」

須川「代表！吉井が教師達に偽情報を流してほしいと言っているんだが、どういづのを流そうか？」

零「ちようどいいな。どうする？」

雄二「さて、どうするかな。」

零「面白い案があるんだが、耳を貸せ。」

零「……………」。

雄二「確かに面白い案だな。須川、今から俺が言うことをそのまま流してくれ。」

数分後

ピンポンパンポーン！

『連絡致します。』

『船越先生、船越先生。』

『吉井明久が体育館裏で待っています。』

ククククク

『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです。』

ぷっはははははは！

このシーンは絶対に必要だよな。隣で雄二も笑ってるしな。

吉井『須川—————！』

須川ガンバ

雄二「そろそろ俺達も動くぞ。」

零「明久達を拾ってくるのか。」

雄二「ああ、戦死する前に拾ってこないとな。」

雄二達が出ていく。

そのまた数分後

明久達に戻ってきた。

雄二「明久良くやった。」

珍しいな明久を褒めるなんて

明久「校内放送、聞こえた？」

雄二「ああ、バッチリな。」

明久「それよりも、須川君がどこにいるか知らない？」

雄二「もう少ししたら帰ってくるんじゃないか。」

零「その包丁はどこから持ってきたんだ？」

明久「これは家庭科室から持ってきたんだ。やれる！今の僕ならやれる！」

零「いや、やるなよ。」

雄二「ちなみにだが……あの放送を流したのは零だ。」

明久「シャアーーー！」

零「あぶねっ！雄二なんてこと言いやがる。雄二がアレンジしたんだろうが！」

明久「絶対に二人の息の根を止める。」

零・雄二「あつ船越先生。」

ドン！ガラガラバタン！

凄いな。こいつの行動力。

零「船越先生のことは嘘だ。」

雄二「何を言っただやがる！」

零「明久、またただで弁当作ってやるから。今回の俺のことは水に流せ。」

ダッ！

雄二が逃げた。

明久「零、お弁当のこと約束だよ。待て雄二ー！ー！ー！ー！」

明久も出ていく。

流石、バカは凄く使い安いな。

数分後

『勝者Fクラス』

さて、戦後対談で権利を使いますか。

やっと、原作を崩壊させられる。

Dクラス戦（後書き）

更新が凄く遅くてすいません。

次回、修復不可能になるくらいまで壊します。

Dクラス戦後対談（前書き）

更新が果てしなく遅れてしまってますみません。
更新したのでどうか読んでくれると嬉しいです。

バカテスト 物理

次の（ ）に入る言葉を書き入れなさい。
『光は波であって、（ ）である。』

姫路 瑞希

（粒子）

教師のコメント
良く出来ました。

土屋 康太

（よせて帰すの）

教師のコメント
君の答えは、いつも先生の度肝を抜きます。

吉井 明久

(勇者の武器)

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

哀川 零

(中二病が闇属性と一緒に好む属性)

教師のコメント

何ですか！？その解説は。

Dクラス戦後対談

雄二「やっと来たか。戦後対談をお前が来るまで待てとは、どういふことだ？」

零「悪いな、雄二。今後のことを有利に進めるために必要なことだからな。話を始めていいぞ。」

雄二「分かった。平賀、Fクラスとのクラス設備交換をしなくてもいいぞ。」

平賀「それは本当か!？」

雄二「ああ、こちらの条件をのめばな。」

平賀「条件?一応聞かせてもらおう。」

雄二「俺が指示をしたら、あれを動かなくしてほしい。」

零「そこに条件を追加してもらおう。おい、清水、玉野。」

俺は途中で拾ってきた、清水と玉野を呼ぶ。

零「この二人をFクラスの二人と交換してもらおう。」

平賀「どういふことだ!？」

雄二「そんなこと出来るのか!？」

零「ああ、これが俺のFクラスにきた代償の最大の特権だ。まあ、本人達に了承を得ないといけないがな。」

清水「美春達はまだ、了承してませんよ。」

零「今から了承させるんだよ。清水、もしFクラスに来たら島田と一緒にいられる時間が増えるぞ。まあ、制限は付けさせてもらうがな。」

清水「お姉様と一緒に……。分かりました了承します。」

零「じゃあ、これにサインしておけ。」

清水に条件を書いた契約書を渡す。

零「さて、玉野、お前には、これをやろう。」

玉野「写真？なんの写……。何この娘、可愛過ぎる。」

雄二「おい、零。何の写真を渡したんだ？」

零「明久の女装写真だ。」

雄二「そんなのでいいのか!？」

零「俺の情報を舐めるな。おい、玉野。その写真をやるから契約しろ。」

契約書を渡す。

玉野「うん、するわ。」

零「おい、平賀。この条件をのむか。」

平賀「彼女達が了承してしまったんだから、のむしかないだろ。」

零「まあ、そうだな。」

雄二「では、室外機の壊すタイミングについては、後日詳しく話す。」

平賀「そっちの方の条件を引き抜きの方がインパクトがあって、忘れてたな。」

まあ、確かにこの権限は、インパクトが高いな。

平賀「お前らがAクラスに勝てるように願ってるよ。」

雄二「ははっ、無理するなよ。勝てっこないと思ってるだろ。」

平賀「それは、そうだろ。AクラスにFクラスが勝てるはずがないだろう。ただの社交辞令だ。」

そう言っつて平賀は去って行く。

雄二「そっぴや、Fクラスからよく変わる奴がいたな。」

零「あいつらは、バカだから女子がDクラスの方が多いぞ。と言ったらすぐに食い付きやがった。」

雄二「そ、そうか。」

明久「やっと、終わった？雄二、零、一緒に帰ろうよ。」

零「別にいいが、お前教科書を忘れたとかないよな？」

明久「うん、僕だってそんなバカなことしないよ。」

零「なっ、ああ、そうだよな。」

おかしいぞ。ここは、明久は教科書を忘れて教室に取りに帰って、ラブレターを持っている姫路と会うところだぞ。今回、原作を壊し過ぎたからか。

明久「零、どうしたの？帰るよ。」

零「あ、ああ。分かった。」

明久「そういえば、零はどこに住んでるの？」

零「ババアに結構広い家をもらってたな。」

明久「そうなんだ。じゃあ、帰ろっか。」

Bクラス戦前（前書き）

バカテスト 化学

ベンゼンの化学式を答えなさい

姫路 瑞希

C6H6

教師のコメント
簡単でしたね。

土屋 康太

ベン+ゼン=ベンゼン

教師のコメント
君は化学を舐めてませんか。

吉井 明久

BEEZIEIN

教師のコメント
後で土屋君と職員室に来るように。

哀川 零

C3H5N3O9

教師のコメント

それは、ニトログリセリンの化学式です。

Bクラス戦前

さて、今日はBクラス戦か。

ボカ

島田と明久が騒がしいな。

明久の顔が三倍位に腫れてるな。

零「騒がしいな。どうしたんだ？」

島田「聞いてよ！吉井のせいで、彼女にしたいランキングが上がっちゃったんだから！」

零「安心しろ。女子からの人気は上がったらしいから。それに、明久には罰がくらう。」

島田「安心出来ないわよ！でも、罰って何よ。」

零「明久。今日の数学の担当だが、船越先生だそうだ。」

ダッ、バタン。

明久「いつの間に、足に手錠が!？」

零「逃げると思って用意しておいた。」

島田「そうなの。気が済んだわ。」

零「そういう所を言ってたんだ。まあ、いい。Fクラス哀川　零が
Cクラス代表に模擬試召戦争をしかける。」

小山「Fクラスの屑が、受けて立つわ！叩き潰してあげるわ！」

零「ただやるんじゃつまらないから、負けた方はなんでも一つ言う
ことを聞くって、いうのはどうだ？」

小山「いいわ！勝って土下座させて謝らせてあげるわ！」

零「それじゃ、教科はCクラスの担任の物理で、サモン試獣召喚。」

小山「後悔させてあげる。サモン試獣召喚！」

二人の召喚獣が同時に現れる。

小山の召喚獣は、派手なドレスに扇子を持っている。

零の召喚獣は、黒いコートを着ていて、何も持っていない。

小山「あの召喚獣、武器を何も持っていないわ！やっぱり、Fクラ
スの雑魚ね。」

次の瞬間、小山の召喚獣の首と胴体が離れる。

小山「なっ、何が起こったのよ!？」

『小山　友香VS哀川　零

物理　146VS387』

小山「なんなのよ。その点数、本当にFクラスなの？」

零「真正正銘Fクラスだよ。さて約束通り、一ついうことを聞いてもらおうか。」

小山「何をすれば、いいのよ？」

随分と静かになったな。

零「これにサインしてもらおうか。」

契約書

? 指示をされた時に、Aクラスに試召戦争をしかける。

? 模擬試召戦争をFクラスの生徒にしかけない。

? この契約について、クラス外に口外してはいけない。

? この契約を破った場合、一年間、哀川 零の何でもいうことを聞く。

小山「いうことを聞くのは、一つだけよ!」

零「ああ、そうだよ。だから、これにサインをしるとしか言っていないだろ。」

小山「この卑怯者。」

零「お前の彼氏に言ってやりな。」

小山「くっ、分かったわよ。」

零「それじゃ、タイミングは後で伝える。破ったら分かるようになってるからな。」

零は、Cクラスを去る。

Fクラス

零「おっ、雄二達戻ってたのか。姫路の弁当は旨かったか？（良く生きてたな。）」

雄二「ああ、旨かったぞ。（てめえ、薬品入りだと知ってたのか！）」

明久「そうだよ。零は勿体ないことをしたな。（よくも、僕達を見捨てたな！）」

おっ、アイコンタクトで返してきた。

零「すりゃあ、残念だな。（自分の命より、大切な物なんてあるか）それで、次の相手はBクラスか？」

雄二「ああ、そうだ。（今度、絶対にぶっ殺してやる！）」

明久「よく、分かったね。（夜道には、気お付ける！）」

おお、こわっ。

秀吉「零は何処に行っておったのじゃ？」

零「後で教えるよ。それより、気おつけないな。Bクラス代表は根本だからな。」

明久「あの卑怯者が。」

根本　恭ニカンニングの常習犯、喧嘩に刃物は当たり前などがそろった卑怯者。

零「だから、雄二はシャーペンなどの文具をいくつか確保しておけ。みんなは大事な物は肌身離さず持っておけよ。」

こうしておけば、姫路のラブレターは平気だな。

さて、Bクラス戦の開幕だな。

Bクラス戦（前書き）

夜月 陽日さん

お気に入り登録ありがとうございます。

バカテスト 英語

goodおよびbadの比較級と最上級を答えよ。

姫路 瑞希

good - better - best

bad - worse - worst

教師のコメント
その通りです。

吉井 明久

good - gooder - goodest

教師のコメント
まともな間違え方で先生は驚きました。

土屋 康太

bad - batter - bast

教師のコメント

悪い 乳製品 おっぱい

哀川 零

G O T - G O T E R - G O T E S T

神 四大神 最上神

D E A D - D E A D E R - D E A D E S T

死 地獄に落ちる 無限地獄

教師のコメント

問題の単語まで違います。後で職員室に来なさい。

Bクラス戦

雄二「さて、みんな総合テストご苦労だった。午後からBクラス戦に突入するが、殺る気はあるか？」

おいおい、漢字が違うぞ。

『ウォーーーーー!!』

元気がいいね。なんか良いことあった？

雄二「そこで、前線部隊は姫路に指揮をとってもらおう。野郎共、キツチリ死んでこい。」

『ウォーーーーー!!』

おっと、話が進んでるって、死んでいいのかよ!?

キンコンカンコン

おっ、開始の合図か。

雄二「よし、逝ってこい。目指すはシステムデスクだ!」

『サー、イエッサー!』

また、漢字が違うし。

さて、いくつか小細工しておいたから、あの卑怯者の思い通りには

ならないだろう。前線に行ってくるか。」

廊下

うわあ、結構殺られてるな。」

明久「あつ、零。来てくれたんだ。」

零「一気に殺るから、ちよつとさがれ。」

雑魚A「何よ！Fクラスのくせに。」

雑魚B「そつだ！ボコボコにしてやるつぜ！」

雑魚C「ていうか、雑魚つて、表記は酷くない!？」

零「あのヒステリックと同じことばかり、いうなよ。えつと、物理
でその雑魚キャラ10人に仕掛けます。試験^{サモン}召喚。」

明久「そんなにたくさん大丈夫なの？」

《雑魚×10 物理平均150

哀川 零 物理376》

明久「多分、大丈夫だね。」

雑魚D「なんなのあの点数!？」

雑魚E「焦るな！こつちが数は上だ！」

さて、Cクラスでは武器が何がなんだったか明かさなまま、終わってしまったから、今回は種明かしをしよう。

俺の武器は曲弦系、簡単に言ってしまうえば、見えない糸である。扱いは難しいが相手を縛ったり、切り刻んだり出来る優れ物だ。

だから、雑魚が突っ込んできたら、

雑魚×10『うおー！』

その瞬間、召喚獣の四肢がバラバラになる。

雑魚×10『えっ!?!』

鉄人「戦死者は補習。」

雑魚×10『ギャー！！』

零「なんか、息があつた雑魚だったな。」

Fクラス「すげーよ。哀川！」

Bクラス「哀川 零、あいつは姫路以上の化物だ！」

化物って、酷くない？否定はしないけど。

秀吉「明久、零。そろそろ教室に戻るぞ。根本が何か仕掛けてくる頃じゃ。」

明久「うん、分かった。」

零「了解。」

Fクラス

明久「うわ、これは酷い。」

秀吉「まさか、こっくるとはのう。」

零「予想通りだな。」

ちやぶ台には穴が開けられ、シャープペンは折られていた。

しかし、

雄二「零が情報提供してくれたおかげで、被害を軽減できたがな。」

秀吉「流石じやのう零。」

明久「でも、どうしてそんなこと分かったの？」

零「企業秘密です。」

明久「ハ？ヒねた！？」

雄二「明久、あまり聞いてやんな。」

零（サンキュー！雄二。）

雄二（貸し一ツな。）

明久、結構鋭いな。危ないな。

秀吉「でも、何故雄二達はいなかったのかのう？」

雄二「協定を結んでいたからな。」

零「俺は少しやることがあるから、抜けるぞ。」

雄二「分かった。」

小細工第二段と行きますか。

パソコンを開き、おー写ってる。写ってる。

これが第二段、監視カメラ。

こいつで、犯人の顔から名簿で電話番号を調べて、利用させてもらいますか。

数十分後

雄二「零、Cクラスに行くぞ。」

零「雄二、協定なら必要はないぞ。」

雄二「何故だ？」

零「今日の昼休みに手を打っておいたからな。貸し一つに充分だろ。」

雄二「お前に貸しを作るのは、骨を折りそうだな。」

零「生き残っている奴を全員、集めてくれ。今から一気に叩く。」

雄二「お前が言うなら确实だな。」

Fクラスの生き残りが集まる。

零「Cクラスで、根本が待ち伏せしてるはずだ。さて、何故CクラスがBクラスに手を貸していると思う？」

須川「弱みでも握ってるんじゃないか？」

清水「あの屑ならあり得そうですね。」

クラスからそれだな。という声がいくつも聞こえてくる。

零「それが違うんだな。」

島田「それじゃあ、何でなの？」

零「卑怯者根本は、ヒステリック小山と付き合っている。」

FFF団『異端者には、死の制裁を！！！！』

スゲー言って一秒掛からずに黒いマントに着替えたよ。

零「Cクラスに今から行くから、合図をしたら一気に根本をぶつ殺せ！」

FFF団「イエス、サー！」

Cクラス

雄二「Cクラス代表はいるか？」

小山「私だけど何かしら？」

雄二「ああ、協定についてなんだが、」

根本「今だ！協定違反だ！坂本の首を取れ！」

隠れていた根本とBクラスが現れる。

雄二「協定違反？なんのことだ。俺はただ、零の協定の確認にきただけなんだがな。」

根本「何！？友香、裏切ったのか！？」

零「良かった。ちゃんと約束を守ってくれて。」

小山「しょうがないでしょ。協定は協定なんだから。」

零「でも、何で屑が先生を連れてこんな大勢でいるのかな？ああ、協定違反か。じゃあ、やり返されてもしょうがないな。須川。」

須川「諸君、男とは？」

FFF団「愛を捨て、哀に生きる者！」

須川「異端者には？」

FFF団「死の制裁を！」

須川「よろしい！殺れ。」

FFF団「ウォーーーーー！」

根本「お前ら、俺をまもれ。」

根本はBクラス生徒に命じるが、Bクラス生徒は根本から離れていく。

零「お前、人望無さ過ぎだな。」

さつき、行ったのは根本を嫌っている奴らに、電話してクラス設備に手を出さないことと、根本の弱味を作ってやるということを伝えた。

零「地獄に落ちろ。」

根本「ギャーーーーー！」

勝者Fクラス

Bクラス戦後対談（前書き）

形無人種さんお気に入り登録ありがとうございます。

バカテスト 保健

（ ）の中をうめなさい。

女性は（ ）迎えることで第二時性長期になり、特有な体つきになる。

姫路 瑞希

（初潮）

教師のコメント

正解です。

吉井 明久

（明日）

教師のコメント

随分と急な話ですね。

土屋 康太

（初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では以下省略）

教師のコメント

裏面までびっしりと詳しく過かです。

哀川 零

繁殖期

教師のコメント

動物じゃないんですから。

Bクラス戦後対談

雄二「それじゃあ、嬉し、恥ずかし、戦後対談といこうか。な、負け組代表？」

根本「……………」

クラスに裏切られて、威勢が無くなっちまたな。

雄二「本来ならお前達に素敵なちやぶ台をくれてやるんだが、零が約束をしていたから条件を飲めば特別に免除してやるう。」

Fクラスがざわざわし始める。

雄二「落ち着け、みんな。前にも言ったが、俺達の目標はFクラスだ。ここがゴールじゃない。」

みんなが納得する。

根本「条件はなんだ？」

雄二「条件？それは、お前だよ負け組代表。」

根本「俺だと？」

雄二「ああ、お前には散々やってもらったし、去年から目障りだったんだよ。」

反論が出来ないなんてな。

雄二「そこでお前達にチャンスだ。」

その条件だけじゃ、済ませる気はないがな。

雄二「Aクラスに行って、試召戦争の準備が出来ていると宣言してこい。そうすれば見逃してやる。ただし、宣戦布告はするな。準備がしてあるとだけでいい。」

根本「……………それだけでいいのか？」

零「それだけでいいと思ってるのか？お前は卒業するまで、言うことを聞いてもらおうか。」

根本「ふざけるな！これは、出す気はなかったがこいつを見る！」

姫路のラブレターのような物を出す。

根本「こいつを公表してもいいのか？」

姫路「あっあれは！？でも……………」

姫路はポケットから同じ封筒を出す。

根本「なんで、同じ物が2つもあるんだ！？」

零「それは、俺のだ。中には発信機と盗聴器が入ってる。悪いな、姫路お前の封筒の形を見たのと、カバンにあれを入れちまって。」

これが最後の小細工だ。こいつで徹底的にあの屑をつぶす。

零「お前の最終手段は無いよな。てめえみたいな屑がやることなんて目に見えてるしな。つーか、その髪型カッコいいとか、思ってるの？どう見てもキノコじゃん。喋るなよ、胞子が飛ぶから、お前みたいなの煮ても焼いても食えない、毒キノコが増えても困るからな。滅びればいいのになー。」

秀吉「零よ。途中からただの悪口になってるのじゃ。」

零「おつ、悪い悪い。さて、器物損害に窃盗罪のキノコ君、ああ、あとカンニングまでしてたよな？退学して警察のお世話になるか、俺との契約を結ぶかを選ばせてやるよ。」

キノコ「この悪魔が！」

零「悪魔？あんな契約しないと悪事出来ない奴と一緒にするなよ。契約させるなら強制的にだろ。で、どうするんだよ、キノコ君？」

キノコ「……………契約する。」

零「これに名前を書け。」

契約書

二年間、哀川 零の言うことを聞く。

キノコ「書いたぞ。」

零「じゃあ、これからは女装で学園生活を送ってもらおうかな。」

キノコ「くっ、……………分かった。」

小山「恭二、あなたと別れるわ。」

キノコ「待ってくれ。た、頼む。」

明久「雄二……………零が味方で良かったね。」

雄二「ああ、俺も今そう思ってたところだ。」

零「玉野、こいつで着付けの練習していいぞ。」

玉野「うん。アキちゃんの時に失敗しちゃダメだからね。」

明久「アキちゃんって、もしかして……………考えないようにしよう。」

明久が現実逃避してるな。

数分後

玉野「終わったよ。」

根本「くっ……………。」

全員『誰っ!?!?』

玉野が美女を連れてきた。

玉野「土台が屑だから結構、時間がかかった。」

零「ここまで変わるとは。まあ、いいや。ヒステリック、明日にAクラスに試召戦争してこい。」

小山「分かったから、ヒステリックって呼ばないで！」

零「しゃあないな。分かったよ。根本はとっとうと行ってこい。」

根本が教室を出る。

雄二「じゃあ、明日は休みだな。」

零「そうだな。ちゃんと勉強をしたよな？」

雄二「分かってるよ。言われてから、徹底的にやってるよ。」

零「それならいいが。じゃあ、みんな帰りだ。」

明久と姫路は二人で話してるみたいだな。

さて、俺も帰るかな。

Aクラス戦前日（前書き）

バカテスト 家庭科

人間が生きていくのに必要な五大要素を答えなさい。

姫路 瑞希

? 脂質 ? 炭水化物? たんぱく質 ? ビタミン? ミネラル

教師のコメント

さすが姫路さん、優秀ですね。

吉井 明久

? 砂糖 ? 食塩 ? 水道水 ? 雨水 ? 湧き水

教師のコメント

それで生きていけるのはあなただけです。

哀川 零

? ぬるい友情 ? 無駄な努力 ? むなしい勝利 ? 歪んだ友情
? 冷たい笑い

教師のコメント

どこの - 13 組ですか。

土屋 康太

初潮年齢が十歳未満の時を早発月経と言う。 〃〃

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

Aクラス戦前日

Bクラス戦から1日後

昼休み

零「やっとテストが終わったな。」

雄二「一教科しかやってない奴がなにを言ってるんだ。」

零「あつ、ばれた?」

雄二「分からないのは、明久くらいだろ。」

明久「いや、そこまで僕もバカじゃないよ!」

零「いや、明久よりバカが二人だけ知ってるぞ。」

明久「華麗にスルーしないでくれない?」

雄二「なつ、何!?!それは本当か?そんな事があるなんて。」

明久「雄二までスルーするな。」

零「世界は広いな。」

明久「……………ねえ。」

雄二「今度、会ってみたいな。」

明久「……………」。

零「多分、そいつに会って感謝をしつつ、殴ると思うぞ。」

明久「……………（しくしく）。」

雄二「どんな状況だ！？悪い明久、だから声を抑えて泣くな。」

零「弁当をまた、持ってきたから泣きやめ。」

明久「……………本当に？」

涙目で見えてくるな。

零「本当だが、一緒に飯を食えたらな。」

明久「何を言っ「アキちゃーん！」うわあー！」

明久が玉野に連れてかれた。

雄二「あいつ、大丈夫か？」

零「多分、昼飯には一緒に行けると思うが。」

雄二「じゃあ、さきに他の奴らと呼ぶか。康太、秀吉、屋上で昼飯食わないか？」

康太「……………分かった。」

秀吉「ご一緒させてもらうのじゃ。」

零「じゃあ、明久を呼ぶか。明久、早く来ないと飯抜きだぞ！」

明久「はい！」

一瞬にして巫女服の明久が現れる。

零「大丈夫……………じゃなさそうだな。」

康太「……………いい被写体だ。」

明久「見ないで、そんな目で見ないでよ！ちょっとムツツリーニ、何撮ってるのさ！」

康太「……………被写代としてこれを。」

秀吉の巫女服姿の写真。

明久「今回は多目に見よう。」

零「現金な奴だな。」

秀吉「ムツツリーニ！その写真をこっちによこすのじゃ。」

雄二「なんでもいいが早く屋上に行くぞ。」

零「置いていったほうが良さそうだな。」

先に零と雄二が屋上に行く。

屋上

雄二「さて、お前にはAクラス戦の作戦は分かってるんだろ？」

零「まあな。一つだけ宣言しておくが、今回で霧島との決着を確実につけるよ。最後の霧島との戦いにするからな。」

雄二「最後？どういう事だ！？」

零「少なくとも今年での試召戦争では戦えないな。後のことの為にやらないといけないことがあるからな。」

雄二「それは、絶対にやらないといけないのか？」

零「念のためだが、クラスの為だぞ。代表さん。」

雄二「くっ、ここで代表扱いするのは、卑怯だろ。」

零「知るか。だから、勝てよ。絶対に。」

雄二「……………分かった。お前には世話になったからな。」

零「この話はこれで最後だな。」

明久「何の話してたの？」

ちようどいいタイミングで明久が来た。

雄二「零に昨日の昼休みに話した話をしてたんだよ。」

秀吉「零は昨日居なかったからのう。」

零「明久、着替えなかったのか？」

明久は巫女服のままだった。

明久「着替えてたら、零の弁当が食べられないからね。」

それでいいのか？

零「ほらよ。ハンバーガーを作ってみた。」

雄二「そんな物まで作れるのか？」

零「作り方は簡単だからな。」

そんなこんなで昼飯は終わった。

明久「そういえば、零のBクラス戦凄かったね。」

零「そうか？」

秀吉「そうじゃろう。10人も相手にしたんじゃないからのう。」

康太「……………糸が見えた。」

零「さすがだな、康太。曲弦糸が見えたなんて。」

明久「曲弦糸？」

零「曲弦系は、強度の高い系でいろんな力を使って切断するんだよ。」

雄二「そんなのコントロールしきれないだろう。」

明久「僕みたいに観察処分者じゃないんだしね。」

零「それは、そうなんだが俺の召喚獣は少しいじくってあって3パターンほどよく使うモーションをインプットしてあるんだよ。」

明久「いじくるって、すごいけどそれってズルくない？」

零「だが、欠点もあるさ。そのモーションを使ってる最中は、他のことが出来ないからな。」

雄二「なるほどな。攻撃のパターンが少ないって、ことか。」

零「その通り。3つのパターンでしか、スムーズに攻撃出来ないんだよ。」

キンコーンカーンコーン

秀吉「切りのいいところで昼休みが終わったの。」

零「とつとと戻るか。」

俺の召喚獣について話が終わったところで昼休みは終わった。

放課後 Fクラス

今、雄二がAクラス戦の作戦について話している。

姫路「あのう……霧島さんと坂本くんって仲がいいんですか？」

雄二「ああ、俺と翔子は幼なじみだ。」

明久「総員、狙え！」

明久の号令で全員が上履きを構える。

雄二「なっ、なんだお前達！？」

明久「うるさい！黙れ！あんな美人と幼なじみなんて！須川くんまだ、靴下は早い。あいつが気絶したあとに口に押し込むから。」

須川「了解です。隊長！」

いつの間にか明久が隊長になってる。

姫路「吉井くんって、霧島さんに興味があるんですか？」

明久「えっ、ああ、うん。霧島さんは綺麗だしって、姫路さんなんに僕に向かって上履きを構えてるのさ！？それに、美波は教卓なんて大きな物を持ち上げてどうする気！？」

俺が作る前にカオスになってるな。

パンパンパン

秀吉「みんな落ち着くのじゃ。」

明久「秀吉は雄二が憎くないの？」

秀吉「別に、第一あの霧島じゃぞ。雄二に興味があるとは思えん。」

秀吉の一言でみんなが上履きをおろす。

零「どうしてそうなるんだ？」

明久「霧島さんはどんな人から告白されても、ことっているから同姓愛者って噂があるんだよ。」

零「バカかお前ら。断っている理由は他に好きな奴がいるからだろう。例えば、雄二とか。」

明久「総員、構え直せ。」

また、全員構える。

秀吉「何をやっておるのじゃ零。せつかく落ち着いたのに。」

零「悪い悪い。この状況をもう少し見たかったからな。」

雄二「てめえ、この状況なんとかしろ！」

零「てめえ？なんとかしろ？それが人に頼む言葉か？」

雄二「もともとてめえのせい、危ね！くっ、分かったよ。頼む、な

んとかしてくれ。」

零「お願いします。なんとかしてください。」

雄二「ちくしょう、足下を見やがって！ああ、もう。お願いします。なんとかしてください。これでいいだろ。」

零「そこまで言うならやってやろう。お前ら、雄二はAクラス戦に必要なだからそこらへんで止めておけ。」

明久「いや、こいつは殺さないと気が済まない！」

零「じゃあ、こうしよう。雄二がAクラス戦で霧島に負けたら死んでもらおう。ちなみに、俺のコレクションを貸してやる。」

明久「コレクションって？」

零「銃刀法違反をかいくぐって手に入れたレア物だ。」

雄二「ちょっと待て！本当に死ぬぞ！」

明久「しょうがない。その提案を飲もう。」

雄二「飲むな！今、軽く食らった方がマシなような気がする。」

零「何、雄二。霧島に勝つ自信がないの？そんなにAクラス戦を倒すとか言ってたんだ。」

そーだ。とクラスから上がる。

雄二「ちきしょう。絶対勝ってやる。」

零「それじゃ、Aクラスに行きますか。」

「こんだけ脅しとけば、雄二でも負けないだろう。」

Aクラス戦宣戦布告（前書き）

バカテスト 歴史

バルト三国と呼ばれる国名を全てあげなさい。

姫路 瑞希

リトアニア エストニア ラトビア

教師のコメント

その通りです。

土屋 康太

アジア ヨーロッパ 浦安

教師のコメント

土屋さんの国の定義が気になります。

吉井 明久

香川 徳島 愛媛 高知

教師のコメント

正解、不正解の前に数が合わないことに疑問を持ちましょう。

哀川 零

バベルの塔

教師のコメント

ちゃんと、バルトの順番になってることが腹立たしいです。

Aクラス戦宣言布告

Aクラス

優子「一騎討ち？」

宣言布告中です。

雄二「そうだ。FクラスはAクラスに代表同士の一騎討ちを申し込む。」

優子「何を企んでいるのかしら？」

雄二「Fクラスの勝利それ以外に目的はない。」

優子「面倒な試召戦争を手っ取り早く終わらせるのはいいけれど、わざわざリスクを侵す必要はないかな。」

雄二「懸命な判断だ。そういえば今日のCクラス戦はどうだった？」

優子「時間をとられただけよ。」

雄二「Bクラスとやり合う気は？」

優子「Bクラスって、昨日来てたあの女装野郎？」

雄二「すごいだろ。うちのクラスの奴がやったんだ。さて、まだ、
宣言布告はされてないようだが、この先はどうなるかな？」

優子「BクラスはFクラスに負けたから、宣戦布告は出来ないの
しょう。」

雄二「ところがどっこい、和平交渉って、ことになっているから、
出来るんだよ。」

零「しかも、Dクラスも和平交渉って、ことになってるぞ。」

優子「脅されてる訳ね。」

雄二「そんな、ただのお願いだよ。」

優子「Fクラスのくせして。」

零「おいおい、優等生の仮面が外れてるぞ。腐女子さん。」

優子「なっ、何を言っているのよ!」

ずっと俺のターン

零「いやあ、まさかあの優等生の木下優子がああいう薄い本を家で
下着で読んでるなんてね!」

優子「そんなの言いがかりよ!」

零「俺の情報は確実だぞ。」

優子「まさか、秀吉ね。お仕置が必要だわ。」

秀吉「わしは、関係無いのじゃ!」

零「その通り、秀吉は関係無い。お仕置きって、何をやるのかな？
関節技を決めるなんてしないよな？そんなことしてるから、秀吉の
方が同じ顔なのにもてるんだよ。」

優子「言わせておけば。演劇なんかにうつつを抜かしてるから、F
クラスになったんでしょ。」

零「だが、演劇だって仕事があるから勉強出来なくても、問題ない
ぞ。お前みたいな音痴は話が別だがな。」

優子「いい加減にしなさいよ。あんた！」

零「5本戦にして、俺とあんたが戦って、負けた方が一つ言うこと
を聞くってことにするか？」

優子「それでいいわ！」

零「科目選択権は俺のクラスがもらっていいな。」

優子「いい」……………ちよつと待って優子。「だ、代表。」

霧島「……………科目選択権は2つは私達がもらう。」

ちつ、霧島がここできたか。

零「しゃあないな。了解した。じゃあ、木下姉。俺は数学のタッグ
戦を選択する。相棒に秀吉を選ぶ。演劇の力を見せてやるよ。」

優子「秀吉をパートナー？舐めてるでしょ？いいわ。勝って、謝ら

せてあげる。」

霧島「……………雄二、私達も負けた方が一つ言うことを聞く。」

雄二「その勝負受けて立つ。」

あっちも話が終わったみたいだな。

雄二「クラスに戻るぞ。」

零「了解した。」

ガラガラ

廊下

雄二「明日が決戦日だな。」

零「勝手に話を進めたがあれで良かっただろうか?」

雄二「上出来だ。お前に交渉を任せようかな。」

零「明日の誰と誰をぶつけるかは考えるから。勝てよ。」

雄二「ああ、命が懸かった試合だからな。」

零「それじゃ、帰りますか。」

Aクラス戦前編（前書き）

そろそろアンケートを終了しようと思います。なので、投票したい方は早くしてください。

バカテスト 現代社会

『PKO』とは何か答えなさい。

姫路 瑞希

Peace Keeping Operations（平和維持活動）の略。加盟各国によって行われる平和維持活動のこと。

教師のコメント

そうですね。豆知識ですが、United Nations
Peacekeeping Operationsとも呼ばれています。余裕があれば、覚えておきましょう。

土屋 康太

Pantsu Koshitsumiki Oppaiの略。世界のスリーサイズを規定してる下着メーカーの団体。

教師のコメント

君は世界平和をなんだと思ってるんですか。

吉井 明久

パウエル 金元 岡田の略

教師のコメント

それは、セ・リーグの平和を守る人達です。

哀川 零

パンチ キック オーバークイル

教師のコメント

平和のへの字も見えません。

Aクラス戦前編

Aクラス

高橋「では、両名共準備は良いですか。」

雄二「ああ。」

霧島「……………問題ない。」

高橋「それでは、一人目の方どうぞ。」

零「一人だけじゃないな。いくぞ、秀吉。」

秀吉「分かったのじゃ。」

零「それじゃあ、来いよ猫かぶり。」

優子「その呼び方を止めなさい。」

零「へいへい、分かりやしたよ。木下姉。」

優子「まあ、それでいいわ。美穂行くわよ。」

佐藤「はい。」

高橋「開始してください。」

「……………試獣召喚……………」
サモン

優子の装備は鎧に長いランス。
佐藤は和式の服に鎖鎌。

零「ふーん、曲弦系対策に鎖鎌を持つてくるとはね。」

優子「あなたを倒す為に武器がなんなのか調べたのよ。」

零「そりゃご熱心に。数学らいつもより低かったから、まずいかもな。」

明久「雄二、零は大丈夫なの？」

雄二「いつもより低いつて、言つてたが大丈夫だろ。だつて」

《木下 優子&佐藤 美穂

VS木下 秀吉&哀川 零

数学389&376 VS 83&648》

雄二「あいつの得意科目だからな。」

優子「なんなのよ。その点数？」

零「700越えなかったよ。」

秀吉「どれだけ桁違いなのじゃ？」

佐藤「あんなの倒せる訳ありませんよ。」

優子「大丈夫よ。曲弦系対策はあるから。」
そういうと優子と佐藤の召喚獣が零と一定の距離をはかって動き続ける。

優子「やはり、曲弦系は動いている物を狙うのは苦手なようね。しかも、Bクラス戦で使った張り巡らせるのは範囲が決まってるみたいだし。」

零「はあ、どれだけ曲弦系について調べたんだよ。」

こいつ頭良過ぎ。

優子「美穂やって。」

鎖鎌が飛んでくる。零の召喚獣はよけきれず、擦ってしまっ

《哀川 零 数学611》

明久「零!？」

雄二「ちよつとまずいかもな。」

零「危ねー。」

秀吉「大丈夫かの。零。」

零「秀吉、悪いが今回召喚獣を貸してもらっわ。」

秀吉「どういことじゃ?」

零「こういうことだ。《合成》^{キメラ}」

俺がキーワードを唱えると俺の召喚獣が秀吉の召喚獣とくつつき光る。

そして、ツバメ服を着たマラカスを持った召喚獣が現れる。

零「腕輪はまだ、使いたくなかったんだがな。」

優子「腕輪の能力ですって!？」

零「そうだよ。曲弦系を調べたお前なら不思議だっただろ、何故、曲弦系は味方を巻き込んでしまうのに、タッグ戦にしたのか?と。」

優子（確かに、曲弦系は敵味方関係なく、巻き込む武器。疑問に思ったけど、タッグ戦にした理由はわざと秀吉をパートナーにして、私を怒らせる為だと思ったんだけど。）

零「わざわざ、タッグ戦にした理由は隠し玉の《合成》^{キメラ}の為だよ。まあ、隠したままで終わりたかったが。」

優子「そんな能力があるなんて!？」

零（俺が作った能力だからな。）

佐藤「で、でも、装備は弱くなつたみたいですよ。」

優子「確かにそうだわ。」

零「《少女趣味》^{ホルトキープ}を舐めるなよ。」

優子「行け！あ、あれ？」

優子と佐藤の召喚獣は全く動こうとしない。

零「音使いの前で長く話し過ぎたな。」

優子「音使い？」

零「音でお前達の召喚獣の支配権を奪った。お前は演劇をバカにしてたしな。そんなお前を音楽で倒してやるのも、悪くない。」

それが、パートナーに秀吉を選んだ理由。秀吉の召喚獣と《合成》^{キメラ}を使えば、演劇に関するのになると思ったからな。

零「もう、終わりが見えてるが、零崎するのも悪くない。それじゃあ、『相討ちしろ』。」

優子と佐藤の召喚獣が互いに相手の喉を突き消える。

《木下 優子&佐藤 美穂
数学0&0》

高橋「勝者、Fクラス。」

Fクラス『うおおー！』

優子「そんな……………」

零「演劇をバカにするの止めた方がいいぞ。」

優子「今回、良く分かったわ。」

零「約束は後で伝えるぞ。優子。」

優子「今、優子って。」

零「あそこまで曲弦系を調べたんだ、ちゃんと名前で呼ぶよ。嫌ならやめるが。」

優子「そのままでもいいわ。」

零「そうか、それじゃ。」

Fクラスのみんなの方に戻る。

明久「やったね。零！」

零「まあな。」

秀吉「今回、わしは何も出来なかったのじゃ。」

零「そうしょぼくれるなよ。秀吉が演劇が好きだから、あの召喚獣になったんだし、それに、優子も演劇を認めるってよ。」

秀吉「本当かの？それならば良かった。」

秀吉が機嫌を直してくれた。

雄二「喜ぶのはまだ、早いぞ。次は二回戦目だ。」

高橋「それでは、二回戦目の方どうぞ。」

高橋女史は自分のクラスが負けたっていうのに、冷静だね。

久保「それじゃあ、僕が行こう。科目は古典で。」

雄二「明久、行ってこい。」

明久「えっ！僕？」

雄二「大丈夫だ。俺はお前を信じてる。」

零「この勝負は明久以外、適任はいない。」

明久「ふう、やれやれ僕に本気を出させてこと？」

雄二「ああ、もう隠さなくてもいいだろう。この場の全員にお前の本気を見せてやれ。」

零「もし、やばくなったらこの紙を開け、作戦が書いてある。」

折り畳んだ紙をこっそり渡す。

明久「必要にならないと思うけど、もらっておくよ。」

玉野「ねえ、アキちゃんって本当はすごいのか？」須川「いや、そんな話は聞いたことはないが。」

清水「豚野郎のいつもの冗談でしょう。」

うん、俺もそう思う。

久保「よ、吉井くんが相手なのか、しかも、さっきの話からするとまさか……………」

久保がいろんな理由で戸惑い始めている。

明久「あれ、気付いた？ご名答。そうさ、僕は今までちっとも本気を出していない。」

久保「それじゃ、君は。」

明久「そうさ、君の想像した通りだよ。隠していたけど、実は僕

左利きなんだ。」

《久保 利光VS吉井 明久
古典428VS95》

久保は明久が観察処分者だから、気持ちが不安定で上手く扱えていない。

明久はそこで俺の渡した紙を開いて見る。そして、

明久「こんなセリフ言えるかぁー！」

その時、久保の召喚獣がデスサイズで明久の召喚獣をバラバラにする。

明久「体が切り刻まれたようにいたーい！」

島田「このバカ！テストに点数は関係はないでしょう！」

明久「み、美波！フィードバックで傷んでるのに、さらに殴るのは止めて。」

零「島田、明久の点数はいつもより10点程高かったぞ。」

島田「その程度変わっても関係無いわよ！」

零「確かにな。」

雄二「さて、次が勝負だ。」

明久「ちよつと、雄二！アンタ僕をちつとも信頼してなかったな！」

雄二「信頼？何それ食えるの？」

零「今度、作ってみるか。」

明久「雄二、貴様に本気の左を食らわせたい！それに、零は何を作ろうとしてるの！？後、お前は何を僕に言わせようとしてるんだ！」

雄二「何をしたんだ？」

明久「これを見てよ！」

『久保くん！この試合に僕が勝つたら、君と付き合おうと思う。だ

から、勝たせて!』

明久「こんなことで勝たせてくれる訳無いじゃないか!」

雄二「いや、勝てたかもしれないな。」

零「だろ。」

明久「それってどういうこと?」

雄二「さて、次に行こう。」

明久「ねえってば?」

知らない方がいいよな。

Aクラス戦後編（前書き）

バカテスト 化学

ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（ ）である。

姫路 瑞希

水酸化カルシウム

教師のコメント

正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要なので、確実に覚えておきましょう。

土屋 康太

塩化吸収剤

教師のコメント

勝手に便利な物を作らないでください。

哀川 零

ニトログリセリン混ぜたら面白いと思います。

教師のコメント

爆発します。面白いからって、混ぜないでください。

吉井 明久

アンモニア

教師のコメント

その答えはズルいと思います。

Aクラス戦後編

Aクラス

高橋「では、三人目の方どうぞ。」

康太「……………（スクツ）」

工藤「じゃあ、僕が行こうかな？一年の終わりに転校してきた工藤愛子です。よろしくね！」

そついや、僕っ娘って創作の中だけだよな。

高橋「教科は何にしますか？」

康太「……………保健体育。」

工藤「土屋くんだけ？君は保健体育が得意みたいだけど、僕も得意なんだ。君と違って実技でね。」

なんか、みんながうるさくなった。

工藤「その君、吉井くんだけ？勉強が苦手そうだし、保健体育だったら僕が教えてあげようか？もちろん実技でね。」

明久「望むところ」

島田「アキには永遠にそんな機会は来ないから、保健体育の勉強なんて必要ないのよ！」

姫路「そうです！一生必要ありません！」

雄二「島田に姫路、明久が死にそうな位悲しい顔してるぞ。」

工藤「じゃあさ、その哀川くんは？」

零「いいぞ。格闘技ならなんでも得意だ。」

零以外「はっ！？」

何故驚いてんだ？

零「保健体育の実習と言ったらスポーツだろ？」

雄二「そっぴや、この前の成績で保健体育は10点代だったな。」

零「柔道でもやるか？寝技が得意なんだよ。」

秀吉「本当に分かってないのかの？」

工藤「まあ、それでいいや。今度柔道やるつよ。」

零「ほら、スポーツであつてたんじゃなか。」高橋「そろそろ始めてください。」

零「高橋女史、少し顔が赤いですよ。」

高橋「うるさいですよ！早く始めなさい。」

工藤「はい、サモン。」

康太「……………サモン。」

零「康太ってさ、試召戦争で一回も活躍してなかったな。」

雄二「今回がムツツリーニの見せ場だ。」

工藤「実践派と理論派どっちが強いか見せてあげる。」

工藤の召喚獣はセーラー服に巨大な斧。

康太の召喚獣は忍服に小太刀。

工藤「バイバイ、ムツツリーニくん。」

工藤の召喚獣は斧が電気を帯びて、早くなる。

零「腕輪の能力か。」

康太「……………加速。」

工藤「えっ?」

康太の召喚がブレて消える。

康太「……………加速終了。」

《土屋 康太VS工藤 愛子

保健体育572VS466 0》

工藤「そんな、この僕が!？」

工藤は崩れ落ちちったよ。

零「おい、大丈夫か?工藤。」

工藤「あはは、やられちゃった。でも、優子を名前で呼ぶんだって
ら僕も名前で呼んで欲しいな。」

零「愛子。これでいいな。」

工藤「うん、じゃあ後で柔道やろっね。」

零「了解。」

高橋「2対1ですね。次の方どうぞ。」

おっ、さすがに後がなくて戸惑ってるな。
最初と結構変わってるな。

姫路「あ、はい、私です。」

零「雄二、この試合で決着ついちまうんじゃないか?」

雄二「それは、困るな。だが、ここは結構きついぞ。なんたって相
手は学年次席だからな。」

零「学年次席って、久保だろ?」

雄二「何を言っただ？あのお前が知らなかったのか？久保は姫路と3位争いしてたぞ。」

零「えっ？」

雄二「学年次席は翔子と主席争いしてた天東 潤だ。」

潤「俺の出番か。」

真つ赤な髪を後ろで束ねている女子が出てくる。しかも、俺っ娘。

オリキャラかーーーーー!?

しまった！一回戦をタッグ戦にしたせいで、オリキャラが出てくるのはギリギリ予想していたが、学年次席ってまずいだろう。原作壊し過ぎたか。

雄二「おい、大丈夫か？」

零「ああ、大丈夫だ。てつきり名前から男だと思ったのに女だったから驚いただけだ。」

雄二「それなら、いいが。」

高橋「科目はどうしますか？」

潤「選択権はこっちでいいんだよな？総合科目で頼む。」

明久「ちよつと、それは。」

姫路「構いません。」

姫路・潤「サモン。」

《天東 潤VS姫路 瑞希

総合科目

4549VS4409》

須川「マジか？霧島に匹敵するぞ！」

久保「僕は置いていかれたみたいだね。」

至るところから驚きの声上がる。

潤「400点程上がってるな。俺と翔子の競争に入りそうだな。良くあげたな。」

姫路「私、このクラスのみんなが好きなんです。人の為に一生懸命になれるみんなが。」

潤「まるでマンガの主人公だな。だが、嫌いじゃない。」

姫路「だから、みんなに恩返しをするために勝ちます。」

潤「悪いが俺も負ける訳にはいかないんだよ。」

姫路の召喚獣は鎧に大剣。

天東の召喚獣は真っ赤な和服を着ている。

姫路「武器はどうしたんですか？」

潤「今、用意する。《変体刀》。」

刀が現れる。

潤「斬刀ざんとう 鈍なまくら。」

姫路「腕輪の能力ですか？」

潤「正解だ。何故か、使わないと攻撃のたびに点数が減るからな。こいつ、チートじゃねえ？」

姫路「負けません！」

姫路の召喚獣が潤の召喚獣に向かって走る。

潤「斬刀 鈍は光の速さを超える。零戦！」

零「姫路、上に跳べ！」

姫路「えっ、あ、はい！」

姫路の召喚獣は跳ぶ。

その瞬間、姫路の召喚獣の下を斬激が走る。

潤「お前、よく分かったな。」

零「そりゃどうも。」

潤「だが、これは避けられないだろう。零戦の最高速度は十機。」

姫路「十機!？」

潤「行くぞ。零戦、十連。」

ヒュンヒュンヒュン

姫路「くっ。」

姫路の召喚獣の足に一撃が当たって動けなくなる。

《天東 潤VS姫路 瑞希

総合科目

4449VS4082》

潤「もう、動けないだろう。終わりにしてやる。」

姫路「まだです。行け!」

腕輪が光り熱線が出させる。

潤「くっ。」

潤の召喚獣は腕に熱線が当たったが真横に跳ぶ。そして、動いて避け続ける。

零「これは、姫路の点数が無くなるか、天東が熱線に当たるかの勝負だな。」

姫路「当たって！」

潤「負ける訳にいかない。」

潤の召喚獣に熱線が当たる瞬間、熱線が消え姫路の召喚獣も消える。

《姫路 瑞希 総合科目 0》

姫路「そ、そんな。みんなに恩返し出来なかった。」

明久「何を言ってるのさ。姫路さん。あんなすごい戦いをしたのに、それに、僕達は仲間なんだからそんな事気にしなくていいんだよ。」

姫路「明久くん。」

潤「危なかった。」

みんなに聞こえないように。

零「本当にそうか？多分だが、《変体刀》の中に身体能力強化があったんじゃないか？」

潤「何故そう思う。」

零「読んだ本に似たような刀があったからな。」

潤「その通りだよ。」

零「どうして使わなかったんだ？」

潤「なぜか、あんな頑張ってる奴には使ってはいけないと思ったんだよ。」

零「そうか。今度は本気でやってやれ。それが、頑張ってる奴に対しての礼儀だ。」

潤「そうだな。勉強になったよ。」

高橋「2対2ですね。最後の一人どうぞ。」

翔子「……はい。」

雄二「俺の出番だな。」

高橋「科目はどうしますか？」

雄二「科目は日本史の年表で、範囲は小学校卒業まで、方式は上限百点満点で頼む。」

高橋「分かりました。テストを用意するので、少し待ってください。」

高橋女史が教室を出ていく。

Aクラス「上限ありだって!？」

Aクラス「しかも、小学校レベルだと。」

こちらは雄二に応援の言葉を贈っている。俺からも。

零「雄二。この勝負絶対に勝てよ。」

雄二「お前に言われた通りに勉強したから大丈夫だろ。」

零「俺もこれを使わないことを願ってる。」

雄二「これ？」

俺はバツクからある物を出す。

雄二「おい！なんでそんなデカい物が入るんだ？」

そのデカい物とは、デスサイズ。

零「負けたら、処刑だ。」

雄二「……………絶対に勝ってくる。」

零「頑張ってるね。」

高橋「準備が出来ました。」

これで勝ったな。

視聴覚室

高橋「不正行為は即失格になります。いいですね。」

霧島「……………はい。」

雄二「分かっているぞ。」

高橋「それでは、始めてください。」

数十分後

《日本史年表 限定テスト 100点満点

坂本 雄二100点

霧島 翔子100点》

あの問題が出なかったと……！！

Aクラス戦後編（後書き）

アンケート終了です。
結果

木下優子	2
木下秀吉	1
工藤愛子	3
高橋洋子	1
天東 潤	2

こうなりましたが、2票以上入ったキャラをヒロインにしようと思
います。

Aクラス戦後対談（前書き）

すいません。前回誤字がありました。
零戦ではなく、零閃です。

バカテスト 歴史

（ ）年 キリスト教伝来

霧島 翔子

1549年

教師のコメント

正解です。特にコメントはありません。

坂本 雄二

雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1994年

教師のコメント

ロマンチックな表現しても間違いは間違いです。

哀川 零

謹賀新年

教師のコメント

せめて数字をいれましょう。

Aクラス戦後対談

Aクラス

高橋「最終勝負引き分けです。」

ディスプレイに映し出されなかったと思ったら、あの問題が出なかったなんて。

雄二「あの問題が出ないなんて。」

明久「どうなるのこの状況。」

周りからも疑問の声があがる。

零「ここで交渉をする。」

雄二「零、お前どうするつもりだ。」

零「徹底的に良い方向に向かわせてやる。」

雄二「ここはお前に任せた。」

零「霧島。交渉したいんだが。」

霧島「……交渉？」

零「学園長も混ぜないといけないから、学園長室までついて来てくれ。」

霧島「……分かった。」

Aクラスを出ていく。

明久「頼んだよ。零。」

零「了解した。」

学園長室

藤堂「なんだい、糞ジャリ。」

零「AクラスとFクラスは引き分けて終わった。」

藤堂「まさか、Aクラスに勝つと言ってここまでやっちゃまうなんてね。」

零「クラスの設備について他の結果は霧島と交渉するつもりだが、クラス設備についてはアンタを混ぜないといけないだろう?。」

藤堂「まあ、そうさね。」

零「Aクラスの設備をもう一つ準備するのは出来ないと思うが、Bクラスの予備としてCクラスレベルまでは帰られるだろう。」

藤堂「クラスの敷地が足りないさね。」

零「安心しろ。CクラスはAクラスに負けてDクラスに落ちているから、後、空いている面積があるから、増やせるんだよ。」

学園の図面を開き説明する。

藤堂「これどのタイミングに考えたのさね？」

零「引き分けと分かってから考えたんだよ。」

霧島「……あなた、何者なの？」

零「この学園には仕事で入ったんだ。で、いいのか？」

藤堂「工事に費用がかかるからねえ。」

零「情報代ということはどうだ？」

霧島に聞こえないようにいう。

藤堂「他に言いたいことがあるが、その情報にそれだけの価値はあるさね？」

零「学園の存亡についてだ。」

藤堂「学園の存亡!？」

零「今度の学園祭の召喚大会で腕輪を出すことになってるみたいだが、それには問題がある。」

藤堂「問題？」

零「後で話す。」

藤堂「分かったさね。クラス設備はこれでいいさね。」

零「霧島もこれでいいだろう?」

霧島「……Aクラス設備に手を出さないならそれでいい。」

零「それじゃあ、今度は霧島と交渉だ。単刀直入に言う。Fクラスにこないか?」

霧島「えっ!?!」

零「そうすれば、雄二と一緒にいられる時間が増えるぞ。しかも、雄二との勝負で負けた方が言うことを聞く。というのも雄二に聞かせる。」

霧島「……それは、嬉しい。その交渉をのむ。」

零「じゃあ、一旦戻るぞ。」

Aクラス

零「〜ということになった。」

さっきの話全員に話す。

雄二「てめえ、俺を売りやがったな！」

零「うるさい。こうなったのはお前の作戦が失敗したからだろうが。」

Aクラス「でも、それじゃあFクラスに優位すぎだろう。」

零「文句を言うなよ。最高クラスのお前らが最低クラスの俺達と引き分けになったんだから。」

Aクラス「うっ、でも。」

零「こつちにもデメリットがあれば、いいなら。鉄人を俺達の担任にするつもりだ。」

Fクラスに聞こえないように言う。

Aクラス「それなら。」

あー、なんかさつきからみんなに隠れて会話してるな。

零「さつき、Fクラスと戦った奴佐藤以外話があるから一人ずつ来い。」

佐藤「なんで私だけ。」

零「だって、地味だし。」

佐藤「ひ、酷い。」

崩れたけど知らない。

零「さっき言った奴来いよ。」

視聴覚室

この部屋を交渉のために借りました。

久保の場合

久保「で、なんだい？哀川くん。」

零「明久と一緒にのクラスで勉強したくないか？」

久保「詳しく聞かせてくれ。」

目が変わった。

零「普通にFクラスになることが出来たんだよ。」

久保「それは本当かな？でも、せっかくAクラスになったのに。うん。」

すごく真面目だな。しょうがない、最終奥義。

零「来るならこれをやるう。」

久保「これは！」

明久（玉野の着付けバージョン）

久保「よし、僕はFクラスになる。」

零「じゃあ、それに名前書いて次の人を呼んで。」

久保「分かった。ありがとう。」

優子の場合

零「さっきの言うことを聞くっただけど、Fクラスに移籍して。」

優子「しょうがないわね。約束だし。」

優子（それに零と一緒にのクラスになれるしね。）

零「そうか。簡単に納得してくれて良かった。次の人を呼んでくれ。」

優子「ええ。」

優子は簡単に交渉できた。

工藤の場合

工藤「で、何かな？零くん。」

零「柔道で勝つたら、Fクラスに来てくれ。」

工藤「いいよ。ていうか僕は普通にFクラスに移ってもいいよ。」

零「は？なんでだ？」

工藤「なんでだろうね？」

零「はぐらかすなよ。」

工藤（零くんがいるからなんて言えないよ。）

工藤「なんでもいいですよ。」

零「まあ、確かにな。」

零（康太がいるからかな？）

零「でも、柔道はどうする？」

工藤「また、今度でいいよ。」

零「そうか。じゃあ、次の人を呼んでくれ。」

潤の場合

潤「俺になんのようにだ？」

零（こいつが一番の問題なんだよな。やはり、原作キャラが好きなのかな？）

潤「で、一体なんなんだ？」

零「お前って、好きな奴いるのか？」

潤「何をいきなり聞いてるんだお前は！？」

潤（なんか、一人ずつ集めたと思ったらいきなりなんなんだ！？もしかして、俺のことがす、す、好きなのか？）

零（顔が真っ赤になってるし、やっぱり、好きな奴がいるみたいだな。やっぱり、原作キャラだよな。それなら、）

零「Fクラスに来ないか？」

潤「えっ!？」

潤（やっぱり、俺のことが。だから、一緒にいたいから？）

零「嫌か？お前がいれば面白くなると思うんだが。」

潤（お前がいれば面白くなる？そんなこと言われるなんて始めてだ。やっぱり、）

潤、迷走中

零（読みが外れたかな？もったいないが）

零「はあ、やっぱ、駄目か。無理強「いや、行くぞ。「い、えっ？」

潤「だから、Fクラスになるって言っているのだ。」

零「そ、そうか。これからよろしく頼む。天東。」

潤「潤でいい。こちらこそよろしく頼む。」

零「了解した。潤。」

零（なんかうまくいったみたいだな。）

こうして1日で三人も女子を落とした鈍感野郎の交渉が終わった。

えっ、Fクラスからだす5人？

今度合コンを企画してやると言ったら、即刻で了承したよ。

オリキャラ詳細

哀川 零

容姿

見た目は戯言シリーズの戯言遣いの銀髪で少し髪が長くなっています。

成績

数字 約700点

保健体育 約10点

英語・古典 Fクラスレベル

それ以外 約400点

詳細

面白いことが好き。

仲間にはなんだかんだで優しいが、敵は徹底的に潰す。

自分の恋愛については鈍感。

基本的に万能。

召喚獣

黒いコートに曲弦系。

腕輪は《合成》^{キメラ}味方一人と合体する。

戯言キャラになる。

発動条件は二人で合計500点を超えること。400点になっていなくても使えるし、400点になっていても使えない。

天東 潤

容姿は化物語の戦場ヶ原の髪と目が赤で、髪を後ろで束ねている。
成績

霧島 翔子と全体的に同じ。

詳細

俺っ娘。

男口調。

冷静沈着（恋愛以外）。

かわいい物好き。

こちらも基本的に万能。

召喚獣

赤衣着物に素手。

腕輪を使わない場合、虚刀流を使えるが、技を使ったたびに点数が減る。

腕輪は《変体刀》刀語の変体刀を出せる。
同時に2つはだせない。

ラブレター騒動(前書き)

バカテスト 日本史

楽市楽座や関所の撤廃を行い、商工業や経済の発展を促したのは()である。

姫路 瑞希

織田信長

教師のコメント

正解です。

島田 美波

ちよんまげ

教師のコメント

日本にはもう馴れましたか？この解答を見て、先生は不安になりました。

吉井 明久

ノブ

教師のコメント

ちよっと、馴れ馴れしいと思います。

哀川 零

織田臣川 秀康

教師のコメント

誰ですかそれ？混ざり過ぎです。

ラブレター騒動

昨日、試召戦争が終わった後、色々とクラスに制限がついた説明すると

一つ目は、両クラス宣戦布告の三ヶ月間禁止。

二つ目は、担任が鉄人になった。

三つ目は、ババアとの秘密の契約だから後に話すか。

で、今クラスがどうなったかと言うと。

まず、雄二だが霧島とイチャついている。

雄二「翔子！いい加減に俺から下りろ。奴等が狙ってやがる！」

霧島「ヤダ。」

普通に断られてるし。

次は、康太は工藤と白熱？した戦いをしている。

工藤「ムツツリーニくれ。この問題ならどうだ？」

康太「……………そんなの一般常識。」

工藤「そんな！？もう、それなら（ぴらっ）。」

康太「ぶしゃあー！スパッツごときに。」

工藤「じゃあ、次の問題に行こうか。」

救急車を呼んだ方が良くないか？

めんどくさいから次に行こう。

えっと、秀吉は須川にデートに誘われてるよ。

須川「なあ、今後の休みに映画に行かないか？チケットが余ってるんだ。」

秀吉「悪いが、部活があるからのつ。」

須川「空いてる日があったらいつでもいいから、デー『異端者には死を』ぐわあー！」

優子「秀吉、またあんた、デートに誘われたみたいね？」

秀吉「あ、姉上？その間接はそっちに曲がらぎゃあー！」

優子「なんで、アンタばかり！」

須川は異端審問会に連れていかれ、秀吉はお仕置き中。

FFF団忙しそうだな。

優子は優等生を辞めたみたいだし。

一応、最後か。

えっと、明久はすごいな。説明しづらい。

姫路「吉井くん！クッキー焼いてきたんですけど。」

明久「えー！」

島田「ねえ、アキ。新しくケーキ屋さんが出来ただけど。」

明久「僕の食費がー！」

清水「お姉様とデートだなんて！でも、哀川との契約があるし。」

明久「殺気を感じる！」

玉野「かわいい、服があるんだけど。」

明久「着ないからね！」

久保（ああ、今日も吉井くんはかわいいな。）

明久「ブルツ、なにか悪寒が。」

明久、それは正常な証拠だ。

真面目に座っているのは、俺と潤だけか。

つーか、一つ一つが別の場所で起きるのは小説で読んだことがあるけど、それが同じ場所で起きるって、まさにカオスだな。

やっぱり、いいな。カオスな状況って。さて、次は何をしようかな？

鉄人「出席を取るぞ。席につけ。」

鉄人が来たので、みんな席に戻る。

さすがに、鉄人には誰も逆らえないか。

鉄人「木下。」

秀吉・優子「どつちなものしじゃ・ですか？」

鉄人「すまない。木下秀吉。」

秀吉「はいなのじゃ。」

鉄人「坂本。」

雄二「明久がラブレターを貰ったようだ。」

「殺せええー！」「」

鉄人「出席の途中だ。後にしろ。」

今、姫路と島田の声と一緒に聞こえたんだが。

鉄人「出席を続ける。横溝。」

横溝「吉井殺す。」

鉄人「須川。」

明久「吉井殺す。」

明久「みんな落ち着いて！返事が吉井殺すになってるよ！」

鉄人「うるさいぞ。吉井。」

明久「ここは僕を注意するところじゃないでしょ！」

鉄人「哀川。」

明久「えっ、無視!?!」

零「雄二もラブレターを貰ったようだ。」

『あいつも「殺せええー」!』

今度は霧島の声と一緒に聞こえた。

さて、問題です。雄二にラブレターを送ったのは誰でしょうか？

一番可能性があるのは霧島だな。

だが、叫んでたんだから霧島じゃない。

きつと、愉快犯だな。

えっ、俺？俺はやってないよ。だから『俺は悪くない。』

なんて、言っても俺がやって分かるよね。球磨川の真似してみたけ

ど似てた？

まあ、いいや。ちなみに落ちてた姫路の手紙を明久の下駄箱に入れたのも俺。

だって、面白そうじゃん。

康太「…………… あったぞ！未開封のパンが！」

須川「ムツツリーニは何を探してるんだ？」

現在Fクラスでは自分にもラブレターがないか探してる。

横溝「あったぞ！ってこれは俺が書いたやつか。」

須川「異端者だ。」

横溝「しまったぁー！！」

鉄人「いい加減にしろ。貴様等！出席の途中だ！」

ここで鉄人の一喝。

鉄人「蝶ヶ崎。」

蝶ヶ崎「吉井と坂本マジぶち殺す。」

鉄人「鍋島。」

鍋島「吉井と坂本千切りにする。」

鉄人「清水。」

清水「あの豚野郎殺す。」

清水の奴、便乗して明久を殺す気だな。

鉄人「霧島。」

霧島「……雄二、浮気。」

鉄人「古賀。」

古賀「吉井と坂本蜂の巣にする。」

作者はFクラスメンツの名前が分かりません。なので、適当にめだかボツクスからとってきたので、名前は特に関係ありません。

鉄人「欠席者はいないようだな。それじゃあ、一日勉強頑張るよう
に。」

吉井・坂本「先生、かわいい生徒を見殺しにするんですか!?!」

鉄人「吉井、坂本。勘違いするな。貴様等は不細工だ。」

吉井・坂本「不細工とまで言われるとは思わなかったよ!」

息がぴったり。

数分後

明久サイド

今、現在地獄の鬼ごっこが開幕されている。

生き延びるためににつく気雄二と一緒に走っている。だって、おとりに使えるからね！

雄二「おい、明久。一旦あの空き部屋に隠れるぞ。」

明久「了解！」

ガラガラガラ

明久「で、これからどうするつもり？」

雄二「二手に分かれて屋上を目指すぞ。」

明久「二手に分かれるの？」

雄二「ああ。」

翔子「……雄二見つけた。」

霧島さんが現れた。

明久「それじゃあ雄二、また後で。」

ガシッ

雄二が僕の手を掴む。

雄二「やっぱり、二手に分かれるのは止めだ。」

明久「ふざけるなよ雄二！自分の作戦に責任を持ってよ！」

雄二「うるせえ！てめえだけ逃がすと思うな！」

霧島「……浮気相手はやっぱり吉井？」

明久・雄二「願い下げだこんな奴！」

雄二「窓から外に出るぞ！」

そうして、僕達は窓から外に出た。

そうして、下の階の空き部屋に入った。

霧島さんは一階まで降りたと思ってるみたいだ。

それは、好都合だが、入った空き部屋にはムツツリーニが待ち伏せしていた。

康太「……………異端者は排除。」

明久「どうする雄二？」

雄二「俺に任せろ。」

明久「任せた。」

元神童の力信じてみようじゃないか！

雄二「俺は異端審問会に所属していない。だから、明久をそちらに引き渡すので、ここは俺だけ見逃してくれないか？」

この野郎！僕を売りやがった！

明久「このゴリラ何を考えてるんだ！」

康太「……………少し考えてみる。」

明久「考えちゃダメだよ。ムツツリーニ。」

雄二「なら、明久のベッドの下の本をお前にやろう。」

康太「……………交渉成立。おまけで明久も見逃してやる。」

明久「僕の宝が犠牲になったけど、助かった。」

雄二「どうだ俺の力は。」

明久「ムツツリーニ、雄二も秘蔵の本をあげるって。」

雄二「てめえ、何勝手に決めてんだ！」

康太「……………礼として、これをやる。」

明久「これは？」

康太「中に刃物が入ってる。」

明久「ありがとう。ムツツリーニ。」

雄二「てめえ、勝手に交換しやがって。」

明久「自業自得だろ。」

僕達は廊下に出る。

清水「そこまです！豚野郎。」

明久「清水さん！」

雄二「ここは二手に分かれるぞ！」

ガシッ

雄二の腕を掴む。

明久「まさか、一人で逃げるなんてしないよねえ？」

雄二「うるせえ！とつとと放せ！」

須川「そこまでだ！」

雄二「ちっ、お前のせいで来ちまったじゃねえか！ムツツリーニから貰ったやつを片方よこせ！」

そうだ。ムツツリーニから刃物を貰ったんだ。よし……………。

雄二「どうした早くしろ。」

明久「雄二はどっちがいい？」

爪きり、ピザカッター。

雄二「確かに刃物だが……………。ああもう、ピザカッターでいいからよこせ。一か八かやってやる。」

明久「じゃあ、僕は爪きりで頑張るよ。」

雄二「明久、死ぬなよ。」

明久「そっちこそ。」

数分後

清水「痛い。深爪になってしまいましたぁー！！」

須川「まさか、ピザカッターにあんな力があつたなんて。」

明久・雄二「あれ、勝てた。凄いな僕・俺！？」

雄二「見えたぞ！屋上への階段だ！」

明久「これで僕らは。」

島田「そこまでよ！」

霧島「……雄二待ってた。」

雄二「待ち伏せだと！何故だ！？」

霧島「……さっきの会話、私が聞いてた。」

雄二「俺のバカーー！」

明久「雄二ってさ、霧島さんが相手だと失敗するよね。」

雄二「くっ、何も言えねえ。」

島田「アキ、渡さないというなら手加減しないわ。」

明久「美波。それは聞けない相談だよ。」

島田「じゃあ、やるって言うのね。」

バツ

僕は制服を脱ぎ、後ろに投げる。

明久「やってやるさ！」

雄二「バカ！」

明久「えっ？」

僕の制服を姫路さんが拾う。

姫路「ああ、これですね。」

明久「倒してないのに、見ちゃダメだよ！姫路さん！」

姫路「あっこれは!?!」

姫路さんはラブレターを見て驚いてビリビリに破ったって

明久「ええー！ー！ー！」

島田「瑞希、さすがにそれは、書いた子に失礼よ。」

破れたラブレターは風で流され、飛んで行ってしまった。

そんな……………。

あれ、さっきから雄二の声が聞こえないけど。

霧島「……………待つて雄二！」

雄二「捕まってたまるか！」

雄二はグラウンドで逃げ回ってる。よし。

明久「僕も雄二を追うの手伝うよ！」

地獄の鬼ごっこ中

零サイド

みんな頑張ってるな。

現在クラスにいるのは、俺、秀吉、優子、潤、工藤、玉野、久保と
なっている。

福原「あれ？他の皆さんは？」

零「鬼ごっこ中です。」

福原「そうですか。自習にします。」

福原先生は教室を出ていく。

零「おい、秀吉。お前は行かなくていいのか？」

秀吉「俺は別に興味が無いからの。」

零「そうか。俺はてっきり明久のことが好きなのかと思ったんだが
な。」

秀吉「ぶっ！な、何を言っておるのじゃ！？俺は男じゃぞ！」

零「別にそんなの関係ないんじゃないか？久保や清水もそうだが、
同姓を好きになるのは別にいいと思うぞ。相手がイヤがらなければ
だがな。」

秀吉「そ、そうかの？」

やっぱり、気にはなつてたみたいだな。

零「俺は姫路達よりお前を応援するよ。というよりお前らを恋人同士にしてやる。」

秀吉「少し考えさせてほしいのじゃ。」

零「別にいいぞ。でも、やっぱり、明久が好きなんだな。」

秀吉「あまり大きな声で言わないでほしいのじゃ。」

零「了解。あとこれやるよ。」

みんなに渡したことのある明久の女装写真集。

秀吉「これは俺の宝にするのじゃ。」

零「喜んでくれて嬉しいよ。やることがあるから行くぞ。」

んじゃ、ちよつと協力者を増やすか。

零「優子、ちよつといいか？」

優子は真面目に自習してた。

優子「ん、何かしら？」

零「お前って、Bえ」

優子「何を言ってるのよ!」

零「でも、本当だろ。」

優子「大きな声で言わないでよ。」

零「了解。あれ、デジャヴ?」

優子「何、言ってるのよアンタ?で、それがどうしたのよ?」

零「お前は秀吉を男だと思ってるのよな?」

優子「当たり前でしょ。」

零「秀吉が男を好きになっただとしたら?」

優子「詳しく教えなさい」。

零「相手は明久だ。」

優子「吉井くん!?確かにあり得ない話じゃないわね。」

零「秀吉を応援してやりたいんだが、手伝ってくれないか?」

優子「いいわ。その話のつたわ。」

零「さすが腐女子。」

優子「そういう訳じゃないわよ。秀吉の演劇をバカにしてたし。それに、あんなのも私の弟だからね。」

零「お前凄くいい奴だな。」

優子（その顔は反則よ！）

零「鬼ごっこでやることがあるから、行くぞ。」

プルルルルルガチャ。

根元「なんだ、哀川？」

零「いい加減、女装登校を辞めたくないか？」

根元「何をすればいいんだ？」

零「これをやってくれ。」

放課後

伝説の木の下

雄二「ギリギリ逃げきれた。待ち合わせ場所はここだな。」

根元「坂本、お前のことが好きだ！」

雄二「お前かよ！」

ドカ！

雄二「こんな奴の為に俺は頑張ったのか？最悪だ！」

実はその後

零「女装して伝説の木の下で雄二に告白したら、卑怯なことをしない限り、自由にさせてやるよ。」

根元「坂本に告白!？」

零「で、やるのか?」

根元「くっやってやるよ!」

零「じゃあ、よろしく。」

告白は録音してるがな。

条件付きとはいえ、俺も甘くなつたな。

休日（前書き）

作者が恋愛パートがはてしなく苦手なよういつでも以上に駄文になっ
ています。

バカテストは今回ありません。

休日

霧島サイド

プルル、メールがきたみたい。

潤からだ。

潤『翔子、俺好きな人が出来たんだが、どうすればいいと思うっ？』

えーっと。

霧島『手錠をかけて、家にお持ち帰りすればいいと思う。』

送信

潤『いや、それはまずいだろ！？』

霧島『じゃあ、デートに誘ってみれば？明日は休みだし。』

潤『それはいいな。ありがとう。翔子。』

うん、良かった。役に立って。

でも、潤も好きな人が出来たんだ。

しかも、相談してくれるなんて。

優子や愛子と同じで。

翌日

零サイド

ピンポーン

誰か来たみたいだな。

ガチャ

潤「突然邪魔してすまない。零、今日は暇か？」

零「本当に突然だな。まあ、いい。立ち話もなんだしあがれ。」

潤「それじゃあ、お言葉に甘えて。」

潤をソファーに座らせる。

零「で、なんのようだ？」

潤「いやな。映画のチケットが二枚あったから、お前が暇なら誘おうと思つて。」

零「まあ、暇だが。何故、俺なんだ？」

潤「えっと、いや、Fクラスに入ったし交流をと思ってな。一番、お前が話し安かったからな。」

零「そうか。俺は別にいいが。」

ピンポーン

零「悪い。誰か来たみたいだ。」

ガチャ

優子「今日、暇？カフェで秀吉と吉井くんについて今後のことを話したいんだけど。」

零「ちょっと待て、一旦あがれ。」

潤「誰か来たのか？優子？」

優子「おじゃまします。えっ、潤？」

潤・優子「「どうしているんだ・の？」」「

説明中

潤（まさか、優子が零のこと好きだなんて。）

優子（まったく同じことを考えていたなんて。）

零「どうしたんだお前ら？」

ピンポン

零「また、誰か来たみたいだ。」

ガチャ

工藤「零くん。約束の柔道の代わりにゲーセンに行かない？」

零「お前もか。部屋にあげれ。」

工藤「お前「も」どういうこと？」

零「来れば分かる。」

潤・優子「愛子!?!」

零「説明が面倒だから、しといて。その間に飯食ってくるから。」

説明中&食事中

零「食い終わったけど、どうなったんだ？」

潤「結果、全ての場所を全員で行くことになった。」

零「凄い結果に行き着いたな。」

潤「それじゃあ、まず最初は俺の映画館だ。」

そんなこんなで映画館。

零「ところで、チケットは2つしかないんだろ。」

優子「それくらい自分で払うわよ。」

零「別に俺が出してもいいぞ。10万程持って来たから。」

工藤「それ学生の持つような金額じゃないよね!？」

零「自分で稼いだ金だ。問題ないだろ。」

優子「アンタ、何してるの?」

零「企業秘密だ。」

潤「怖くて聞けないな。」

零「なんでもいいから、とっとと買ってこい。」

映画代を渡す。

おっと、あれは明久達か。

映画代が高くて困ってるみたいだな。

だから、ちゃんと節約しろと言ったのに。

今月は見逃すが、来月ちゃんとしてなかったらO・H・A・N・A
- S - H - I だな。

後は雄二か。手錠は見なかったことにするよ。

おっ、愛子たちが戻ったな。

零「ところで何を見るんだ？」

潤「えーと、『着信無し』。」

零「それは、面白いのか!？」

愛子「ちゃんとしたホラーらしいよ。」

潤「ホラー!？」

零「何、驚いてんだ?お前が持って来たのに。それに、まさかホラーが苦手とか?」

潤「まさか、そ、そんなはずあ、ある訳ないだろ。」

潤(母さんのバカ!俺がこういうの苦手なの知ってるのに!)

ここまで分かりやすい反応する奴普通いないだろ。

零「あー、分かった。分かった。」

潤「なんだその目!信じてないだろ!？」

零「信じてる。信じてる。」

潤「嘘だっ!」

ひぐらしネタかよ。

零「分かったから、そろそろ上映するから行くぞ。」

1時間後

潤「ひっく、ひっく。もうあんなのヤダ。」

大変です皆さん。潤が壊れました。

上映中は他の人に迷惑なので声を出さなかったけど、めっちゃ泣いて抱きついてきました。

ドンだけ怖かったんだよ。

零「次は喫茶店だろ。ケーキを買ってやるから、泣きやめ。」

潤「ホント?」

涙目で上目遣いって、止めてくれない。だって、戦場ヶ原の顔だよ。阿良々木だったら理性ぶっ飛んでるよ。

零「ホントだから。」

さて、空気かしてた二人は

優子・愛子（）いいな。潤。零に抱きついたり出来て。（）

そろそろ次に行きますか。

さて、喫茶店はご存知、清水の家です。

優子「このスイーツはどれもおいしいのよね。いくらでもいけるわ。」

零「それはいいが、太るぞ。」

優子「な！女の子にそれはないでしょ！」

零「そうだが、お前の生活を考えたらその結果にいたるだろ。」

優子「だから、なんでアンタが知ってるのよ！」

零「禁則事項です。」

優子「ここでハルヒネタ!？」

零「秀吉と一緒に走ったらどうだ？」

優子「確かに、最近お腹が出てきたしって、余計なお世話よ!」

零「なんなら、俺も一緒に走ってやるから。」

優子「えっ? まあ、それなら走ってもいいかな。」

優子（零と一緒にいられる時間が増える。）

零「暇な時だけだな。」

優子「うん。」

さて、今回空気だった二人は。

潤はさっきの映画で自棄ぐいしてる。

愛子（ずるいな。今日僕だけ零と会話出来てないよ。）

最後の場所に行きます。

ゲームセンター

愛子「じゃあ、僕と勝負しようか。零くん。」

零「別にいいぞ。何をするんだ？」

愛子「じゃ、音ゲーで。」

優子「私達も後でやる。」

太鼓の達人を開始

一曲目終了

鬼フルコンボ

愛子「さすがだね。零くん。」

零「お前もな。」

潤「俺達じゃ適わないな。」

零「じゃ、次だ。」

二曲目終了

また、鬼フルコンボ

ギャラリーが集まってきたな。

零「他のやつに替えようぜ。」

愛子「そうだね。人が集まってきたし。」

ダンスゲーム

また、フルコンボを繰り返してたら、ギャラリーが集まってきた。

他のゲームも同様に進んだ。

零「人がすぐ集まり過ぎだろ。」

愛子「久々に楽しめたよ。」

零「同感だ。張り合える奴はそうそういないよな。強くなった理由とかあるのか？」

愛子「よくゲーセンに行くしね。」

零「そうか。」

優子「あれやらない?」

優子が指さした先はプリクラがある。

零「あれなら、お前らでも平気か。」

潤「俺達が下手なわけじゃないだろ。お前らが普通じゃないだけだ。」

零「まあ、そうか。」

優子「それより早くやる!」

プリクラは何故か、俺と二人きりで撮りたいと全員が言いやるし、全員で撮るときは立ち位置でもめるので疲れた。

こんな感じで1日が終わった。

落ちがねえ!。

???

????サイド

やっぱり、彼を選んで成功だったわ。

こんな面白い状況にしてくれたし。

でも、新キャラを出さなくちゃいけなくなるとは思わなかったわ。

一応、釘を刺しておこうかしら？

まあ、いいわ。原作が壊れるのは本望だしね。

次は確か、清涼祭だったかしらね。

問題が起きるのは目に見えるわね。

さて、その問題をどうぶち壊すのかしら。

アタシのために努力してもらわないとね。

きゃははははははは！

哀川 零サイド

はっくしょん！

誰か噂してんのかね？

清涼祭出し物決め（前書き）

バカアンケート

あなたが今欲しい物は何ですか？

姫路 瑞希

クラスメイトとの思い出。

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物もいいかもしれませぬ。写真館とかも候補になりうると覚えておきましょう。

土屋 康太

Hな本（訂正）成人向けの本

教師のコメント

訂正の意味があるのででしょうか？

吉井 明久

カロリーー

教師のコメント

この回答に君の生命の危機を感じます。

哀川 零
死神の眼

教師のコメント
寿命半分で取引してください。

清涼祭出し物決め

清涼祭については、原作知識がある人には必要ないと思うが、文月学園の学園祭だ。

他のクラスでは、お化け屋敷や出店などをやることが決まっているが、俺達Fクラスは、

零「さあ、こい！明久。」

俺はピッチャーの明久に向かって、バットを向ける。

そう絶賛野球中。

明久「ホームランサインだと！」

明久（雄二、どうする？）

雄二（ホームランサインをしているから、外に外せ。）

明久（了解。）

零は外れた球に向かってバットを振る。

明久・雄二（かかった。）

外れた球はバットに当たり、その球は明久の顔面に当たる。

明久「グハッ！」

零「ピッチャーに向かってバットを向けたんだから、ピッチャーに
当てるサインに決まってるだろうが。」

雄二「どこの常識だ！」

鉄人「何をやってんだ！バカ共！」

げっ！鉄人だ！

雄二「逃げるぞ！」

俺と明久と雄二は一緒に逃げる。

明久「そんなこと出来るわけないだろう！」

何があつたんだ？こいつら。

しょうがない。こいつら置いてくか。

俺はナイフを壁に刺し、登っていく。

鉄人「どんだけ、規格外なんだお前は！？」

雄二「俺達を置いていくな！」

零「知らんわ。頑張つて逃げろよ。」

Fクラス

雄二「さて、Fクラスの出し物を決めなくてはならないのだが、実行委員を決めそいつに任せたいと思う。」

零「雄二。ちよつと用事があるから行ってくる。」

雄二「用事って、なんだ？」

零「悪いがそれは企業秘密だ。」

そう言つて俺は教室を出る。

試召戦争で姫路の転校は無くなったが、教頭の計画をぶち壊さないといけないからな。

学園長室

零「おい、ババア暇潰しに来たぞ。」

零「盗聴機があるから、メモで会話するぞ。」

藤堂「なんだいいきなり。」

藤堂「分かった。そんな物まで用意してたなんてね。」

零「で、どこまで修理が出来たんだ？」

藤堂「代理召喚型は間に合ったが、同時召喚型は平均点を越すと、能力付与型はAクラスレベルに達しないと暴走しちゃうよ。」

能力付与型は原作に登場しなかった物である。データベースにその情報が乗っていた時には驚いた。

能力付与型は武器を手放し、点数を消費し、ランダムに腕輪のような能力が使えるようになるというものだった。

藤堂『さて、どう回収する気だい？』

零『どうって、大会に出るしかないだろ。場合によっては4人程協力者を使いたいんだが、この問題について伝えていいか？』

藤堂『ダメと言いたいところだが、なりふりかまってられないからね。許可するよ。』

零『助かる。』

藤堂『こんだけ協力するからには、絶対にチケットを手に入れなよ。』

零『了解した。』

普通の会話では、雄二が原作で行っていた取引をしていた。

Fクラス

零『えっと、ただいま。』

雄二『戻ってきたか。出し物決まっちゃったぞ。』

零「で、何になつたんだ？」

零（中華喫茶になつてると思つがな。）

雄二「コスプレ喫茶（女装も可）。」

零「何があつたんだ!？」

雄二「玉野が出した案なんだが、バカ共はコスプレというところばかり見てたみたいで決まった。」

零「俺は厨房しかやらんぞ。」

雄二「あいつらが納得するかな？」

零「俺の見たつて、誰も特しないだろ。」

雄二「明久と同じくらいの鈍感野郎だな。」

零「なんのことだ？まあ、いい。お前さ、召喚大会の賞品が何か知つてるか？」

雄二「興味ねえよ。」

零「如月グランドパークのプレオープンペアチケット。」

雄二「ぐっ、それは本当か!？」

零「ちなみに、それは優勝と準優勝の二組にくばられる。」

雄二「絶対に翔子の奴は出てくるぞ。」

零「しかも、幸せになるというジंकウスを作るために無理矢理結婚させるそうだ。」

雄二「行かなくても結婚、行っても結婚だと！」

零「それを回収するように権限を少し貰って、頼まれているんだが、どうする？」

雄二「協力しよう。」

零「話が早くて助かる。貰った権限は何回戦ぬどの教科を使うかというものだ。」

雄二「なるほどな。それで、あと二人は誰にするつもりだ？」

零「明久と秀吉かな。」

雄二「なんで明久なんだ？」

零「今、明久と秀吉をくっ付けようと思ってるからな。勝てるよう作戦を頼む。」

雄二「秀吉は男だぞ。何を考えてんだ？」

零「いや、面白そうじゃん。」

雄二「確かに否定できないな。」

零「だろ。他の奴とくつつくより絶対に面白い。」

雄二「まずは、明久達を呼ぶか。」

明久、秀吉を召集&プレオープンペアチケットについて説明。

零「手伝ってもらえないか？」

明久「いいよ。零には助けて貰ってるからね。」

秀吉「同じく、了解したのじゃ。」

零「ありがとよ。」

雄二「さて、チーム分けだが、どうする？」

零「俺と雄二、明久と秀吉でいいんじゃないか？」

秀吉「それでは、点数に偏りが出るのではないかのう。」

零「お前らのブロックには、Aクラスレベルが入らないようにトーナメント表をいじくるから安心しろ。」

明久「出た。零の職権乱用。」

零「まあ、そんなわけでお前ら二人は試召戦争を経験してるから、なんとかなるだろう。」

雄二「それじゃ、後の作戦は任せてくれ。」

零「それはいいが、雄二は出し物に参加する気は無いのか？」

雄二「一応、参加はするがクラス代表として動く気はないな。」

零「お前頑張った方がいいぞ。Aクラスの奴らを取り入れたから、そいつらに人望が向いていつてるからな。」

明久「確かに、雄二より霧島さんや久保くんを代表にした方がいいって声を最近聞くし。」

雄二「そんなことになってたのか!？」

零「こういう時に引張ってかないとマズいぞ。」

雄二「出し物の方も実行委員の木下姉に任せっきりはやめるか。」

よし、雄二が真面目にやるようになった。

つーか、優子が実行委員してたんだ。

清涼祭初日一回戦（前書き）

バカアンケート

喫茶店を経営する場合、制服はどんなものがいいですか？

姫路 瑞希

家庭用の可愛いエプロン

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

土屋 康太

スカートは膝上15センチ、

教師のコメント

裏面までびっしり書かなくても。

吉井 明久

ブラジャー

教師のコメント

ブレザーの間違いだと信じています。

哀川 零

俺のクラスは知らないうちにコスプレになってた。

教師のコメント

……………頑張ってください。

清涼祭初日一回戦

あれから、雄二は物凄い統率力を見せ、完璧にまとめていった。

で、清涼祭当日

みんなコスプレをしてる。

メインキャラは

哀川 零 戯言遣いのコス

吉井 明久 落とし神のコス

坂本 雄二 図書館で戦ってる人のコス

土屋 康太 ガーゴイルがいる家の長男のコス

木下 秀吉 迷い牛のコス

姫路 瑞希 夢の部の制服

島田 美波 白い魔法使いのサポートのコス

霧島 翔子 巫女服

木下 優子 陵桜学園の制服

工藤 愛子 常盤台中の制服

久保 利光 魔法学校の天才コス

天東 潤 直江津高校の制服

須川 亮 チャイナ服

清水 美春 自称神のコス

玉野 美紀 メイド服

声優ネタかよ！

見つからなかった奴は一般的なコスプレです。よく分からなかったら自分で探してね。

雄二「で、厨房の方は平気なのか？」

零「愚問だな。俺がいるんだぞ。」

雄二「それもそうだな。」

姫路「私も手伝いたかったんですけど。」

零「女子は全員ホールじゃないといけないからな。」

姫路「そうですね。」

零（客を殺すわけにはいかないからな。）

明久（ナイス零。）

零「俺達は召喚大会で抜けるが、その時は康太と須川頼むぞ。」

康太「……………任せろ。」

須川「やってこい。」

島田「召喚大会って、もしかしてアキも出るの?」

明久「えっ、そうだけど。」

島田「もしかして、目的はオープンチケット?」

明久「うん、そうだけど。」

島田「誰と幸せになりに行くの?」

明久「えっと。」

明久は困って俺と雄二を見る。

零・雄二「「秀吉と行くんだよ。」」

明久「うん。そう両手首がねじ切れるように痛ーーい!」

島田と姫路が両側から手首を360度曲げる。

零「おい、そろそろ予選だから放してやれ。」

優子・愛子・潤「「「零は誰と行くの(んだ)?」」」

零「なんだいきなり。第一俺の目的は腕輪だ。」

優子・愛子・潤「……そうか（なんだ）。」「」

すっげーシンクロ率。

明久を拾って会場に行く。

零「明久、秀吉、決勝までちゃんとあがってこいよ。」

明久「そっちはAクラスレベルがいっぱいいるんだから、そっちこそ頑張つてね。」

秀吉「絶対に勝ち上がるのじゃ。」

零「じゃあ、雄二行くか。」

雄二「ああ。」

予選会場

零と雄二が会場に上がる。

岩下「何、Fクラスが私達を待たせたるのよ。」

零「悪い悪い。雑魚A。」

菊入「Fクラスが何言ってるのよ！」

零「黙れ、雑魚B。そのFクラスに負けたBクラスがほざくな。」

雄二「Bクラスの連中だったのか。」

零「覚えてなくてもしょうがねえよ。だって、姫路の腕輪で一瞬でやられたからな。」

雄二「ああ、あの時の。よく覚えてたな。」

零「そりゃあそうだろ。あんな出落ちキャラはそうそういないぜ。」

雄二「確かにな。」

雑魚A「言わせておけば！」

雑魚B「そうよ！って、雑魚表示になってるわ！」

高橋「いい加減、はじめてください。」

零・雄二・岩下・菊入「」「」「サモン！」「」「」

岩下の召喚獣は忍者服にクナイ。

菊入の召喚獣は鎧に剣。

雄二の召喚獣は特效服に、

菊入「二人共、素手？」

雄二「よく見るメリケンサックがついてるだろうが。」

零「説明すんのめんどい。」

岩下「雑魚がいる!」

零「てめえがな。」

その瞬間、岩下の召喚獣の体がバラバラになる。

零「じゃあな。出落ち。」

雄二「オラオラオラ!」

《哀川 零&坂本 雄二VS岩下 律子&菊入 真由美

現代文

373&238VS0&184》

零「雄二、お前は戦争に参加してないんだから、練習しておけ。」

雄二「そうさせてもらう。」

零「でも、不良が女子をいじめてるようにしか、見えねえな。」

雄二「うるせえ!それ、フィニッシュだ。」

高橋「勝者、哀川&坂本ペア。」

福原「勝者、吉井&木下ペア。」

おっと、ちゃんと明久達も勝ったのか。つーか、会場が思ったより

近かったな。

零「雄二、そろそろ戻りますか。」

雄二「そうだな。」

清涼祭初日二回戦（前書き）

バカアンケート

喫茶店を経営する場合、ウエイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？

？可愛いらしさ

？統率力

？行動力

？その他（ ）

また、その時のリーダーの候補も挙げてください。

土屋 康太

？可愛いらしさ

候補：誰を選べばいいか、分からない。

教師のコメント

確かにFクラスには現在、綺麗どころが揃ってますからね。ですが、ちゃんと選びましょう。

吉井 明久

？可愛いらしさ

候補：姫路瑞希（訂正）、木下秀吉（訂正）、霧島翔子（訂正）、
工藤愛（訂正）、天東（訂正）、木（訂正）、島田美波

教師のコメント

用紙についている血痕が気になります。

坂本 雄二

？その他（結婚相手）

候補：霧島翔子

教師のコメント

どうして霧島さんが用紙を持ってきたんでしょうか？

哀川 零

？統率力

候補：ジャンヌ・ダルク

（？を選んで、実際にいる生徒を書いたら殺される気がした。）

教師のコメント

……………今回は多目に見ましよう。

清涼祭初日二回戦

Fクラス

現在報告

果てしなく忙しい。

客がふざけてるほど入ってるからな。

須川「ミートスパゲッティを2つ。」

零「了解。」

康太「……………カツ丼1つ。」

零「了解。」

明久「海鮮寿司を3人前。」

零「了解。」

明久「了解していいの？」

零「金さえ払えばな。」

雄二「信頼を2つ。」

零「了解。」

明久「そんな物、本当に作れるの!？」

零「信頼つて、名前の料理を勝手に作っちゃうまえば問題ないだろ。」

明久「そんなんでいいの?」

零「実際に見たことねえから大丈夫だろ。ほれ、ミートスパゲッテ
イ、カツ丼、海鮮寿司が出来たぞ。」

そう、俺がいる場合はメニューに無い物でも作っている。

材料があり、値段は高く設定されてるけどな。

常村「おい、責任者出しやがれ!」

雄二「嫌がらせか?」

零「はあ、雄二ちょっと一緒に来てくれ。」

雄二「最初っから、そのつもりだ。」

夏川「おい、責任者を出せって言ってんだよ!」

零・雄二「「おらあああ!」「」

雄二は常村をぶん殴り。

零は夏川の眼に指をぶっ指す。

雄二「我々が責任者と料理長ですが、何かご不満がありましたか、お客様？」

夏川「不満も何も今暴力を振るわれたんだが。」

雄二「これが、我々のパンチから始まる」

零「目潰しから始まる」

零・雄二「交渉術です。」

常村・夏川「なんじゃそりゃあ!?!」

零「めんどい、明久何があった?」

明久「料理に髪の毛が入ってたと文句を言ってきたんだよ。」

零「随分、まともな文句だな。」

常村「だろ。これを見る!」

髪の毛を指す。

零はその毛と常村の髪をむしり取り、ケースに入れる。

常村「いってー!いきなり何しやがる!」

零「DNA照合してんだよ。」

明久「そんなこと出来んの!?!」

零「細かいところまでは分からないが、同じかどうかは分かるようにしてある。時間をかければ出来るがな。」

ピコーン

零「やっぱり、一致したみたいだがどういつことですか？常夏コンピ。」

常夏コンピから汗が出る。

零「警察でも呼びますか。営業妨害ってことで訴えることもできま
すし。あーあ、受験生なのに。」

常村「それだけは辞めてくれ。」

零「だってよ雄二、どうする？」

雄二「しょうがない。許してやるか。」

以外だな。

夏川「ほ、本当か！？」

雄二「ああ、しばいた後でな。」

やっぱり雄二だ。

雄二は常村をドロップキックし、締め業でフィニッシュ。

零は夏川を格ゲーでやったら嫌われそうな、はめ業を使用。

零「お客様の皆さん、お見苦しい物を見せてしまつてすみませんでした。このようなゴミを許してやって下さい。」

まあ、その後に他に問題は起きないまま時間が経った。

んで、召喚大会二回戦目

相手ペアは根元&小山ペア

根元「げっ、お前らかよ。」

零「予想外のペアだな。小山、別れたんだろ。」

小山「そうなんだけど、この変態が女装はもうしないから、よりを戻してくれって言うから、この大会の結果次第で考えてもいいって言ったのよ。」

零「そうか。根元、未練がましいな。」

根元「うるさい！そういう訳だから、あの契約を使うんじゃないぞ。」

零「分かってるよ。ちゃんとやってるんだから、契約は使わねえよ。」

根元「そうか。そこまで鬼じゃないか。」

零「ところで小山。このテープを聴いてみたくは無いか？」

小山「何そのテープ？」

零「今から流すから聞いとけ。」

テープを流す。

根元『坂本、お前のことが好きだ！』

ラブレターの時のです。

零「ちなみに一切、手を加えてません。」

根元「お前が言えって、言ったんだろうが！」

雄二「零、てめえの仕業だったのか！物凄く気持ち悪かったんだぞ！」

あつ、雄二にばれちった。

小山「私達の負けでいいわ。後、近寄らないでね。変態が。」

小山は根元に言い捨てる。

えっ、酷い？

しょうがないじゃん。科目が苦手な英語だったんだから。

清涼祭初日昼食時(前書き)

アンケート

霧島&潤VS優子V&愛子

霧島&潤VS姫路&島田

が、見たいかどうか、感想に送ってください。

清涼祭終了まで受け付けます。

バカテスト 英語

マザー《母》から(?)を取ったら、(?)《他人》です。

姫路 瑞希

マザー《母》から(M)を取ったら、(Other)《他人》です。

教師のコメント

その通りです。このような関連づけた覚え方も便利でしょう。

吉井 明久

マザー《母》から(お金)を取ったら、(親子の縁を切られるの)

《他人》です。

教師のコメント

英語関係無いじゃないですか。

土屋 康太

マザー《母》から（M）を取ったら、（S）《他人》です。

教師のコメント

土屋さんの『MS』でも、『SM』でも反応に困ります。

哀川 零

マザー《母》から（遺産）を取ったら、（用済み）《他人》です。

教師のコメント

どれだけ酷いんですかあなたは！？

清涼祭初日昼食時

Fクラス

雄二はトイレに寄ってくということ、俺は一人で戻ってきた。

優子と愛子が落ち込んだ。

零「お前ら、どうしたんだ？」

愛子「いやあ、召喚大会で翔子達に後ちよつとところで負けちゃってね。」

零「お前らも出てたのか。」

優子「そうよ。でも、翔子と潤のチームに当たってしまったのよ。」

零「そうか、残念だったな。」

優子「何を言ってるのよ。このまま行ったら次の次で当たるわよ。あんた達。」

零「心配してくれてありがとよ。敵討ちしてやるから安心しろ。」

優子「心配なんてしてないんだから。」

愛子「優子って、シンデレレを素でやってるの？」

優子「誰がシンデレレよー！」

雄二「バカなお兄ちゃんは沢山いるんだが。」

雄二が島田妹を連れてきた。

零「まさか、その中に俺が入ってるなんて言わねえよな。幼女誘拐犯。」

雄二「誰が幼女誘拐犯だ！」

零「霧島、雄二は子供が好きそうだ。」

雄二「な、何を言うんだ！」

霧島「……今から、一緒に作ろう。」

雄二「ギャーーーーー！」

明久「霧島さん、夜にして。」

霧島「……分かった。」

葉月「あっ、バカなお兄ちゃん。」

零「やっぱり、明久か。」

明久「僕がバカだつて言うのか！」

零「えっ！今まで気付かなかつたの!？」

葉月「バカなお兄ちゃんは物凄いバカですよ。」

明久「小学生にまで。第一君は誰？」

葉月「ふえ、バカなお兄ちゃんは葉月のこと覚えてないんですか？
『バカなお兄ちゃんいませんか？』って、一生懸命探したのに。」

雄二「明久じゃなくてバカなお兄ちゃんがごめんな。」

秀吉「バカなお兄ちゃんはバカじゃからのう。」

零「そうだ。バカなお兄ちゃんは学園を代表するバカだからしょうがないんだよ。」

葉月「だって、バカなお兄ちゃんにファーストキスマまであげたのに。」

島田「瑞希。」

姫路「美波ちゃん。」

姫路・島田「殺るわよ！」「」

毎回思うんだが、本当に明久のことが好きなのか？

それより、

零「警察は110番だから。」

明久「リアル警察だけは止めて！」

零「はあ、口を開ける。」

明久「えっ、何で!」

零「食い物やる。」

明久「ホント!分かった。」

明久は口を開けたので、周りに見えないようにクッキーを入れる。

姫路特性の

明久は倒れたので、姫路と島田は慌てて離す。

島田「ちよつと零、何を食べさせたのよ!」

零「バイオ兵器。」

姫路「なんて物食べさせてんですか!」

作った本人が言うなよ。

零「ちよつと起こすから、待ってる。」

明久を裏に連れてく。

零「明久、起きろ。」

明久「大丈夫だよ!」

零「無事だったか。」

明久「あの川を渡ればいいんでしょ。」

零「大丈夫じゃなかった！戻ってこい！」

明久「六万！？無理だよ。零に言われて最近やっとちゃんとした生活を送ってるのに！」

零「明久、言われたことを守ったことは褒めるが、そこは、六文が六万だつてことに文句を言おう。」

明久「あれ、ここは？」

零「ナイス川渡し。」

明久「そういえば零！よくもあんな危険物を僕に食べさせたな！」

零「悪かった。だが、ちゃんとまともな生活を送ったんだな。」

明久「約束だからね。」

零「その褒美として、あのちびが誰か教えてやる。」

明久「えっ！知ってるの零？」

零「俺の情報を舐めるな。あのちびは島田の妹で、お前が観察処分者になった2日前に会っているはずだ。」

明久「あつ、ぬいぐるみの子か。」

零「思い出したか。なら、そろそろ戻るぞ。」

明久「そうだね。」

俺達はみんなの元に戻る。

零「今、戻ったぞ。」

雄二「零、ちびっ子からと翔子が佐藤から気になる情報をもらった
そうだ。」

零「どんな内容だ。」

雄二「Fクラスの悪口を言ってる輩がいるそうだ。」

零「あの常夏コンビか？」

雄二「十中八九そうだろう。」

零「じゃ、今から行くか。」

雄二「そうだな。メンバーは召喚大会がまだある奴らだな。」

零「ついでに昼飯を食ってくる訳だな。」

というわけで、零、明久、雄二、秀吉、姫路、島田、霧島、潤で来て
ます。

てか、姫路と島田も出てたんだ。

次に霧島、潤ペアに当たるみたいだけど。

霧島「……で、美穂。どこにいるの？」

佐藤「あ、代表。あいつらです。」

霧島「……私はもう代表じゃないから、名前で読んで。」

佐藤「あ、すみません。それじゃ、翔子さん。」

霧島「……うん。それでいい。」

俺達はさっき佐藤が指した方向を見ると常夏コンビが騒いでる。

常村「Fクラスの料理はクソ不味かったな！」

夏川「しかも、クソ高かったしな！」

常村「あんなので、よく金が取れたな！」

雄二「あいつらはいつからいんだ？」

佐藤「初めは『こんな事やって大丈夫か？』や『やるしかねえだろ。』とか、言ってたんですけど。だんだんエスカレートしてあんな風
に。」

雄二「喫茶店の制服を1つ貸してくれ。」

零「いや、2つだ。」

雄二「まさか、明久だけじゃなくお前まで着る気か!？」

明久「僕が着るのは前提なの!？」

零「まあ、そうだが。俺の料理をバカにしてただで済むと思っ
てんのかね?アイツラ。」

雄二「殺るなよ。」

零「社会的には?」

雄二「許可する。」

零「了解。」

佐藤「持ってきましたよ。」

数分後

明久は秀吉と玉野の腕でアキちゃんに大変身した。

俺の場合は、なんか中性的だから必要無いらしい。

なんか涙出てきた。

ただ女子の制服を着た俺を見ただけで、何故かいた康太は鼻血を出
すし、雄二は霧島に目潰しされるし、潤は暴走、明久にいたっては
『第二の秀吉』とまで言いやがったよ。

零「それじゃ、明久行くぞ。」

明久「うん。」

零は常夏コンビのテーブルにクッキーを出し、

零「サービスです。良かったら召し上がってください。」

常村「おお、そうか。ありがとよ。」

夏川「Fクラスとは大違いだな。」

常夏コンビはそのクッキーを食べたとたんに襲い掛かってきた。

さっきのクッキーに惚れ薬の一種と理性が保たなくなる薬を入れておきました。

効果は20秒位です。

零・明久「「キャーーーーー!!」」

私達は襲い掛かってきた常夏コンビをぶっ飛ばす。

常村「あ、あれ俺達は?」

夏川「なんでこんなに体が痛いんだ?」

雄二「何ごとだ!?!」

零「あの人たちがいきなり襲い掛かってきたんです。」

常村「なんのことだ!？」

夏川「そんなことしてないぞ!」

客1「俺は見てたぞ!」

客2「そーだ!俺の目は節穴じゃないぞ!」

客3「この女の敵!」

零「怖かったよ。」

零の嘘泣き。

客1「こんな娘を泣かして、やっちまえ!」

客が一斉に常夏コンビに襲い掛かる。

常村「一体、どうなってんだ?」

夏川「早く逃げるぞ!」

常夏コンビはクラスを出ていく。

客3「もう大丈夫よ。あいつらはいなくなったから。」

零「ありがとうございます。」

涙目+上目遣い

何人が鼻血出して倒れた。

そんな訳で常夏コンビが言ったことは嘘だろうって、話になった。

秀吉（あの腕、演劇部に欲しいのじゃ。）

潤（危うく、気絶するところだった。）

この時の写真が裏でムツツリー二商会で高値で売られていることを会計の零は知らない。

この少女を崇める信者が100人以上現れたことを零は知らない。

零がほとんど秀吉と同じような扱いになったことを零は知らない。

清涼祭初日三回戦

三回戦の相手は常夏コンビだ。

原作と違って観客あります。

ちなみに俺の格好は澄百合学園の制服を着ている。

康太が島田妹のと一緒に作っていた。

島田妹のは夢の部の受け付けのコス。

作るの早！

この格好は宣伝&常夏コンビをアウェーにするために。

では、さっそく

零「キャーーーーー！」

高橋「どうしたんですか？哀川さん？」

高橋女史、この格好に触れないのは嬉しいけど、何故顔が赤いんですか？

零「実はあの変態共がいきなり襲い掛かってきたんです。」

高橋「それは、本当ですか!?!」

雄二「ああ。しかも、あいつらはやったそばから見に覚えがないとか、言いやがったんだよ。」

夏川「本当に何も知らないんだ！」常村「第一そいつは男だろ！」

観客「ふざけんな！どこが男って言うんだ！」

観客「少なくとも男の娘だ！」

観客「引っ込め！」

計画通り常夏コンビはアウエーになった。

高橋「どうしますか？やりますか？」

夏川「やらないって、選択肢が存在してるのか!？」

常村「やるに決まってるだろ！へっ後悔させてやるよ。残念だったな。今回は俺達の得意な数学だからな！」

高橋「そうですか。それでは、始めてください。」

零・雄二・常村・夏川「」「」「サモン!」「」「」

《哀川&坂本VS常村&夏川

数学

731&275VS438&397》

零「得意なんですか？（笑）」

常村「なんだ！その規格外！」

夏川「700点オーバー!?」

零「雄二、今回あなたの出番はありませんよ。」

雄二「別にいいが、その喋り方を止める。」

零「それじゃあ、替えます。《キメラ》。」

《キメラ》を発動し、現れたのは

麦わら帽子にぼたぼたのズボンをはいて、釘バット《愚神礼賛》を使用している。

点数も合計になる。

夏川「1000点オーバー!?無理だろ！」

常村「ちっ、腕輪を使ってやる。」

いつの間にか、常村の召喚獣の頭が無くなっている。

零「零崎は始まってるっちゃ！」

常村「顔面が潰れるようにイッテエエー！」

と、言って気絶した。

零「800点が越えたから、特殊能力が発動したからっちゃな。」

夏川「なんだそりゃあ!？」

零「この召喚獣の能力は《仲間^{チーム}》だっちゃ。なにかしらのバグを起こす能力だっちゃ。」

雄二「今回は、相手を観察処分者になつたって訳か。」

夏川「1000点オーバーのフィードバックって、死ぬだろ!」

零「それじゃ、止めだっちゃ。」

夏川の召喚獣の胴体がなくなる。

夏川「ぐはっ。」

一瞬で堕ちちゃった。

高橋「勝者、哀川&坂本ペア。」

えっと、これでは教頭と誘拐だけか。

零「高橋女史、マイクを借りていいですか?」

高橋「はあ、構いませんが。」

零「それじゃ、観客の皆さん。Fクラスのコスプレ喫茶に来てくださいね。」

宣伝を忘れずに。

零「高橋女史、ありがとうございました。」

高橋「お祭りですし、これくらいはいいですよ。」

零「それじゃ。」

こんな感じで三回戦は終了。

清涼祭初日誘拐（前書き）

オリジナルのバカテストをやった方がいいのでしょうか？

清涼祭初日誘拐

Fクラス

康太「……………ウエイトレスが攫われた。」

なんでだ！？行動が早過ぎるだろ！

常夏コンビを倒したのが問題だったか。

だが、手を打ったはずだぞ。

零「須川達に護衛をしてもらったはずだぞ。」

須川「すまない。人質をとられてしまって、手を出せなかった。」

ボロボロになった須川が言う。

零「くつ、誰が攫われたんだ？」

康太「……………姫路、島田姉妹、木下優子、工藤の5人。」

零「居場所は？」

康太「……………カラオケ店。」

明久「なんで分かるの？」

康太「……………発信機。」

明久「OK。なんで待ってんのかは聞かないよ。」

雄二「それじゃ、明久、零、康太行くぞ！」

潤「俺も行くぞ！」

雄二「いや、他の奴は店を続けてくれ。お前らは店を守れ。」

零「お前ら、俺らがない間、今度はどんなことがあると絶対に守りきれ！」

潤「しょうがない。お前らに任せた。次の試合は2時間後だ。それまでに戻ってこい。」

零「了解した。」

さーて、俺を怒らせたらどうなってもいいって、ことだよな。

カラオケ店

明久が乗り込んだしまったシーンです。

雄二「あのバカ。」

零「それが明久のスゴいところだよ。さすが王子役。」

雄二「お前も王子役なんだがな。」

零「変なこと言っていないでそろそろ行くぞ。」

雄二「はあ、あいつらも苦勞するな。」

零と雄二は部屋に乗り込み、不意打ちでぶっ飛ばす。

零が蹴った奴からは嫌な音が聞こえた。

零・雄二「明久、貸し一だ！」

不良「あいつらが坂本と哀川だ！」

不良「坂本ってのは、悪鬼羅刹だが、哀川って何者だ！？やられた奴骨折れたぞ！」

零「悪いが、手加減する気はねえ。」

不良「こいつが痛い目に」

康太「……………会うのはお前。」

人質を取った奴が康太にやられる。

雄二「ムツツリーニ、女子を連れて帰れ！」

ムツツリーニが女子を連れて出ていく。

明久「よくも邪魔したな！」

雄二「ストレス発散にちょうどいい。」

零「Let's, shall we dance?」

不良「こっちの方が数は上だ!」

不良「そうだ!全員か、ごはっ!」

喋ってる最中に跳び蹴り。

不良「喋ってる最中に攻撃は卑怯だろ!」

零「知るか。」

不良に向かってガードの上から踵落とし。

ゴキ。

ガードに使用した腕が折れる。

不良「化物だ!」

零「否定しねえよ。」

不良「鬼だ!」

雄二「否定しねえよ。」

似たようなこと言われてるな。

雄二は相手を掴んで、その相手を使って殴っている。

数分後

不良殲滅

零「明久、雄二先に戻ってる。」

明久「なんで？」

零「大事にならないように、後始末をしておくから。」

雄二「分かった。だが、話を後で聞かせてもらうぞ。」

零「やっぱ、気付いたか。」

雄二「あまり、俺を舐めるな。」

零「失礼しました。元神童。妖怪に伝えといてくれ。」

雄二「しょうがねえな。」

明久と雄二が部屋を出ていく。

後始末するか。

ケータイで電話をかける。

不良「警察に通報するつもりか？ふん、俺達は警察にはこねがあるからすぐに出てこれるんだよ！」

零「はあ、豚箱の方がずっと幸せなところにかけてんだよ。」

不良「はあ？」

ガチャ

零「ああ、俺がお前のところでモルモットが足りないって言うってただろ？20人を 千万でどうだ？うん、高い？分かったよ、さっきの20%オフでどうだ？契約成立だな。取りにきてくれ。」

不良「なんて会話してんだ！？」

零「そんじゃあな。2秒だけ忘れないでやるよ。」

やっぱり、王子役なんて俺にはできないな。」

清涼祭初日準決勝

Fクラス

零「帰ったぞ。」

雄二「案外、早かったな。」

零「軽い交渉をただけだからな。それより、ぬらりひよんは？」

明久「呼び方が酷くなってない？」

零「構わないだろ。」

雄二「もう少しで来るだろう。」

明久「さつきから、何言ってるの？」

雄二「ババアと零が何か隠してたんだよ。」

明久「えっ！それは本当なの零！？」

零「本当だよ。起きる問題についてできるだけ対処をしたんだが、対処しきれなかった。悪かった。」

明久「零……………」

雄二「あんなことが起きた理由を説明はしてもらっぞ。」

藤堂「それはアタシから話すよ。」

雄二「ババア。」

藤堂「哀川はお前らに事情を話せるように手配はしてたんだからね。」

零「それじゃ、説明頼むぞ。」

腕輪について説明中

雄二「やっぱり、教頭が黒幕か。」

零「俺が予想出来る中での問題は全て潰した。教頭に対しても今日中になんとかするつもりだ。」

雄二「あの常夏コンビはもう大会で敗退したからな。」

零「あのバカ共は推薦をエサにしたがつてたんだとよ。評判が落ちた学校の推薦なんて受け付けるところなんてないのに。」

雄二「これであいつらも静かになるだろ。」

零「大丈夫だろ。校庭に首だけ出して埋めとたから。」

藤堂「あんたは何やってんだね！」

雄二「ババアが生徒の心配をしてるだど！？」

藤堂「来賓に見られたらどうするさね！」

雄二「やっぱり、ババアはババアだった。」

零「お化け屋敷の宣伝に使ってるから大丈夫だ。」

藤堂「それなら、いいが。」

明久「いいんだ!？」

零「放課後、クソメガネが行方不明になる予定になってるから。新しい教頭を探しておけ。」

雄二「スゴい予定だな。オイ!」

明久「零、一体何をする気なの?」

雄二「気にしたら負けだ。明久。」

零「そろそろ準決勝だ。行くぞ。二人共。」

明久「もう、そんな時間か。」

零「ちゃんと勝てよ。」

明久「そっちの相手の方が問題でしょ。」

零「それも、そうか。」

雄二「次の相手は翔子か。零、ちゃんと作戦があるんだろうな?」

零「勝つ為の作戦ならある。」

雄二「頼むぞ。」

勝つ為の作戦ならな。

会場

高橋「両ペア、揃いましたね。」

零「すいません。少し会話させてください。」

高橋「はあ、早く済ませてくださいね。」

雄二「作戦か？」

零「そうだ。俺が言う言葉を復唱してくれ。」

雄二「分かった。」

零「翔子、聞いてくれ。」

雄二「翔子、聞いてくれ。」

霧島「何？雄二。」

零「俺は考えたことがあるんだ。」

雄二「俺は考えたことがあるんだ。」

霧島「雄二の考えたこと？」

零「お前の気持ちは嬉しい。」

雄二「お前の気持ちは嬉しい。」

霧島「うん。」

零「俺は自分の手でお前を幸せにしたい。」

雄二「俺は自分の手でお前を幸せにしたい。って、オイ！テメエは何を言わせやがる！」

零「うるせえ。ちゃんとセリフを言え。」

注射器をみんなに見えないように向ける。

零「これは、常夏コンビに入れたやつの改造版だな。惚れ薬は入ってないから好きな相手に狼になる薬だ。

本当に霧島が好きじゃなかったら平気だと思っが。」

雄二「くっ、分かった。言うからそれを向けるな。」

それじゃ、霧島が好きって言うてりのと同じだぞ。

零「だから、ここは俺に勝たせてくれ。一緒に幸せになろう。愛してる。」

雄二「だから、ここは俺に勝たせてくれ。一緒に幸せになろう。愛

してる。」

霧島「嬉しい。私も雄二を愛してる。」

雄二「ちきしょう！やけくそだ！」

潤「翔子を無力化するとは流石だな。」

零「で、どうする？2対1でやるか？」

潤「ダメ元でやらせてもらおうか。」

高橋「それじゃ、始めてください。」

零・雄二・潤「サモン！」

《零&雄二VS潤

物理

467&259VS472》

潤「《変体刀》。賊刀 鎧。」

潤の召喚獣は鎧を纏う。

雄二「つか、あれ刀じゃなくね？」

零「よく見る。ところどころ刃になってるぞ。」

あれじゃあ、糸が切れちまう。

対処が完璧たわな。

零「確か、賊刀 鎧は衝撃を逃がす作りになってるから、雄二の攻撃は食らわないぞ。」

雄二「じゃあ、どうすんだ？」

潤「おしゃべりしてる暇はないぞ。限定奥義 刀賊鷗！」

ものすごい勢いで突撃してくる。

零「ヤバ！」

俺は間一髪で避ける。

雄二「勝つ方法はあるのか？」

零「弱点は知っている。今回も借りるぞ。《キメラ》。」

雄二の召喚獣と合成する。

潤「刀賊鷗！」

また、突撃してくる。

それを釘バットで受ける。

潤「いつけえー！」

零「耐えろー！」

勢いがあり、押されるがなんとか踏みとどまった。

零の召喚獣はいきなり釘バットを捨て、潤の召喚獣を掴み上にぶん投げた。

潤「何!?!」

零の召喚獣は釘バットを掴み、落ちてきた潤の召喚獣を野球のように打った。

潤の召喚獣の鎧の中で衝撃が爆発し、召喚獣が消える。

零「その賊刀 鎧は衝撃を地面に逃がしている。なら、空中で衝撃を受けたら、逃げ場を無くして爆発する。」

潤「お前はなんでも知ってるな。」

零「なんでもは知らない。知ってることだけだ。」

潤「確かにそうだ。」

高橋「勝者、哀川&坂本ペア。」

これで残すは明日の決勝だけだな。

清涼祭初日問題撲滅（前書き）

遅くなりました。

清涼祭初日問題撲滅

Fクラス

零「やっと、終わった。」

ふざけてる程、疲れた。

どんだけ客がきてたんだよ。

あれ？これは喜ぶことか？

雄二「材料が全部なくなっちゃったな。」

零「で、売り上げは？」

雄二「Bクラス設備に替えられるくらい。」

明久「そんなに!?!」

零「俺のメニュー外注文が成功したみたいだな。」

雄二「材料が尽きたことだし、明日は単純に清涼祭を楽しむか。」

零「確かに、俺達は結局Aクラスしか回れなかったからな。」

明久「そうと決まれば、今日は帰ろっか。」

零「俺はぬらりひよんに設備を向上のために、売り上げを使えるよ

うに言ってくる。」

雄二「あのババア長が要求を飲むのか？」

零「お前らには迷惑かけたからな。それくらいはさすがに飲むよ。」

明久「じゃあ、先に帰るよ。」

零「おお、じゃあな。」

竹原サイド

教頭室

クソ！あのバカ共は大会を敗退するし、雇ったチンピラ共は連絡が取れないし、後は、この盗聴機しか無いじゃないか！

零「いるか？ぬらりひよん。」

藤堂「いきなり入ってきて、何を言いだすんだいあんたは！」

零「売り上げを設備の向上に使うと伝えにきた。」

藤堂「その事かい。まあ、いいさね。あんた達Fクラスは腕輪の為に頑張ってくれたからね。」

かかった！バカな奴やめ、これを流せばこの学園は終わりだ！

さて、放送室に向かうか。

零『なんて上手くことが済むと思ったのかな？竹原君。』

竹原「何！？」

ボタン！

教頭室のドアが開く。

そこには哀川 零が携帯を持って立っていた。

零サイド

俺は教頭室に入って、ドアを閉めた。

竹原「な、何だ！いきなり入ってきて。ここは部外者立ち入り禁止だぞ！」

零「スゴいね。感心するよ。ここまで追い詰められて、なお強気で接してくるなんて。」

竹原「な、何を言っているんだ？」

零「お前が使っていた盗聴機、全て取り外したよ。」

竹原「盗聴機？何のことだ？」

零「いい加減さ、素直になれよ。ぶち壊してやるから。」

零はポケットから、盗聴機を床に捨てる。

零「ちなみにさっきの会話は俺の自作自演。某小学生探偵の蝶ネクタイのような物を使わせてもらったよ。」

竹原「それがどうした！これを流せばこの学園は終わりだ！」

零「スゴいな。観念した途端の手のひら返し。それで、流した後はどうする気だったんだ？」

竹原「最後だし、教えてやる。鼻真になってる他校から報酬をもらうのさ！」

零「クツクツ。」

竹原「何がおかしい？」

零「いや、手のひら返した次に動機をペラペラと。今時、推理小説にもいねえよ。そんな奴。」

竹原「う、うるさい！」

零「それにな。お前の出入りしてた学校の問題をマスコミに送ったから、日付が変わる頃には警察に捕まるんじゃないか？」

竹原「何だと!？」

零「さつきから似たようなセリフばっか。ボキャブラリーが少ないね。」

竹原「俺が刑務所に入ることになるなんて。」

零「だからさ、なんで刑務所を嫌がるのかな？ 犯罪者なんかに最低限の生活を与える素晴らしいところじゃん。だが、俺の敵がそんな素晴らしいところに行けると思うなよ。」

竹原「俺はどうなるんだ？」

零「お前が雇ったチンピラ達と似たような運命をたどるよ。」

竹原「お前があいつらをやったのか!？」

零「その通り。同じようにモルモットになりやがれ。」

竹原「死にたくない。」

零「それじゃ、死なないコースで、首だけ生体といきますか。」

竹原「首だけで生きていられるわけないだろ！」

零「大丈夫だよ。血管はチューブ、心臓はポンプ、血液は栄養で代用出来るからな。」

竹原「頼む。なんでもするから、助けてくれ。」

零「はあ、お前は俺を正義の味方とでも勘違いしてるのか？ それなら前提条件から間違ってるぞ。」

俺はバカで単純だからこそ真っ直ぐなあいつとは違うし、

大切な奴の幸せを守るために自分から遠ざけようとするあいつとも

清涼祭2日目出し物回り

清涼祭2日目

Fクラス

零「今日は自由だったな。」

雄二「ああそつだ。だが、俺達は召喚大会があるのを忘れるなよ。」

零「明久じゃあるまいし。」

明久「なんでそこで僕の名前を出すんだよ!」

零「いや、だって、明久だし。」

明久「理不尽な!」

雄二「明久、うるさいぞ。」

明久「僕が悪いの?」

雄二「さて、召喚大会まで5人で回るか。」

零「いつものメンバーだしな。」

5人とは、俺、明久、雄二、秀吉、康太。

女子は女子で回っている。

この内に明久と秀吉をくっ付けられるかな。

雄二「んじゃ、行くか。」

Eクラス

雄二「ここはスポーツ対決で勝ったら商品をもたらえるのか。」

中林「そうよ。やってくるの?」

零「商品ってのは何なんだ?」

中林「普通に商品券よ。」

零「取れるだけ取っていつていいんだな?」

中林「出来るならね。相手は部活の主力選手ばかりよ。」

零「雄二、荒稼ぎといかないか?」

雄二「ああ、存分に楽しませてもらうか。」

中林「参加するのね。試召戦争は上手くいったみたいだけど、スポーツは私達の土俵よ。かかってきなさい。」

ボクシング対決

参加者 雄二

悪鬼羅刹の本気を發揮。

対戦相手を1ラウンドでKO。

50メートル走

参加者 ムツツリー二

何故か、召喚獣でもないのに、《加速》と呟き本当に加速し勝利。

テニス対決

参加者 零

Eクラス代表相手に、虐めのようなワンサイドゲームを行い、コールド勝ち。

他にもPK戦、剣道、柔道、水泳、野球、バスケット、カバティ、バドミントン、プロレス、空手と、挑戦して零と雄二が中心にボコボコにしていた。

零「楽しかったよ。また、来るな。」

中林「もう二度と来るな！（泣）」

明久「零、雄二、容赦無さ過ぎ。」

秀吉「お主ら鬼畜じゃの。」

零「スポーツで手を抜くのは失礼だろ。中林、これは楽しんだ礼だ。」

封筒を投げる。

中林「何よ、これ。これは！ありがとう。また、来てね！」

雄二「何を渡したんだ？」

零「これは秘密だ。」

封筒の中身は久保の写真。

Eクラスに怨みを持たれても面倒だからな。

さて、次に行くか。

零「次はどこに行く？」

雄二「召喚大会があるから、そろそろ昼飯に行くか。」

秀吉「Eクラスに結構いたからの。」

康太「……………そろそろ昼時。」

零「んじゃ、Aクラスに昨日協力してくれた礼をかねて、昼飯に行くか。」

てな訳で、Aクラス。

ちなみにAクラスは原作通り、メイド喫茶だった。

今日はFクラスが出していないので、客がAクラスに流れ繁盛しているようだ。

さて、そのAクラスでだが何故か、

Fクラスの女子と高橋女史がメイド服を着て接客している。

零「何してんだ？お前ら。」

高橋「あまりにお客様が多いので、手伝っていただいているんです。ご、ご主人様。」

高橋女史が恥ずかしそうに教えてくれる。

零「高橋女史、そんなに恥ずかしいなら、ホールではなくキッチンを手伝えばいいんじゃないか？」

高橋「はっ！その手がありましたか。」

気付けよ。

高橋女史は走ってキッチンに向かう。

零「スカートが短いんだから、走ると中が見えますよ。」

高橋「キャッ！」

高橋女史、原作とキャラ違い過ぎじゃねえか？

それとなんか、殺気を感じる。

潤、優子、愛子から出てます。

そこへ霧島が雄二へ、

霧島「お帰りなさいませ。今日は帰らせませんよ。あなた。」

斬新なアレンジだ。

零「席に案内してくれないか？」

霧島「はい、ただいま。」

俺達はテーブルに着く。

潤「こちらがメニューになります。」

零「潤、お前も手伝ってたのか。」

潤「他の奴らが手伝うのに、俺だけやらないのはマズイだろ。まあ、似合っていないよな。」

零「いや、似合っていて可愛いと思うぞ。」

潤「そ、そうか。可愛いか！」

あれ、さっきより少ないが殺気を感じる。

優子と愛子です。

さて、メニューはと

……………これはいいのを見つけた。

零「明久、秀吉。俺が頼んだ物でいいなら、奢ってやる。」

明久「えっ、いいの!?!」

零「お前らがちゃんと決勝まで上がってきた褒美だ。」

秀吉「それじゃあ、お言葉に甘えるかの。」

零「よし、注文するか。霧島、優子注文を頼む。」

優子「分かったわ。ご注文は?」

零「俺はサンドイッチセット。」

康太「……………俺はハンバーガーで。」

零「明久と秀吉はちょっといいか。」

俺は優子の耳元で

零「ゴニョゴニョ。」

優子「なるほど。分かったわ。」

明久「一体何を頼んだの？」

零「来るまでの秘密にしてもらった。」

雄二「んじゃ俺は」

霧島「……ご注文を繰り返します。サンドイッチセットがお一つ、ハンバーガーがお一つ、秘密での注文がお一つ、婚姻届がお一つでよろしいですね？」

雄二「全然よろしく無いぞ！」

零「問題無い。」

霧島「……それではメイドとの新婚生活を想像してお待ちください。」

その後、愛子が食器を持ってくる。

明久と秀吉の前にはフォークとスプーンが、雄二の前には実印が。

雄二「これ本当にウチの実印だぞ！」

零「おい愛子、康太を頼む。」

愛子「なんかよく分からないけどいいよ。」

愛子は一旦キッチンに戻り、ティッシュと康太のカバンを持ってきて

愛子「ムツツリーくんあのね、ゴニョゴニョゴニョゴニョ。」

康太「……………殺す気か！？（ブシャーアアアア……）」

康太は鼻血を出して倒れる。

そして、ティッシュと輸血パックで対処をしながら、

愛子「それで、ゴニョゴニョゴニョゴニョゴニョゴニョ。」

康太「……………お前は一体何がしたいんだ！」

倒れたまま叫ぶ。

愛子「だって、血でお店を汚したら迷惑でしょ。」

よし、これで康太の対処は完了だ！

霧島「……………お待たせしました。サンドイッチセットとハンバーガーと婚姻届でございます。」

雄二「どんなことがあるかと判子は押さねえぞ！」

霧島「……………それは困る。」

雄二対霧島、夫婦喧嘩開始！

明久「あれ？僕と秀吉の分は？」

霧島「……………少々お待ちください。今、優子が持って来ます。」

優子「お待たせしました。カップル限定巨大パフェでございます。」

明久「こんなの頼んだの零!?!」

零「奢ってやるんだから文句を言つな。」

優子「二人で仲良く召し上がってください。」

秀吉「え、えつと、良いではないか明久。せっかく奢ってもらったのじゃし。」

明久「秀吉がいいならいいけど。」

姫路「美波ちゃん!」

島田「瑞希!」

姫路・島田「「やりますよ(やるわよ)!」」

デジャヴ?

零「おいちよつと待て。メイド二人が客を襲ったらこのクラスに迷惑がかかるぞ!」

姫路・島田「「くつ。」」

零「分かったらおとなしくしてる。」

ハッハッ!計画通り。

問題だった姫路・島田・康太。

康太は愛子に頼み貧血で退場。

姫路と島田はAクラスに迷惑をかけるわけにはいかないから手出しはできない。

俺は絶対に明久と秀吉をくっ付けてみせるぜ！

というわけで、召喚大会の時間まで明久と秀吉は仲良くパフェをついたそうだ。

清涼祭2日目決勝戦

決勝会場

学園長がまだどちらの腕輪が優勝か準優勝かは決めてなかったから本気で戦うことが出来る。

零「それじゃあ、明久、秀吉全力で楽しもうじゃないか」

明久「手加減はしないでね！」

高橋「それでは、始めてください」

零・明久・雄二・秀吉「」「」「サモン！」「」「」

《零&雄二VS明久&秀吉

日本史

382&263VS225&179》

マジすか！？

零「明久、秀吉何その点数？」

雄二「カンニングか！？」

明久「んなことする訳無いだろ！」

秀吉「わしらはお主らと戦うために勉強したのじゃ」

零「俺らと戦つたため？」

明久「だって、試召戦争の時や今回だって零にたよりつきりだったから」

雄二「俺は？」

秀吉「明久はスゴい集中力じゃたぞ。一週間前から勉強を始めて、昨日は姫路や霧島達に教えてもらってたしの」

明久「その事は言わないでよ！秀吉だってスゴいじゃないか。文系の科目と英語はそれくらいまで上げたんだし。僕は暗記科目だけだもん」

秀吉「わしは勉強の時に霧島の真似をしただけじゃ」

お前らスゴ過ぎ

明久はバカだが単純だからどんどん吸収していくし、秀吉は演劇に関係を持つものを霧島の真似で良くなるって

しかも昨日、負けた奴らがあいつらに協力したのも痛いな。

原作より点数が上がってるし。

明久「僕達だって零と同じ舞台上に上がりたいんだ！」

雄二「だから、俺は？」

零「なら上がってこられたみたいだな」

明久「うん。」

雄二「……………無視されるのは明久の役目じゃなかったか？」

零「それじゃあ始めるか。雄二、お前は秀吉をやれ」

雄二「やっと会話に参加出来るのか。さて、秀吉勝たせてもらっぞ」

秀吉「始めるかの。じゃが勝つのはわしらじゃ！」

秀吉の召喚獣が雄二の召喚獣に薙刀を振りかざす。

雄二「いいや、勝つのは俺達だ」

その薙刀をメリケンサックで弾き、殴ろうとする。

「……………雄二、動かないで」

雄二「翔子!?!」

雄二の召喚獣の動きが止まる

そこに秀吉の召喚獣が薙刀で切り付ける

《雄二 日本史 137》

雄二「ぐっ、今のは秀吉だな」

秀吉「……そう」

雄二「会話の時くらいその話し方辞めてくれないか？」

秀吉「……ヤダ」

雄二「ちっ、やりづれえな」

雄二の召喚獣が秀吉の召喚獣に向かう。

雄二の召喚獣は攻撃を繰り返すが、秀吉の召喚獣は避け続ける。

雄二「攻撃が全然当たらねえ」

秀吉「……何でだか分かる？」

雄二「明久の真似か？」

秀吉「……そう。声はわたしだけど動きは吉井にしてある」

雄二「本当にやりづれえな」

明久「雄二は苦戦してるみたいだね」零「確かにマズイな。助けてやりたいから早くやられるよ」

明久「ヤダ！当たったら死ぬほど痛いんだから」

零「死ぬわけじゃないんだからいいだろ」

明久「いいわけあるか！」

Aクラス並みの点数だから速いから当たたらねえし、

つか、なんで糸が見えないのに避けられるんだよ！

獣の勘か？

たく、単純なバカは恐ろしいな。

さて、どうするかな。

集中力全快！

零「ウオリヤアーーーーー！」

曲弦系がめちやくちやに動く。

明久「えっ！なんでこんな動きが出来んの！？」

零「話し掛けるな！曲弦系のコントロールに集中してんだから！」

集中し過ぎて脳の血管が切れそうだ。

だが、明久の召喚獣に全然当たらねえな！

あっ、少しかすった。

明久「ぐっ。避け切ってみせる！」

ドン！

明久「うわっ!？」

秀吉「……えっ!？」

明久の召喚獣と秀吉の召喚獣がぶつかる。

零「雄二！今だ！」

雄二「おう！」

そこに雄二の召喚獣が明久と秀吉の召喚獣の頭に向かってぶん殴る。

《明久&秀吉 日本史 0 & 0》

秀吉「負けてしまったの」

明久「やっぱ、零はスゴいや。どう避けるか計算するなんて」

零「お前らもな。ここまで本気を出すのは久しぶりだ」

明久「そっか」

零「ああ」

バタッ！

明久と零が同時に倒れる。

明久は頭へのフィードバック、零は集中し過ぎで知恵熱。

無理し過ぎた。

清涼祭2日目打ち上げ（前書き）

PVが100000突破！！

お気に入り件数100突破！！

なんかした方がいいのでしょうか？

今回はバカテストがあります。

バカテスト 日本史

『冠位十二階が制定されたのはいつでしょう？』

姫路瑞希

『603年』

教師のコメント

正解です。

坂本雄二 木下秀吉

『603年』

教師のコメント

一体、どうしたんですか？驚いたことに正解です。

吉井明久

『603年』

教師のコメント

名前を見ただけでバツをつけてしまった先生を許してください。

哀川零

『……………空気を読んで603年。』

あっ！やっぱり今のなし！』

教師のコメント

そんなの許しません。

清涼祭2日目打ち上げ

なんだこれ？

姫路、島田、秀吉が明久を押し倒してる。

そこに久保、清水が乱入。

雄二は霧島に捕まってる。

そして、FFF団が出陣。

まあ、これはいつものことだ。

だが、何故に優子、愛子、潤に俺が追いかけて回されなきゃならんのだ！？

よし、一旦何があったのか思い出そう。

えーと、確か……………

あの後、俺と明久は保健室に連れて行かれ、10分程たち目覚めたら即行で表彰。

ハードスケジュールだ。

まあ、その後はまた出し物回りをして他クラスの連中を泣かした。

んなわけで、夜になって

打ち上げ開始！

零「なんかスゲー疲れた」

明久「でも、楽しかったじゃん」

零「俺は仕事の内だからいいがお前らは関係無いのに巻き込みま
ったし」

明久「関係無いなんて言うなよ。僕達は仲間だろ！第一ああいうの
データ管理の仕事なの？」

零「あれ？そついやそつだ。なんで俺あんなこと普通にやってんだ
ろ？」

明久「その話はもうやめにしない？」

零「まあ、そつだな。せつかくだから楽しむか」

明久「そつだよ。喉乾いたし、なんか飲もうか」

明久は缶から紙コップに注ぐ。

零「おい、それ酒じゃね？」

大人のオレンジジュース

明久「えっ？本当だ！？誰がこれを用意したの？」

零「知らん。クラスの大半がそれ飲んでたよな？」

明久「うん」

零「マズくね？」

明久「うん」

周りを見渡すと数人程酔って倒れてる。

零「教師に見つかったら停学だな」

明久「僕らだけでも飲まないようにしようか」

零「ああ」

姫路「よひいひゅん！このジューシユおいひいえすよ」

明久「姫路さん！？酔っ払ってる？」

姫路「しょんなことありゆわけにやじやないれすか」

明久「絶対に酔ってるよね！ちよっと零、見てないで助けてよ！」

明久は姫路におしたおされてる。

零「アーメン」

俺は立ち去らせてもらいます。

明久「零イイイーーーーー！」

明久がなんか叫んでるが、知らん。

さて、一人でどうするかな。

優子「零」

零「なんだ優子か。お前は酒を飲んで………顔が赤いのは何故なん
でしょうか？」

なんか嫌な予感しかしない。

優子「さつきジュースを飲んでからなんか暑くてね」

予感的中!!

零「そ、そうか。」

すると、優子はシャツに手をかける。

零「お前は何をやってんだ!？」

優子「暑いから服を脱ごうとしてるだけよ」

零「そこおかしいからな!つか、本当にお前優等生の面影がない
な!」

優子「別にいいじゃない。そんなこと」

零「これが本当にあの木下優子の言葉なんでしょうか?」

優子「あんたのせいでもうほとんどの人にはれちゃったしね」

零「ごめんなさい」

優子「家では普通に下着なんだし、脱いでもいいでしょ?」

零「痴女がいる!よくないからそのままにいる!」

優子「はあしょうがないわね」

零「俺が悪いのか!?!」

優子のターン終了

次は愛子のターン

零「愛子、お前は何をやってんだ?」

愛子「あつ、零くん。一緒に保険体育の実習しない?」

零「今、ここでか?運動するにはもう遅いだろ」

愛子「やっぱり零くんは全然分かってないな」

零「何がだ?」

愛子「もういいや。実力行使にするから」

零「始めんのか?」

愛子「実はね。今、下着を履いてないんだ」

零「バカかお前は！早く履いてこい！」

愛子「でも、スパッツは履いてるよ。そもそもスパッツは下着だったんだよ」

零「だからどうした！それじゃあ下着を見せてるのと同じじゃねえか！」

愛子「あっそうだね。にしても暑いね」

スカートで扇ぐ。

零「何やってんだ！どこまで変態なんだお前は！？」

愛子「零くんの前なら、どこまでも変態になれる！」

零「少年マンガの主人公のように、なに清々しく言ってやがる！第一それはなんの嫌がらせだ！」

愛子「あはははは！」

もういいや。

愛子のターン終了。

潤のターン行くか。

潤「どうしたんだ零？」

顔が赤くなってないし、対応も普通だ。

潤「分身の術なんて使って」

普通じゃなかったみたいです。

零「そんなチャクラを使うような真似、俺には出来ねえよ！」

潤「えっ！？出来ないの！？」

零「出来るか！俺をなんだと思ってるんだ！？」

潤「人外」

零「人間ですらなかった！」

潤「人だとしても、一般人のスペックではないだろ」

零「否定出来ん」

潤「……………それにものすごい鈍感だし」

零「ん？なんか言ったか？」

潤「なんでも無い！」

零「そうか」

これで潤のターンも終了。

その後、優子、愛子、潤と一緒に楽しむことになったんだが、こいつら3人は酔っている。

俺一人でさばけるわけもなく、王様ゲームをやることになり、その命令を実行したくないので逃げてます。

という訳で最初のようになつたのです。

周りに使える奴が本当に居ねえな！！

カオスだからいいじゃないかって？

バカが！カオスを見るからいいんだよ！そこに参加しようとは思わねえよ！

これで無事？清涼祭は終わった。

ロキ

零「どこだ。ここ？」

俺は打ち上げが終わった後、家に帰ってきたはずなんだが、家の中に入ったら部屋の中が変わっている。

簡単に説明すると、うみねこの魔女達の部屋にそっくりだ。

????「お帰りなさい！あなた、ご飯にする？お風呂にする？それとも、ア・タ・シ？」

いきなりエプロン姿の眼帯を着けた女が現れる。

零「さて、出口はどこだろうか？」

????「スツゴイスルーね。ちなみにアタシが許可しないと出れないわよ」

エプロンではなくゴスロリに変わってる。

零「じゃあ、とつとと出せ」

????「話をいくつかしたらね」

零「そうか。なら、出すまで殴り続けてみようか」

????「止めておきなさい。ここではアタシに勝てない。第一なんで会話すらしようと思わないかな？敵って訳じゃないのに」

零「確かに敵意は感じないが、悪意を感じる」

????「そっか、それはしょうがないわよ。そもそもアタシは悪意の塊みたいなもんだからね」

零「てめえは何者だ？まさか、魔女とかはほざかないよな？」

????「アタシが魔女？笑えるわね。人間ごとと一緒にするなんて。」

アタシは大邪神　ロキよ！

零「そうか。ちょっと知り合いの先生のところに行こう。大丈夫、優しい先生だから」

ロキ「頭がおかしいわけじゃないわよ！」

零「だってロキは男だし、大邪神って。ロキは悪戯の神だろ。」

ロキ「神話をよく知ってるわね。でも、どれだけ昔の話をしてるのよ。アタシは何体か神や悪魔を取り込んだからね」

零「千歩譲ってお前が神だとしたらなんのようだ？」

ロキ「不思議に思わないの？あんたがバカテスの物語にすることが」

零「お前の仕業ってことか」

ロキ「仕業って、あんただって楽しんでるでしょ？それに調整してあげてるんだからありがたく思いなさい」

零「調整？」

ロキ「そうよ。あなたがキャラの欠員を出すから対処したんでしようが」

零「潤か」

ロキ「そうよ。あれはアタシの片目。分身よ」

ロキは自分の眼帯を指す。

零「なるほどな」

ロキ「驚かないし、疑わなくなったわね」

零「真実みたいだからな。だが、この物語への参加はタダじゃないだろ？」

ロキ「やっぱり、あなたは面白い！そうよ。これはゲームよ。」

零「ルールは？」

ロキ「あなたの仲間が転校、退学になること。文月学園が潰れること。これがあなたの敗北条件。」

零「勝利条件は？」

ロキ「さっきの敗北条件を満たさないこと。罰はバカテスの世界の崩壊。」

零「それは不公平だろ。だって、神のお前が対処のしようのない問題を起こしたらこっちは終わりだ。」

ロキ「安心しなさい。問題を起こす気はないわ。原作を壊したから世界が勝手に問題が起きるから。それに、どちらかと言うと手助けをするのよ。調整という形でね」

零「お前は何がしたいんだ？」

ロキ「アナタと同じでカオスを見たいだけ。アナタを送り込んだことで悪戯は終わってるしね」

零「勝った時の報酬は？」

ロキ「他の世界に参加出来るのよ。そこでまた原作ブレイクしなさい」

零「なるほどな。お前は損をしないみたいだな」

ロキ「ばれたみたいね。報酬は後で増やすわ」

零「今はそれでいいか」

ロキ「最後に潤はアタシの分身であってアタシじゃない。」

零「分かってるよ。そんなこと」

ロキ「それじゃ、また今度」

扉が現れ、俺を吸い込む。

目を開けるとベッドの上だった。

夢じゃないな。

如月グランドパーク写真撮影（前書き）

バカテスト 現国

次の【】の『私』が何故このような痛みを感じたのか答えよ。

【私は身を引き裂かれるような痛みを感じた。】

問題文は原作を見てください。

姫路瑞希

『私』にとって彼は半身のような存在だったから。

教師のコメント

そうですね。半身のように大切な存在だったので、『私』は身を引き裂かれるような痛みを感じたのですね。

270

吉井明久

『私』にとって彼は下半身のような存在だったから。

教師のコメント

下半身に限定する必要はありません。

土屋康太

『私』にとって彼は下半身だったから。

教師のコメント

その解答はあんまりだと思いません。

哀川零

『私』は真っ二つにされたから。

教師のコメント

実際に引き裂かれた訳ではありません。

係員「チケットを確認します」

霧島「……これ」

係員「これは!？」

霧島「……そのチケット使えないの？」

係員「いえ、そんなことはありませんよ。ちょっとお待ちください。」

あれはトランシーバーか？

係員『わたしだ。ただちにウエディングシフトに移行しろ』

雄二「なんだ!その怪しげな会話は!？」

係員「なんのことですか?ワタシニホンゴワカリマセン」

雄二「さっきまでペラペラ喋ってただろうが!ちっ、まあいい。少し電話をする」

………明久に。

プルプルプルプル

係員「あっ!私ですね。ちょっと失礼し」

バン!

明久・雄二「えっ？」

係員がケータイを出し、出ようとした瞬間何か飛んできてケータイが破損する。

つて何イイイー！

おい！地面に銃痕があるぞ！

明久「ちよつとお待ちください」

トランシーバーを使い。

明久「零、いまの何？」

零「お前が雄二からの電話に出ようとしたからコレクションを使っただよ」

明久「あれは雄二からだっただよ？」

零「少しは考えろ。バカ！」

明久「でも、ケータイは弁SY」

ガチャ

あっ切られた。

明久「それでは案内します」

雄二「案内はいらん。」

明久「そんなこと言わないで」

雄二「いらん」

明久「断れば腐ったザリガニを送ります」

雄二「まあ、案内くらいはいいか」

冗談じゃない！そんなことされたらうち全員食中毒で倒れる。

明久「それでは記念写真ですね」

カメラを持った着ぐるみがやってきた。

雄二「翔子、ちょっと我慢してくれ」

俺は翔子のスカートをめくる。

さあ、動け！ムッツリーニ。

着ぐるみ「すごいな。カメラの前で変態行為を行っなんて」

何！ムッツリーニじゃないだど！？

しかも、この声は

零「さて、この写真は警察に持って行くか」

雄二「零止めてくれ！今朝、警察に二次元と三次元が区別出来ない痛い奴だと思われてんだ！」

零「なるほど。だから、こんな犯罪に手を染めてしまったのか。」

雄二「ちげえよー!!」

零「それじゃあ。そういうプレイが好きなのか」

雄二「ちげえよー!!」

零「同じセリフを言ってもつまらんど。よく見たら霧島もまんざらじゃないみたいだしな」

霧島「……雄二のエッチ。でも、雄二がそういう趣味なら」

翔子が顔を赤らめている。

雄二「勘違いするな翔子！お前の下着なんて微塵も興味はない！」

霧島「……それは困る」

雄二「んな。理不尽なあああー!!」

霧島のアイアンクローー!!

零「下着には興味がない。なるほど下着を履かない方がいいのか。鬼畜だな」

霧島「……雄二、私にも羞恥心はある」

雄二「ーナ訳ねえだろおおお!!」

零「はい、チーズ」

カシヤツ

零「加工を入れておきました」

写真が渡される。

周りに天使が飛んで上には『私たち結婚します』の文字が。

そして中心に顔を赤らめてアイアンクローをする翔子。叫びながらアイアンクローを食らう俺。

零の言葉を借りるなら、まさにカオス。

零「この写真を写真館に飾ってよろしいでしょうか?」

雄二「こんなの飾ってメリットがあるのか!?!」

零「(ある意味)名物になると思いますので」

バカ女「ああ!写真撮影してもらってる。私達もしてもらおうよ」

バカ男「おう。いいな。俺達の結婚記念にか?おい、係員。俺達も映ってやるよ」

明久「これは限定イベントなんで」

雄二「今のうちに行くか。行くぞ。翔子」

霧島「……うん」

逃げるが勝ちだ。

その後

零サイド

明久「これは限定イベントなんで」

バカ男「いいじゃねえか！オレ達はオキヤクサマだぞ！」

バカ女「キヤー！リユータカッコいい！」

零「死ねばいいのに」

バカ男「なんだと！」

明久「いつのまに着替えたの？」

零「なんのことだ係員？俺は客だ。問題を起こしても如月グラウンドパークには関係ないぞ」

バカ男「無視してんじゃねえよ！」

バカ男が殴ってくる。

零はそれを掴んでネジ上げる。

零「お前らはここで物語から退場だ。明久は雄二を追え」

明久「う、うん」

零「俺達も行くか」

バカ女の手も掴んで裏に連れていく。

バカ女「ひっ」

零「そんじゃ、寝ろ」

バカカップルを気絶させる。

????「また、商品の引き取りですね」

黒服の男が後ろに立っている。

零「お前か。」

????「必要だと思ひまして」

零「お前さ、ロキの関係者だろ」

????「ばれましたか」

零「前から思ってたんだが、気配が人と違うからな」

「????」そうですか。その通り私はバジリスクです。大蛇（大蛇）とお呼びください」

黒い帽子、サングラス、マスク、コートを脱ぐ。

すると長身の女が現れる。

零「女だったのか」

大蛇「父（？）のせいで私たちもこの形になってしまいました。」

零「なぜお前がこんなことをしているんだ？」

大蛇「調整の手伝いですよ」

零「まあいい。後は頼むぞ」

大蛇「了解しました」

零はこの場所を去る。

バカップルは物語に退場したが、どう転ぶかな？

如月グランドパークお化け屋敷（前書き）

バカテスト 音楽

マザーグースの歌の中で「スパイスと素敵な物で出来ている」のは何でしょう？

姫路瑞希

『女の子』

教師のコメント

正解です。さすが姫路さん。女の子の材料は砂糖とスパイスと素敵な物で、男の子の材料はカエルとカタツムリと仔犬の尻尾と歌われています。

吉井明久

『カレーライス』

教師のコメント

女の子は食べ物じゃありません。

哀川零

男の子の材料は女の子と比べて酷くねえ？

教師のコメント

先生にそんなこと言われても。

如月グランドパークお化け屋敷

雄二「サイド」

雄二「翔子！間接を決めるな！」

霧島「……カップルはみんなこうしている」

雄二「お前には間接技を決めてるように見えるのか!？」

霧島「……雄二、どこに行きたい？」

いろんなアトラクションがあるんだよな。

えーっと

雄二「帰りたい」

霧島「……却下。」

雄二「自由にな」

霧島「……れない」

雄二「映画k」

霧島「……零に頼んで壊してもらった」

雄二「なにやってんだ！アイツ！」

霧島「……零はいい人」

フィー「そこのお似合いのカップル」

着ぐるみがやってきた。

霧島「……お似合いのカップル」

フィー「フィーが面白いアトラクションを教えてあげるよ！」

雄二「明久がさつき女子大生にナンパしてたな」

フィー「明久くんが！？作戦中だっていうのに！」

雄二「姫路、バイトか？」

姫路「ナンノコトデスカ？」

雄二「声が片言になってるぞ！」

ノイン「ちょっと待った！雄二じゃなくて不細工な男！」

化物が現れた。

姫路「明久くん！頭が逆ですよ！早く直さないと坂本くん達にはばれてしまいます。ああ、小さい子が泣いちゃいました」

明久「どおりで走りづらかったんだ」

走りづらいで済むか普通？

霧島「……ノインくんはうっかり者」

雄二「うっかりで頭が180度回転する生き物はいない」

明久「それより、オススメのアトラクションがあるんだけど」

雄二「はあ、言ってみろ」

明久「えーっと、確かお化け屋じゃなかった。コーヒーカップがオススメだよ」

雄二「よし、コーヒーカップは止めてお化け屋敷に行くぞ」

明久「えっ何で！？お化け屋敷は間違いだって」

雄二「ウルセエ！どうせコーヒーカップにはなんか仕掛けがあんだろぅが！」

絶対にコーヒーカップには行かねえ。

明久サイド

雄二達はお化け屋敷に行った。

明久「本当にうまく行ったな。零の作戦」

姫路「すごいですよね。普通に言っても行かないから違う場所を言

って行かせるなんて」

秀吉「うまくいったみたいじゃの」

秀吉が走ってくる。

明久「秀吉、どうしたの？」

秀吉「ちよつと零に頼まれての」

明久「頼みごと？」

姫路「そういえば明久くん。仕事中にナンパなんてやってたんですよね？」

明久「えっ！何のこと!？」

おかしい。姫路さんの背中から黒い物が見える。

姫路「ちよつと美波ちゃんを呼ぶのでボツキリ話をしましょうね」

明久「そこはボツキリじゃなくてじつくりじゃないの!？」

秀吉「こつちじゃ明久!」

秀吉が手を引つ張って走る。

明久「さすが僕のお嫁さん」

秀吉「婿の間違いじゃろ」

どちらも間違いです。

秀吉「零に頼まれたのじゃ」

明久「さすがは零！」

姫路・島田「待ちなさい!!」

零サイド

明久と秀吉をくっ付けることもちゃんとやらないとな。

おっ！雄二がやって来たか。

雄二サイド

廃病院をモチーフにして作ったお化け屋敷だったな。

係員「お客様。このアトラクションはこちらの契約書にサインしてもらわないといけません」

雄二「なるほど。それだけ危険があるアトラクションなのか。面白そうだな」

んーなになに

このアトラクションでケガ及び死亡しても、如月グランドパークは一切の責任を負いません。

それでもよろしいですか？

雄二「心臓発作とかで死んじまう奴とかもいるのか？………なんだこの下の黒い紙？」

係員「めくつちやダメです！」

まさか！

めくると

？私は霧島翔子を生涯大切にします。

？私は霧島翔子と結婚します。

？私は霧島翔子を妻と認めます。

雄二「なんじゃこりゃあ！！！！」

零「こちらがペンです」

霧島「………はい、実印」

土屋「………朱肉」

雄二「この状況をおかしいと思うのは俺だけなのか？」

零「冗談だ」

雄二「カーボン用紙を仕込んで冗談だと！婚姻届けも仕込んであんじゃないか！」

零「でも、一番上のだけでいいからサインしろよ」

雄二「ここでのスルー！？」

零「本当に死ぬかもしれないから」

雄二「入るの止めるか」

零「霧島、お化け屋敷なら抱きつき放題だぞ」

霧島「…………絶対に入る」

零「荷物はこちらで預かります」

霧島「こぼれちゃうから傾けないで」

零「了解しました」

お化け屋敷内

霧島「…………雄二、怖い」

雄二「珍しいな。お前、こついつの得意だったろ」

霧島「……でも怖い」

音がスピーカーから流れてくる。

零「たしか、生死の危機を乗り越えたとお互いを好きになるらしいので」

何が始まるんだ？

零「我慢しなくていいぞ。FFF団」

須川「坂本を殺せ!!」

F「」「」「おおー！」「」「」

F「DEAD or DEATH」

F「殺っちゃうよ!」

F「リア充って殺しても罪にならないよね?」

雄二「死ぬ可能性ってこういうことか!」

零「死んだら霧島の墓に入れるからな」

雄二「死ねなくなった!？」

数分後

雄二「後は須川!てめえだけだ!」

須川「さすが悪鬼羅刹。俺も死神として本気でやらなきゃいけないみたいだな」

須川はデスサイズを取り出す。

雄二「死神？聞いたことあるぞ。たしか街で女性が襲われていると助けにくるっていう都市伝説」

須川「俺は清涼祭のとき仲間を危険にさらした。もう二度とそんなことが起きないように決めた」

雄二「だからってなんでこんなところでばらすんだよ！」

須川「他の奴らは倒れたし、霧島はお前が逃がしたからお前しかないからな」

雄二「お前を最初に倒すべきだったか」

零サイド

何？この新事実。

展開的に須川が問題抱えているって話も出てくるじゃん！

原作を壊してたから、世界が伏線張り始めたよ。

考えんの面倒だから後回しでいいか。

そついや明久と秀吉はどうなったかな？

迷路に逃げ込んだみたいだな。

よく遊園地にある壁が鏡のやつ。

いい雰囲気じゃん。こっちは作戦成功だな。

雄二の方も決着がついたみたいだな。

相討ちか。

雄二サイド

雄二「くつ。相討ちか」

須川「もう動けねえ」

霧島「……大丈夫？雄二」

雄二「翔子。きたのか」

霧島「……また、小学校みたいに私は逃げちゃった」

雄二「何度も言うがお前が罪悪感を感じる必要は無い。俺がお前に
そつするよつに言ったんだから」

霧島「……雄二」

雄二「だから俺なんかを好きになる必要は無いんだ」

零「それは違うだろ」

雄二「零」

零「たく、なんで分からねえかな？」

雄二「お前だけには言われたくねえよ」

零「まあいい、結婚したくなっただか？」

雄二「今の会話を聞いてなかったのか」

零「素直になればいいのに。」

雄二「うるせえよ」

零「はあ、そんじゃ普通に恐い思いをさせるか」

雄二「まだ、続くのか」

『子……り……じの……いな。……デ……い……』

俺の声？秀吉の声真似か。

雄二（秀吉）『翔子より姫路の方がいいな。胸もデカいし』

ナンデスト！？

すごい般若が見える。

霧島「……………浮気は許さない」

戦う

アイテム

逃げる

雄二「確かに恐いな！こりゃあ！」

零『命に関わる第二弾』

天井が開き、翔子の前に何か落ちてきた。

よし！お化け屋敷のトラップが発動したみたいだな。

落ちてきたのは

絶刀

斬刀

千刀

薄刀

賊刀

双刀

悪刀

微刀

王刀

誠刀

毒刀

炎刀

零『俺のコレクション。完成形態刀』

霧島「……零は気が利く」

雄二「これ凶器ってレベルじゃねえぞ！」

俺、死ぬかも……。

如月グランドパークウエディング体験（前書き）

バカテスト 世界史

世界三大美女を答えよ。

姫路瑞希の解答

クレオパトラ7世

楊貴妃

ヘレネ

教師のコメント

正解です。しかし、日本ではヘレネの代わりに小野小町が入れられることが多いようです。

吉井明久の解答

木下秀吉

霧島翔子

姫路瑞希

教師のコメント

それはあなたの身の周りですね。それと何故血痕がついているのでしょうか？

哀川零の解答

誰を書けば殺されないのかわかりません。

教師のコメント

吉井くんを見たら事情が分かったので今回は見逃します。

如月グランドパークウエディング体験

雄二サイド

よく生き残ったな俺。

零「なんで生きてるの？」

雄二「出てきて開口一番がそれか!？」

零「いや、だって死ぬでしょ。あれは」

雄二「あれ？俺なんで生きてんだろ？」

秀吉「レストランで昼食を用意しております」

雄二「考えるのはやめよう。昼飯が無料で食えんのはいいな」

霧島「……はあ」

雄二「どうしたんだ翔子？」

霧島「……なんでもない」

秀吉「それではご案内します」

レストラン

雄二「旨かったな翔子！」

霧島「……うん」

零「なんと！結婚を前提に付き合っているカップルがこのレストランにいます！」

嫌な予感しかしない。

零「こちらのカップルです！」
パツ！

やはり俺達か。

零「このカップルにはウエディング体験に参加するための挑戦を行ってまいります。そのまま籍を入れることも可能です」

雄二「拒否す」

零「拒否すれば大量のプチプチを送ります」

雄二「るわけないな」

そんなことが起きれば、ウチの家事が全機能停止してしまう。

零「それでは、こちらで出すクイズ5問に正解すればウエディング体験を行うことができます」

よし！全力で間違っつてやるよ。

元神童に分からない問題は無いはずだ！

零「では、第1問。坂本夫妻の記念日はいつ？」

おかしい。問題の意味が分からない。

ピンポーン！

零「霧島さん」

霧島「……毎日が記念日」

雄二「止める！恥ずかしくて死にそうだ！」

零「ちなみにこのクイズはビデオカメラで撮影を行っています。」

雄二「本当に死ぬぞ！」

零「知らねえよ。コンチクショーでございます」

丁寧に何言ってるんだアイツ！

零「では第2問。坂本夫妻の結婚式はどこであげる？」

ピンポーン！

雄二「鯖の味噌煮」

零「正解です」

雄二「何イーーー!？」

零「正解は如月グランドパーク式場。鳳凰の間、別名鯖の味噌煮で式をあげていただきます」

雄二「今、命名しただろ！」

零「第3問。坂本夫妻はどこで出会った？」

雄二「貰ったあーーー!」

霧島「……させない」

雄二「目が、目があーーー!」

翔子の奴目潰ししやがったよ!

零「雄二さんのムスカ大佐の真似は放っておいて、霧島さん」

霧島「……小学校」

零「正解です。お二人は小学校からの幼なじみで長い期間交際を行い、今回の結婚に至ったのです」

雄二「変な嘘をませるな!」

零「第4問」

雄二「分かりませ」

零「正解です。問題は坂本竜馬を暗殺したのは誰？でした。スゴい
ですね。問題を聞いてないのに答えが分かるなんて。やはり、愛の
力ですね」

もう無理だ。サヨウナラ俺の自由。

零「それでは第5問は新郎、新婦に1問ずつ問題を出題します。

そして、問題に入る前に新婦の霧島さんにはウエディングドレスに
着替えてもらい、

新婦、新婦の順に正解したらウエディング体験を開始するという形
になるので、

しばらくお待ちください」

俺だけ答えられる問題があるのか。ならまだ可能性はある。

だが、何を考えてんだ零の奴？

霧島「……頑張って正解してね」

雄二「……ああ」

十数分後

零「それでは新婦の入場です。」

パチパチパチパチ

拍手が鳴り響く。

姫路・島田「…………綺麗」

確かに綺麗だった。

霧島「…………雄二。お嫁さんに見える」

雄二「少なくとも婿には見えないな」

零「それでは新婦に問題です。霧島翔子の夢は何？」

なんだそりゃあ！？問題じゃなくて質問だろうが！

霧島「…………お嫁さん」えっ？

霧島「…………雄二のお嫁さんになることがずっと夢だった」

零「正解です！これで残すは新郎への問題だけとなりました。行きます。最終問題。坂本雄二は霧島翔子を好きか嫌いか、どちらでしようっ？」

俺はどう答えればいいんだ？

雄二「俺は……………」

翔子の恋愛感情は罪悪感からくる勘違いだ。

だから、俺は翔子と結ばれてはいけない。

だが、嫌いではないむしろ好きな翔子に「嫌い」と言って傷つけて

いいのか？

明久「あれ？霧島さんは？」

気が付くと翔子の姿が見当たらない。

明久「皆さん！新婦を探してください」

全員が慌てて探しだす。

零「雄二。霧島といるのが嫌なら拒絶しろよ。それがお互いに一番いい選択だ。だが、拒絶をしないなら受け入れる。それも一番いい選択だ。強制はしない。最後に決めるのはやっぱり本人だから」

雄二「ちよつと行ってくる」

零「ちゃんとこれを忘れずに持っていけ」

雄二「これは……」

如月グランドパーク外

雄二「おい、翔子」

霧島「……雄二！？」

雄二「弁当旨かったぞ」

霧島「……気付いてたんだ」

翔子は泣いていた。

霧島「……やっぱりおかしいよね？私の夢。高校生にもなってお嫁さんになりたいだなんて。笑えちゃうよね」

雄二「おかしくなんてない!!」

霧島「……えっ!?!」

雄二「お前の夢は全然おかしくない。もしその夢を笑う奴がいたら翔子、お前だろうと許さない!」

霧島「……雄二」

雄二「まあ、相手を間違わなければだがな」

悪いな零。確かに最後に決めるのは俺だ。だからお前の選択肢からは選ばない。これは最低な選択かもしれないが、俺はこんな生活を続けたいんだ。

雄二「ほらよ。これくらい貰っても罰は当たらないだろ」

さっき翔子が使ったウエディングドレスのヴェールだ。

霧島「……やっぱり私は間違ってたんかいなかった!」

零サイド

やっぱ雄二はヘタレだな。

こんな状況を作ってやったのに。

ま、いいか。

明日の準備をしとくか。

こっちは手を出す必要が無いから、邪魔が入らないようにすればいいだけだからな。

これが2つ目の作戦

明久と秀吉の距離を縮めるぞ！作戦

今日、雄二と霧島がやってきたばかりだから、まさか次の日に明久と秀吉が同じところに来るなんて思わないだろ。

さすがにウエディング体験はキャンセルさせとくがな。

あの二人がくっ付けばいいな。

月曜日 Fクラス

雄二「零、明久」

零・明久「なんだ（なに）？」

雄二「昨日は面白いことやってくれたじゃねえか？」

明久「何のこと？」

零「俺は交渉先の手伝いをしてただけだ」

雄二「そういう態度を取るか。そついや明久、昨日の秀吉とのデートは楽しかったか？」

明久「なんでそのことを！？」

姫路「ちよつとお話を聞かせてくださいね？明久くん」

島田「アキが空を飛ぶところを見たくなくなったわ」

零「秀吉！明久を連れて逃げろ！」

秀吉「了解じゃ！」

姫路「やっぱり木下くんとそついう関係だったんですね！」

島田「木下はどこまでウチ達の邪魔をすれば気が済むのよ！」

4人退場

零「で、俺には何するつもりだ？」

雄二「特には」

零「……はっ？」

雄二「別に今回のことは恨んでねえよ。明久については面白そうだから言っただけだ」

零「そうか」

雄二「だが一つだけ聞かせる。お前は何がしたいんだ？」

零「俺は楽しめればいいんだよ。ただそれだけだ」

雄二「お前はよく分からん」

潤「ちよつといいか？」

零「潤か」

雄二「邪魔者は退散しますか」

零（何言ってるんだ？）

潤「零、如月グランドパークのペアチケットは誰と行くんだ？もし、相手が決まっていなかったら俺と」

優子「潤ズルいわよ！抜け駆けは」

愛子「そうだよ！僕も如月グランドパーク行きたいもん！」

零「あのチケットなら霧島に売ったぞ」

潤・優子・愛子「「えっ?」「」」

零「そのチケットで一昨日霧島は雄二と行ってきたんだから」

潤「聞いてないんだが」

零「言っていないからな。明久と秀吉も昨日行ってきたからプレオー
ブンチケットはもうないぞ」

潤・優子・愛子「「はあ〜」」「」」

零「なんだ?そんなに行きたかったのか?」

優子「えっ、まあね。」

零「なら普通のペアチケットならあるから買うか?」

潤・優子・愛子「「^か本当!?!」「」」

零「ペアチケットだから二人しかいけないがな」

愛子「二人だけか」

零「誰が買うか決まったら教えてくれ」

ドンだけ行きたかったんだ?

雄二「わざとやってるだろお前」

プール前（前書き）

坂本夫妻のマル秘恋愛テクニク講座

雄二「……おい翔子。とりあえず俺にも分かるように状況を説明しろ」

霧島「……これは私達夫婦が恋愛の秘訣を皆に教えるコーナー」

零「俺がサポートをする」

雄二「驚いた。このタイトル『の』以外全部嘘しか書いてねえ」

零「俺が全部本当のことにしてやるよ」

霧島「……では、ハガキの紹介」

雄二「翔子、たまには俺の言うことを聞け。そして零、お前なら本当にやりかねないから止めてくれ」

霧島「……『突然ですが、仲良し夫婦のお二人に相談問です』」

雄二「ハガキの差出人よ、よく聞いてくれ。俺は今、手足を縛られて床に転がされている。こいつが本当に恋愛相談の相手にふさわしいのか、もう一度考え直して欲しい」

零「あまりウルサイと猿轡をするぞ」

雄二「そんなことしたら会話が出来ねえから相談に答えることが出

来ねえだろっが！」

零「別にお前が喋る必要なくね？」

雄二「じゃあなんで俺が連れてこられたんだ！」

霧島「……『私には婚約者がいるのですが、その人が周りの女の人の誘惑に負けて浮気をしないか心配です。どうすればいいのでしょうか？』」

雄二「お前は本当にマイペースだな」

霧島「……夫の浮気には私も困っている。他人事とは思えない」

雄二「頼むから他人事だと思ってくれ」

霧島「……だから私の考えた浮気防止方を教えてあげる」

雄二「翔子よそれは俺の身に降り掛かる不幸の予告と見ていいのだからっか？」

霧島「……用意する物は3つ」

雄二「浮気防止に道具が必要なのか？」

霧島「……一つ目は」

雄二「一つ目は？」

霧島「……『手錠』」

雄二「すでに犯罪臭がするぞ」

零「金さえ出せば俺が特注で用意するぞ」

霧島「……2つ目は」

雄二「だから話を聞け！」

霧島「……『エプロン』」

雄二「翔子、お前の考えが分からなくなった！」

零「エプロンがなければメイド服や猫耳でも代用できるぞ」

霧島「……そして、3つ目は」

雄二「3つ目は？」

霧島「……『ビデオカメラ』」

雄二「貴様は何を撮るつもりだ！エプロンと手錠でドレスアップされた俺の何を撮るつもりだ！」

零「なんとこの浮気防止3点をセットで1ヶ月間特別価格で販売するぞー！」

霧島「……その3つで夫に浮気の恐ろしさを教えてあげるといい」

雄二「俺は何よりお前が恐ろしい」

プール前

明久家

明久「いらつしやい。零、雄二」

雄二「邪魔するぞ」

零「邪魔する」

明久「なんでカッパを着てるの？」

零「気にするな」

明久「気になるんだけど」

雄二「こいつコンビニに寄ったときに一緒に買ってたんだよ」

明久「頼んだもの買ってきてくれた？」

雄二「ああ、弁当とコーラだろ。代金をちゃんと寄越せ」

明久「はい。今、家に何も無いからね」

実はプールイベントの起きるための泊まりなんだが、明久の生活が改善した為起きない可能性がある。

起きないと面白くないし、秀吉が修学旅行で風呂が別にならない。

明久「それじゃ、食べようか」

明久がコーラのペットボトルを開けた途端に炭酸まみれたなった。

明久「目があああ！」

零「かかった！」

明久「振ったでしょ？」

零「悪い悪い。お詫びにもう一本用意してあるから」

俺は明久に新しいコーラを渡す。

その瞬間に明久はコーラを振る。

俺もサイダーを振る。

そして、撃つ。

明久は俺に向かって。

俺は

雄二に向かって。

雄二「はっ？」

スポーツドリンクを飲んでる雄二の顔面にHIT！

雄二「目があああ！」

明久のコーラは俺に当たるが、カップを着てる俺には無意味。

雄二「なんで俺に向けんだ！」

零「面白そうだから」

雄二「そうだったな。お前はそういう奴だったな。分かった。俺も参加してやる」

明久は弁当に、雄二はカレーに、俺は冷やし中華に手をかける。

ピチヨン

零・明久・雄二「」「今だああああ！！」「」

数分後

雄二「明久、止めにしないか？」

明久「うん。この戦いは不毛すぎる」

明久と雄二はくたばった。

つーか、なんで俺が始めたのにお前から相討ちしてんの？

俺も食らったけどスゴいねカッパ。スゴいね。

大事なことだから2回言ったよ。

雄二「体がベトベトする。シャワー借りるぞ」

明久「いいよ」

ガラガラ

雄二IN風呂

なんのサービスにもならねえな。

明久「そうだ。雄二」

雄二「んー。なんだ？」

シャーーーーー。

明久「今、ガスの工事してるからお湯出ないよ」

雄二「ぎゃーーーーー!!」

明久「だから心臓から離れた手足から浴びた方がいいよ」

雄二「冷水の浴び方なんて入らねえよ！」

零「風邪引くぞ」

雄二「零の言う通りだ。だが、お湯が出る訳じゃねえしな」

零「どうするんだ？」

雄二「金のかからないところで浴びるついでに遊んでくる」

明久「そんなところあったけ？ああ、あそこか。でも、僕は自分の
があるけど零と雄二はどうするの？」

雄二「俺はトランクスでいい」

零「俺は基本無傷で済んだから明久の家で待ってる」

雄二「そうか。1、2時間経ったら戻ってくる」

明久「部屋にあるゲームでもしてて」

零「了解。行ってこい」

明久「行ってきます」

雄二「行ってくる」

30分後

プルプルプルプル

電話か

ガチャ

明久『身元引取人になって』

ガチャ

間違い電話か

ブルブルブルブル

ガチャ

雄二『元はと言えばお前のせいだろ!』

ガチャ

間違い電話か。

多いな最近

零「てな事が昨日あった」

秀吉「お主らも災難じゃったの」

雄二「鉄人の野郎プール掃除の罰までかせやがって
土屋「……………重労働」

雄二「だが、次の土曜に自由にプールを使っていいことになった」

明久「零、秀吉、ムッツリーニも来ない？」

土屋「……………行k」

雄二「ただし、零とムッツリーニにはプール掃除を手伝ってもらおう」

土屋「……………うっ」

零「俺はかまわん」

明久「ムッツリーニは？」

雄二「ちなみに姫路、島田、翔子、木下姉、工藤、天東も呼ぶつもりだ」

土屋「……………モップとブラシを用意しておけ」

単純だな。

明久「珍しいね。雄二から霧島さんを誘うなんて」

秀吉「素直になったみたいじゃの」

零「いや、違うだろ」

雄二「零の言う通りだ。考えてみる。俺が他の女子とプールに行つてそのことが翔子にばれたら？」

明久「樹海の奥……………いや湖の底」

零「海の藻屑……………その前に中身だけでも売っ払うか」

雄二「死体の処理の方法まで考えなくていい！それに零！何考えてんだ！？」

零「えっ？商売だけど」

雄二「普通に返すな！」

秀吉「悪いしわしもプール掃除を手伝うのじゃ」

明久「ありがとね。秀吉。」

秀吉くん赤くなってますよ。

雄二「姫路、島田、翔子、木下姉、工藤、天東ちよつといいか？」

霧島「……何？」

雄二「今週末に学校のプールを使えるんだが来ないか？」

姫路・島田・優子「……えっ！プール（ですか）！？」「」

姫路は自分の腹、島田と優子は自分の胸に目を向ける。

工藤「ボクは参加するよ」

霧島「……雄二を見張るためにも参加する」

潤「俺も参加させてもらっ」

雄二「で、お前らはどうするんだ？無理にはとは言わないが？」

島田「行くわよ！いろいろと用意して」

姫路「そうですね。いろいろと用意して」

優子「いろいろと用意しないとね」

零「秀吉、水着を買うなら着いて行ってやる」

秀吉「確かに新しいのを買つつもりじゃが何故じゃ？」

零「多分、お前のことだから女物を買ってくるから男物を選んでやる」

明久「余計なことしないで零！」

土屋「……………迷惑」

秀吉「そういうことなら頼むのじゃ」

零「頼まれた」

プールフラグ成立。

プールサイド(前書き)

バカテスト 英語

次の文を訳文しなさい。

『 Although Jhon tried to take the airplane for Japan with his wife's handmake lunch, he noticed that he forgot the passport on the way. 』

姫路瑞希

ジヨンは妻の手作り弁当を持って日本行き飛行機に乗ろうとしていたが、途中でパスポートを忘れていることに気付いた。

教師のコメント

はい。正解です。

土屋康太

ジャンは

教師のコメント

ジヨンです。

吉井明久

ジヨンは妻の手作りのパスポートを持って日本行き飛行機に乗ろうとしていたが、途中で弁当を忘れていることに気付いた。

教師のコメント

手作りのパスポートという意味をもつ一度考えてください。

哀川零

日本に来るなら日本語で書け。

教師のコメント

英語の問題なんですから。

プールサイド

零「俺が最後か？」

雄二「遅いぞ。」

零「ちよつと準備があつたからな」

雄二「その荷物か？」

零「ああ。俺の命に関わるからな」

愛子「それだけ重要な物つて」

雄二「まあ、いいか。女子は翔子について行け。鍵は渡してある」

男女に別れる。

明久「こら。葉月ちゃんと秀吉はこつちじゃないでしょ」

葉月「冗談です」

秀吉「わしは冗談じゃないのじゃが」

島田「さつさと行くわよ。葉月、秀吉」

優子「秀吉は男よ」

秀吉「ついに島田までそんな目で見るようになったのじゃ」

雄二「問題はないだろ。あれを見る」

更衣室 秀吉&零（女に見える時）用

零・秀吉「何故だ（じゃ）あああー！」「」

雄二「零、お前は清涼祭の時にやった女装が強力だったからだろ。

秀吉一人ならまだしも二人だからと言う理由でこれが作られたらしい」

零「もう絶対に女装しねえ！」

秀吉「ズルいのじゃ！零も一緒に行くのじゃ！道連れじゃ！」

零「甘いな！俺は今女装をしてないから入れないんだよ！」

秀吉「くっ、なら今ここで零が男子の更衣室か秀吉&零の更衣室、どっちに行くのか決を取るのじゃ」

零「いいぞ！どうせ男子の方になるんだからな！」

秀吉「零は秀吉&零の方に行くべきじゃと思う者」

誰もいないに決まってる。

バツ！！

満場一致

零「何故だああー！ー！」

明久「あの時の姿を思い出したらねー」

土屋『ブシヤアアア！』

雄二「鉄人に捕まった時の仕返しだ」

霧島「……雄二と一緒に着替えさせたくない」

姫路・島田・葉月「……ダメ（です）！」「」

工藤「面白そうだし」

潤「秀吉が可哀想だろ」

優子「秀吉は男だから問題ないはずよ」

零「さいですか……。今回は分かった。だが、次回からは男の方にするからな」

秀吉「さあ、一緒に着替えるのじゃ」

優子「秀吉×零」

零「少し黙れ腐女子」

数分後

プールサイド

俺が一番乗りか。

明久「雄二、ムツツリーニがやってきた。

雄二「今度は早いな零」

明久「やっぱり男物か……」

土屋「……………ガツカリしてない」

零「失礼じゃないかお前ら？」

明久「女子達はやっぱり遅いな」

零「あれ、スルー？」

葉月「バカなお兄ちゃん！」

明久「どどどどどうしようムツツリーニ！あれってスクール水着だよね！そんな物着た小学生と遊んで逮捕されない！？」

土屋「……………弁護士を呼んで欲しい（ボタボタ）」

零「暴走するな！」

雄二「小学生の水着で取り乱すな」

葉月「お待たせしました。お兄ちゃん達」

明久「懲役二年で済みそうだね」

土屋「……………実刑は間逃れない（ポタポタ）」

雄二「お前ら冷静なフリしてるだけだろう」

零「この画はギリギリアウトだな」

島田「こゝろ葉月！」

胸元を隠した美波が走ってきた。

島田「お姉ちゃんのソレ返しなさい！」

葉月「あうっ。ズレちゃいました」

葉月の腹部が膨らんでいる。

明久「葉月ちゃんに返しなさいって言ったソレって、パットのこと？」

島田「ウチはこの一撃にかけるわ！」

明久「その一撃は記憶どころか僕の命が消えちゃうよ！」

零「殴ってもいいが、殴ったら胸が見えるぞ」

島田「うう、葉月のバカ。せっかく用意したのに」

明久「その格好すごく似合ってるよ」

島田「えっ……………それ本当？」

明久「うん！手も足も胸もバストもほっそりしてて、スゴく綺麗だと親指が踏み抜かれたように痛ーーーーーい！」

島田「今、胸が小さいって2回言ったわよね」

明久のバカ。

優子「吉井くん最低ね。」

優子がやってきた。水着はワンピース型のようだ。

零「でも、島田もパット着けてくるなんてな」

優子「パットが悪いって訳？」

零「いや、別にそんな物必要無いだろ」

優子「女子にとってそれは重要なことなのよ」

零「ありのままを見せた方が俺はいいと思うが」

優子「そ、そう？（パットなんて着けて来なければ良かった）」

工藤「ボクもそう思うよ」

工藤の水着はトランクスタイル。

土屋「……………木下のそれは偽m」

工藤「ムツツリーニくん危ない！」

ムツツリーニが一瞬にして消えた。

ドボン！

ムツツリーニがプールに落ちた。

零「ハイ？」

見えなかった……………。

零「工藤、拾って来てくれ」

工藤「うん。分かったよ」

優子はボクシングでもやってたのか？

霧島「……………雄二」

今度は霧島か。

ブスッ

鮮やかな雄二への目漬し。

雄二「グガアアアア！」

明久「スゴく華麗な目潰しだね」

零「雄二の目玉一つや二つ安い物だ」

雄二「お前らには実害が無いからな！」

零「その通り」

姫路「すみません！後ろを結ぶのに時間がかかって遅くなりました！行きますよ潤ちゃん」

現れたのは姫路とバスタオルのお化けだった。

明久「ぼ、ぼくはまだやれる！」

土屋「……………終わるわけにはいかない（ダボダボダボ）」

姫路の水着にどんだけ足に来てんだよ。

ちなみに原作と違いピンク色だ。

零「潤？」

姫路「せっかくの水着なをだからみんなに見せなきゃ」

潤「でも、ばずかしいんだが」

姫路「それじゃあ潤ちゃんはそのままいでてください。私たちは楽

しく遊んできますから」

潤「わ、分かったよ。」

潤が出てくる。

潤は赤のビキニだった。

明久「二段構えだったとは!？」

土屋「……………伏兵か(バタツ)」

明久&ムツツリーニ撃沈!!

島田「Wor auf für ein em Standard h
at Gott jene unter schieden, die
haden, und jene. Dien nicht haben
!? Was war für mich ungenugend!
(神様は何を基準に持つ者と持たざる者を区別してるの!?ウチに
一体何が足りないって言うのよ!)」
優子「島田さん。アタシはドイツ語は分からないけど今なんて言っ
たかは分かったわ。」

島田「美波でいいわ」

優子「ならアタシも優子でいい」

なんか変な友情が結ばれてるし。

工藤「姫路さんのあれは知ってただけど潤まで」

潤「零。この格好変じゃないか？」

零「ん？可愛いと思うぞ」

潤「可愛い？そうか可愛いか。俺は可愛いのか」

あれ？トリップしてるし。

霧島「……目、治った？」

雄二「ああ。だんだん見え」

ブスッ！

雄二「俺になんの怨みがあるんだ！」

霧島「……ここは雄二に見せられない物が多い」

零「霧島。目潰しばかりしていると水着の感想を聞けないぞ」

霧島「……それは困る。雄二、この水着似合ってる？」

雄二「翔子か？ティッシュをくれ」

グサッ！

雄二「イデエエエエエエ！」

本日二度目の目潰し。

零「ちゃんと褒めてやれよ」

雄二「視界を奪われて他になんと言えと？」

零「後は秀吉だけか」

明久「一緒に着替えたんじゃないの？」

零「あいつ着替えんのに戸惑ってたからな」

優子「戸惑ってたって、まさか女物じゃないわよね!？」

零「男物だ」

秀吉「待たせたのう」

明久「○ @* (ううん。そんなに待ってないよ)」

零「ここは地球だ」

優子「男物になんで上があるのよ!？」

零「れっきとした男物だ。レーザーレーザーって言うオリンピックでも使われた物だぞ」

優子「えっ! そうなの?」

工藤「確かにそうだけどなんでそんなのあるの?」

零「問題にならない男物って言ったらこれしかないと思ったからな」

ムツツリーニが静かだと思ったら姫路と潤ので気絶したままだし。

プールに入る前なのにおかしくね？

プール（前書き）

バカテスト 現社

日本の民法における結婚適齢は何歳か答えなさい。

姫路瑞希

男性は18歳

女性は16歳

教師のコメント

正解です。さすがですね。姫路さん。男女共に18歳に統一するべきだという申告が報告されています。

霧島翔子

雄二となら結婚できる。

教師のコメント

出来ません。

吉井明久

愛があれば歳の差なんて関係ありませんよ。

教師のコメント

夢と希望をありがとうございます。

哀川零

昔の方が結婚できる年齢が若いってことはロリコンが多くなってることじゃね？

教師のコメント

最低な解答だと思います。

プール

零「そんじゃ泳ぐか」

明久「そうだね」

潤「ちよつといいか？」

潤と姫路がやってきた。

零「ん、なんだ？」

姫路「明久くん達は泳ぐのが得意ですか？」

明久「別に苦手というわけじゃないけど」

潤「それなら俺達に泳ぎ方を教えてくれないか？」

潤「泳げないのか？」

姫路「はい。恥ずかしいですけど水に浮くくらいしか」

潤「俺は立ち泳ぎしか出来ん」

零「立ち泳ぎって侍とかが頭に荷物乗せて川を渡ったたあれだろ！
？何故それが出来て泳ぎ方を知らない」

潤「出来ない物は出来ないんだ」

島田「何、瑞希達泳げないの？」

優子「それなら私たちが教えてあげるわよ」

明久「こうして見ると姫路さんと天東さんがFクラスで美波と木下さんがAクラスみたいだね」

島田・優子「寄せてあげればBはあるわよ！」

ゴールデンタッグ結成。

マッスルドッキング出来んじゃないね？

零「それなら水泳部の工藤は学年主席か」

島田・優子「えっ？」

零「だって泳ぎの話だろ」

明久「そうだよ。寄せてあげるって何のこと？」

島田「アキは知らなくていいことよ！」

優子「零もね！」

零「そ、そうか」

すっげー気迫

明久「それじゃあ零、僕らはあっちに行こうか」

零「そうだな」

葉月「バカなお兄ちゃん達！」

今度は葉月か。

明久「葉月ちゃんどうしたの？」

葉月「葉月と一緒に遊ぶです」

零「何して遊ぶんだ？」

葉月「水中鬼ですよ。綺麗になれるお兄ちゃん」

俺の呼び方それですか！？

明久「水中鬼？ああ、水の中でやる鬼ごっこのこと？」

葉月「違いますよ。水中鬼って言うのは鬼が追いかけて捕まえたら水の中に引きずりこむって遊びです」

明久「確かにそれは鬼だ！！」

零「それは危ないからやっちゃダメだ」

葉月「危ないですか？」

明久「今からお手本を見せるからね。おい霧島さん。」

霧島「……何、吉井？」

明久「水中鬼っていう遊びをしてほしいんだけど」

零「ルールは雄二を溺れさせて人工呼吸をすればお前の勝ちだ。勝った後は捕まえた雄二に抱き付いていいぞ」

霧島「……分かった」

霧島は雄二のところに行き、プールに投げ込む。

雄二「誰だ！？こんなことした奴は！！」

霧島「……早く溺れて」

雄二「翔子か！？何いきなりとちくるったことしてんだ！！」

明久「ね、危ないでしょ」

葉月「ハイです。水中鬼はやめるです」

雄二「明久！！てめえの仕業だな！！」

零「そうだ。明久は今までの怨みを返してやる。とか言ってたぞ」

明久「何言ってるんの零！？それに霧島さんはちゃんと雄二を捕まえておいてくれないと困るよ」

霧島「……ごめん」

明久 雄二 霧島で水中鬼スタート！

愛子「暇ならビーチバレーしない？」

零「どうする？ちっちゃいの」

葉月「ちっちゃいのじゃなくて葉月です！やるです」

平和だな。

俺達以外が付くがな。

数十分後

休憩中

バシッ！

零「なあ、雄二。」

バシッ！

雄二「なんだ零？」

ドカン！

零「あの3人がやってるのはビーチバレーのはずだよな」

バシッ！

雄二「そのはずだが」

ズドン！

零「ボールを割るゲームじゃないよな？」

愛子「ハッ！」

優子「ソリヤッ！」

潤「秘剣 燕返し！」

愛子・優子「それあり！？」「」

いや、木刀使い始めた辺りで気付けよ。

零「なんであんなに必死なんだ？」

雄二「如月グラウンドパークのペアチケットをかけてるらしいぞ」

零「どんだけ行きたいんだよ！？」

雄二「無知は罪って言うが
バンッ！

あっ、ボール割れた。

そろそろ作戦を開始するか。

秀吉・土屋「「イエーイー!!」」

零「俺はパスだ。アイス食い過ぎてもう泳げないし、食えない」

明久・雄二・秀吉・土屋「「「じゃと何!?」」」

姫路「そうですね」

優子「あれだけ食べてたアンタが悪いのよ」

霧島「……自業自得」

よし!これで参加せずに済む。

あいつらはと

雄二「このこと知ってやがったな!」

明久「一人で逃げるな!」

秀吉「ズルいのじゃ!」

土屋「………卑怯者」

アイコンタクトって素晴らしいね。

零「頑張っつてね!」

明久「絶対一番になるよ(死ね)」

雄二「一番になるのは俺だ（死ね）」

秀吉「何を言う。一番になるのはこのわしじゃ（死ね）」

土屋「……………俺が負けるわけない（死ね）」

皆さん目が怖いですよ。つか、秀吉ってそんなキャラだっけ？

後は原作通りに進んだよ。

スタートと同時に明久と雄二が殴りあい開始。

ターンしてきた秀吉の水着を明久が破く。

ムツツリーニが大量出血。

鉄人「お前ら、ちょっと聞きたいんだが」

明久「嫌です」

雄二「拒否する」

零「人権には黙認権という物があります」

鉄人「なんでプール掃除を頼んだのに血で汚れてんだ！」

明久「ちゃんとした理由があります！」

雄二「そうだ！死人が出なくて良かっただろうが！」

零「てか、なんで俺が呼ばれてんだ？」

鉄人「何を言ってるのかさっぱり分からん。哀川には説明をしてもらう」

零「えっ？そうなの。じゃあ頑張ってねお二人さん」

明久「差別反対！」

雄二「なんでいっつもお前だけ」

明久&雄二 補習！

零 説明中

鉄人「今度の修学旅行は木下は風呂を別にした方がいいな」

零「それがいいと思いますよ」

鉄人「何を言っている。お前は木下と一緒に入るんだぞ」

零「んな理不尽な！！」

強化合宿前日（前書き）

今回は短めです。

バカテストもありません。

強化合宿前日

強化合宿前日

明久が下駄箱でOTZ

零「どうしたんだ明久？脅迫状でも貰ったか？」

明久「何故それを！？」

零「リアルかよ」

明久「秀吉はごまかしきれたのに」

零「本当にごまかしきれたのかよ」

明久「どうすればいいんだ」

零「一旦教室に行くぞ」

明久「……………うん。そうだね」

Fクラス到着

脅迫状出した犯人は分かってけどな。

すぐに教えるのはつまらないからね。最低でも強化合宿が始まるまでは黙ってるか。

零「秀吉、暇だ」

秀吉「唐突じゃな」

零「暇な物は暇なんだ」

秀吉「なら明久を助けてやってくれんかの？」

零「彼氏の心配か。彼女は忙しいな」

秀吉「誰が彼氏で誰が彼女じゃ！」

零「なら、顔を赤らめるなよ」

こいつも分かりやすいな。

零「脅迫状の件だろ？調べてやるよ」

秀吉「ありがたいのじゃ。ムツツリー二にも頼んじやし、なんとかなりそうじゃの」

鉄人「お前ら！席に着け」

元気だね。

鉄人「Fクラスは現地集合だ」

Fクラス「ふざけんじゃねえええ！」

明久「僕達はクラス設備がBクラス並みだ！Bクラスの移動手段の

はずだ！」

鉄人「学園長に言ってくれ」

零「雄二！ぬらりひよんの所に行くぞ！」

雄二「ああ！これは理不尽だ！」

須川「やってくれ！」

土屋「……………任せた」

愛子「頑張つてね！」

Fクラスの応援を背に妖怪の巣窟へ！

学園長室

ドン！

ドアをぶっ壊し突入！

零・雄二「……………どういうことだ！ぬらりひよん！」

妖怪「ドアは壊す物じゃなくて開ける物だよ！」

零「知るか！コンチクショー！」

雄二「それより説明しやがれ！」

妖怪「現地集合はアンタら二人を呼ぶ為の口実だよ」

雄二「口実だと？」

妖怪「そつだよ。分かったらこの妖怪つて表記を止めな」

零「へいへい」

藤堂「さて、本題に入るよ」

零「また学園の危機か？」

藤堂「幽霊つてのをアンタらは信じるかい？」

零「目の前にいる」

藤堂「アンタだけ連れていくのをやめようかね」

零「オカルトの部分か」

藤堂「分かりやすいね。強化合宿の避暑地に最近そつというのが沸いてるみたいだね」

この脅し酷くない？

雄二「俺達になんとかしろってことか？」

藤堂「正確には哀川だけでいいさね」

零「具体的に何をすればいいんだ？」

藤堂「一つ目は『キメラ』を使うな」

零「一応理由は？」

藤堂「合成時に余計な物が混ざっちゃうんだよ」

零「了解」

藤堂「2つ目は湧いた物についての調査。出来たら対処をしな」

零「報酬は？」

藤堂「秀吉&零（女に見える時）を秀吉だけにするさね」

零「絶対に成功させよう」

さて、強化合宿での計画を立てなきゃな！

強化合宿移動（前書き）

バカ日記 1日目

姫路瑞希

『バスが止まり降り立つと、不意に目眩のような感覚が訪れました。風景や香り、空気までもがいつも暮らしている街とは違う場所で、何か素敵なことが起きるような予感がしました。』

教師のコメント

環境が変わることで良い刺激が得られたみたいですね。姫路さんに高校二年生という今この時にしか作ることの出来ない思い出がたくさんできることを願っています。

土屋康太

『バスが止まり降り立つと、不意に目眩のような感覚が訪れた。あの感覚は何だったのだろうか？』

教師のコメント

乗り物酔いです。

坂本雄二

『バスを降り立ち、大きく息を吸い込むと、少し甘い様な、微かに酸っぱい様な、不思議な何かの香りがした。これがこの街の持つ匂いなんだなと、感慨深く思った。』

教師のコメント

隣で土屋くんが吐いてなければ、もっと違う匂いがしたでしょうね。

哀川零

『バスを降り立つと背中に悪寒が走った。ぬらりひよんに頼まれた仕事を再確認した』

教師のコメント

学園長に頼まれた仕事頑張ってください。

強化合宿移動

目的地まで高級バスで行くことになったぜ！

というわけでバス内

明久「美波、何読んでんの？」

島田「心理テストよ。百均で買ったんだけど結構面白くて」

明久「へえー僕もやっていい？」

島田「いいわよ。じゃあ、次の色から思い浮かべる異性を答えてください。緑、オレンジ、青」

明久「えーと、緑が美波でオレンジが姫路さんで青が秀吉」

ビリッ！

島田「なんでウチが緑で木下が青なのよ！」

俺が頑張ってくっ付けようとしてるからかな。

雄二「俺も参加していいか？」

明久「それならみんなでやろうよ」

零「ムッツリーニは寝てるから不参加だ」

島田「それじゃあ、1〜10の中で数字を2つ思い浮かべてください」

雄二「俺は5・6だ」

霧島「……私は7・2」

秀吉「ワシは2・7じゃ」

零「俺は10・1」

優子「アタシは6・8ね」

愛子「ボクは9・10だよ」

明久「僕は1・4で」

潤「俺は8・5だ」

姫路「私は3・9です」

島田「最初に思い浮かべた数字はあなたがいつも周りに見せている顔です」

雄二「クールでシニカル」

霧島「無口な令嬢」

秀吉「なんでアンタばかり」

零『気分屋』

優子『努力家』

愛子『見せたがり屋』

明久『死になさい』

潤『冷静』

姫路『温厚で慎重』

工藤『その通りだね』

零『同じく』

明久『僕、罵倒されてない!?!』

秀吉『ひがみが聞こえたんじゃない!』

島田『次に思い浮かべた数字が普段あなたがあまり人に見せない顔です』

雄二『公平で優しい人』

霧島『大胆』

秀吉『少しはウチらに分けなさいよ』

零『手段を選ばない』

優子『ずぼら』

愛子『純情』

明久『惨め垂らしなく死になさい』

潤『壊れやすい』

姫路『意志の強い人』

雄二『優しいか』

優子『なんで分かるのよ』

霧島『……愛子が純情ね』

明久『さつきより酷くなってるし!』

秀吉『もういいのじゃ』

ムクッ

零『起きたか。ムツッリーニ』

土屋『……腹が減った』

零『そついや昼時か』

雄二『それじゃあ飯にしよつぜ』

零「明久、弁当作ってきたぞ」

愛子「吉井くんって零にお弁当作って貰ってるの!?!」

零「1週間に1、2回だな」

優子「吉井×零×秀吉」

零「いい加減にしろ。腐女子」

明久「零の料理はすごいからね」

姫路「あの吉井くん。私もお弁当作ってきたんですけど」

明久「えっ!でも零のがあるし」

雄二「それは俺達が食ってやるからお前は姫路のを食べ」

雄二が明久の弁当を奪う。

優子「これ本当においしいわね」

愛子「ボクも作ってもらおうかな」

潤「零、俺に料理を教えてくださいませんか?」

零「別に構わないぞ」

優子・愛子「^{ボク}私も!」「」

零「じゃあ、今度の休みの日に来い」

潤（二人きりでやれると思ったのに）

いつの間にか明久に渡した弁当は空になってるし。

明久「はあ〜〜」

島田「可哀想だから私のお弁当も分けてあげるわよ」

明久「いいの!?!」

アイコンタクト発動!!

零「秀吉!! お前も明久に弁当を分けてやれ!!」

秀吉「分かったのじゃ」

秀吉「明久! ワシの弁当も分けるのじゃ」

明久「秀吉まで!?!」

雄二「幸せ者だな」

明久「雄二が弁当を取らなきゃもっと幸せだったね」

アイコンタクト発動!!

零「霧島」

霧島「……何？」

零「お前も雄二に弁当を分けてやったらどうだ？」

霧島「……うん」

零「食べさせてやれ」

霧島「……雄二、私もお弁当分けてあげる」

雄二「俺の分はあるんだが」

霧島「……あーん」

雄二「バカ！人前でそんな事やるな！」

零「人前じゃなきゃいいんだ」

霧島「……雄二」

雄二「そついう訳じゃねえ！」

秀吉・姫路・島田「……明久くん（アキ）！！あーん」「」

明久の方にも連動してるし。

優子・愛子・潤「……零！あーん」「」

零「何故に!？」

潤「いや、教えてもらう前に今の腕を見てほしいからな」

愛子「うんうん」

優子「その通り」

零「そ、そうか」

確かにそれは大事なことだな。

土屋「……………妬ましい」

須川「異端者だらけだな」

清水「豚野郎がお姉様に！」

久保「僕も吉井くんに」

ダメだなこのクラス

バタツ！

明久が倒れたし

姫路の弁当を食っちゃったみたいだな。

零『雄二、秀吉、ムツツリーニ蘇生させるぞ手伝え』

雄二・秀吉・土屋『『分かった』』

あーあ、着くまでに間に合うかな？

強化合宿1日目零(前書き)

修正、変体が変態になってるところがありました。すみませんでした。

バカテスト 物理

『観測者Aが速度Aで走っていると、正面から周波数Fの音を発し速度 v' で走行してくる救急車がやってきた。音速を V とした時、観測者にどのような事が起きるのか書きなさい。また、その現象の名称を併して答えなさい。』

姫路瑞希

『観測者Aには、車が発車する周波数が $f \frac{V + v'}{V - v'}$ となつて聞こえる。』

現象名 ドップラー効果』

教師のコメント

『F1マシンが通過する時もこれと同様の現象が起こっていますね。物理現象は一見難しい様に思えますが、意外と身近に存在するので。』

吉井明久

『観測者Aは $v' + v$ ではねられる。

現象名 交通事故』

教師のコメント

きちんと相対速度を補足してるあたりが腹立たしいです。

哀川零

『観測者Aはひかれた後、やってくる救急車による $v \cdot + v$ の音が聞こえる。』

現象名 119番』

教師のコメント

ひかれることが前提なんですね。

強化合宿1日目零

明久サイド

雄二「目覚めたか」

明久「あれ、ここは？」

零「合宿所だ」

秀吉「お主が前世での罪を懺悔し始めた時はもうダメかと思ったのじゃ」

明久「はははははは」

冗談だよね？

明久「ムツツリーニは覗きでも行ったの？」

零「起きていきなりその疑問はどうなんだ？」

土屋「……………今戻った」

零「ちょうどいいな」

土屋「……………明久、起きたか。情報が無駄にならなくてすむ」

明久「えっ！？犯人が分かったの？」

土屋「……………（フルフル）」

明久「そっか。まあしょうがないよね」

土屋「……………尻に火傷があるくらいしか」

明久「君は何を調べたんだ!？」

零サイド

現在ムツツリー二の情報を説明中

だだだだだだだだだだだ!

外が騒がしいな。

ガッ!

ドアが開く音

小山「おとなしくキャッ!」

バタン!

転ぶ音

いやー、念のために扉のところに縄を張っておいて良かった良かった。

小山「これは一体何なのよ！」

零「普通に縄だが」

秀吉「何故お主らは咄嗟に脱出の体勢ななれるのじゃ？」

明久、雄二、ムツツリーニが窓やタンスの中へと逃げるモーションに入っている。

明久「てつきり鉄人だと思っただから」

雄二「大体何なんだお前らは」

小山「きをとりなおして、全員手を上げておとなしくしなさい！木下はこつちへ」

零「すごいな。さつき盛大に転んだ奴のセリフに思えないぞ」

小山「うるさいわよ！」

零「なんか俺そのセリフ結構言われてる気がする」

雄二「だから一体何なんだ？」

小山「このカメラが女子風呂の脱衣場にあつたのよ！」

明久「覗きじゃないか!？」

小山「しらばっくれるんじゃないわよ!どうせアンタ達がやったん

でしょ！」

零「証拠は？」

小山「そんなのないわよ。こんなことアンタ達くらいしかやるわけないでしょ！」

零「証拠がないのになんでそんなに偉そうなんだ？第一脱衣場には俺達はいれない。この時点で俺達ではないことが証明される」

小山「うるさいわよ！アンタ達以外に誰がやるのよ！」

零「知るかよ！文句があるなら確固たる証拠を出しやがれ！」

小山「いいわよ。自白させてやるから」

姫路「明久くん。準備は出来てますね？」

島田「出来てなくてもやるけど」

霧島「……お仕置が必要」

姫路・島田・霧島が現れた。

スパパパン！

女子生徒『『『キヤツ！』』』

零「今のは威嚇射撃だ。もしこの部屋に一步でも入ってきたら誰だろつと容赦なく当てる」

小山「くっ、女子相手に何するのよ!」

零「拷問をおつ始めようとする奴が何を言う。当てられなかっただけありがたく思え!」

姫路「哀川くんは邪魔しないでください!」

島田「そうよ!アキに用があるんだから」

霧島「……私は雄二に」

零「殺されると分かっている誰が渡すか!てめえらも最低だな。やっぱり秀吉とくっ付けた方がいいみたいだな」

姫路「そんなのダメです!」

島田「そうよ!余計なことしないで!」

零「知るか!信用してないくせしてなにが好きだ?そんなの終われ!」

姫路・島田「くっ」「」

霧島「……今回はあきらめる」

零「珍しいな」

霧島「……零の言う通りだから。雄二を信用してみる。けど、覗きをしてたのが雄二なら容赦しない」

零「やってないんだからそれでいい」

小山「証拠を見つけてやるわ!」

零「なら、また賭けをしよう。お前達は俺達がやったって証拠、俺達は真犯人を見つけるのを」小山「何を賭けるのかしら?」

零「お前達が勝ったら好きなだけ俺達をボコれ。俺達が勝ったらそうだな、ムツツリー二商会での販売用写真の撮影と行こうか」

小山「いいわ!絶対に証拠を見つけてやるんだから!」

佐藤「こ、小山さん」

零「今の言葉録音したからな」

ボイスレコーダーは便利だな。

零「話が終わったなら帰れ」

小山「言われなくてもそうするわ!」

女子生徒退散。

零「お前ら無事か?」

明久「うん。誰も攻撃しなかったからね」

雄二「これで犯人を見つける理由が増えたな」

零「さて、犯人だが目星はつけてある」

明久「えっ!？」

土屋「……………本当か!？」

雄二「なんでお前が調べてんだ？」

零「秀吉にな明」

秀吉「それはそうと誰なんじゃ？」

秀吉にかぶされた。

零「多分、清水だろうな」

雄二「理由は？」

零「俺の女装写真を販売していると聞いたことがある。」

土屋「……………零の女装写真は高値がつく」

零「今すぐその販売は辞める。それに、さっき言った通り男子が女子の脱衣場に入るのは困難だからな」

雄二「女の清水なら楽に入れるってわけか」

明久「もしかして最初から分かってて小山さんとあの賭けしたの」

零「明久にしては鋭いな」

明久「悪魔がいる」

零「だから、あの程度の小物と一緒にするな」

秀吉「じゃが、証拠はどうする気じゃ？」

零「潤、優子、愛子に火傷があるか調べてもらえばいい話だ」

プルプルプルプル

電話か。

潤「無事か？」

零「潤か。無事だが」

潤「それは良かった。他の女子が覗きの犯人が零達だと言って向かったからな」

零「それなら追い返したよ。」

潤「さすがだな」

零「犯人を捜すのに協力してくれ」

潤「分かった。俺達は何をすればいい？」

零「尻に火傷がある奴を探してくれ。多分清水だと思う」

潤「任せろ」

零「頼んだぞ」

ガチャン

零「潤達に頼んだ」

雄二「これでこの問題は解決だな」

さて、原作の問題は解決だが、原作外の問題はどうなるんだか？

強化合宿1日目須川（前書き）

新キャラ登場

バカテスト 国語

次に示す四字熟語を示し、例文を作りなさい。

「あいまいもこ」

姫路瑞希

漢字 曖昧模糊

例文 責任の所在が曖昧模糊としていた。

教師のコメント

「あやふやではっきりしない」ということです。読める人は多いのですが、書ける人はそう多くありません。良く出来ました。

吉井明久

漢字 合間妹子

教師のコメント

なんとか答えようという気持ちだけ伝わってきました。

土屋康太

例文 小野小町・小野妹子・合間妹子の日本三大美女は遣隋師として旅立った。

教師のコメント

一名男子が混ざっていますので気をつけてください。

哀川零

漢字 I M Y M O J

例文 英語の一人称はI M Y M Oこれであってたっけ？

教師のコメント

「私を」はM eです。

強化合宿1日目須川

須川サイド

やっと着いたか。

バス内で吉井達がイチャついてたから殺そうかなと思ったけど、吉井が勝手に死んだからいいとするか。

決してひがんでる訳ではないからな。

さて、ここでみんなに聞きたいのだが、文月学園の避暑地であるはずの旅館に小学生女子がいたらどうすればいいだろうか？

その小学生女子が困った顔を浮かべていたらどうすればいいだろうか？

まあ、話しかけてみることにしよう。

他の奴らに見つかったら殺されかねないのでこっそりと

須川「こんな所でどうしたんだ？」

????「話かけないでください。あなたのことが嫌いです」

傷ついた。傷つくだけだった。

だが俺は、ここで諦めるような人間じゃない！

須川「困ってんだろ？話聞かせてみるよ」

「????」

須川「な、なあ。おいつてば」

「????」

無視された。小学生女子に無視された。

行くぞ！

自分でも何がしたいか分からんが行く！

まず、標的の後ろに立つ。

右手を振りかざし、

おもいつきり標的にドーン！

「????」イッターーイ！何をするんですかいきなり!?!」

須川「やっと会話してくれたか」

「????」誰だつて後ろから殴られたら文句の一つくらい言います!」

須川「おい、お前」

「????」お前ではありません!私には七迷^{ななまよひ} 曆^{いひ}という父と母からも
らった大事な名前があります」

須川「そうか。俺は須川 亮って言うんだ」

七迷「須川亮ですか。脇役のような名前ですね」

須川「原作ではそうだったが今回は違っぞー!」

七迷「メタ発言は辞めた方がいいですよ。出番減らされますし」

須川「そ、そうだな。それより七迷困ってんだろ。俺が力になれると思うんだが」

七迷「後ろから殴る人に力になってもらうほど、私も落ちぶれてません」

須川「悪かったって。」

七迷「誠意が見えませんか」

須川「この通り」

七迷「なんでそんなに簡単に土下座が出来るんですか!？」

須川「誠意を示すとしたら土下座」

七迷「分かりましたからそんなこと止めてください!」

須川「この位置からなら結構見えるな」

七迷「何がですか?」

須川「何って、スカートの中」

ゴン！

須川「踵落として、鼻打っただろうが！！」

七迷「変態！！」

蹴りがもう一発飛んでくる。

須川「見えそう！！」

七迷「キャツ！？」

中断してスカートを抑える。

七迷に向かい指を差して

須川「蹴り技はもう出来まい！！」

ガブツ！

須川「いってえええええええええええ！！」

こいつ指を腕ごと噛みやがった！！

須川「放しやがれ！！」

七迷「ガブガブ」

須川「この野郎！」

噛まれた腕をそのまま振るって七迷を地面に叩きつける。

七迷は気絶したみたいだな。

須川「バカな奴め！小学生が高校生に勝てるとても思ったか！」

ハッハッハッハッハッハッ！

小学生女子を相手にセクハラまがいのことをして、本気で喧嘩をしたあげく、大声で勝利宣言をしていた高校生男子の姿があった。

つーか、俺だった。

十数分後

七迷「んっ」

須川「大丈夫か？」

七迷「そう見えるなら眼科に行ってください」

須川「スミマセンでした」

やはり、男らしく土下座を

七迷「スカート覗く気満々で土下座をしようとするのは止めてください」

ちっ！

七迷「今、心の声で舌打ちが聞こえたんですが」

須川「ナンノコトデスカ？」

七迷「片言になってますよ」

須川「まあいいか」

七迷「私的に全然良くないんですけど」

須川「ほらよ」

缶ジュースを投げる。

七迷「えっ？」

須川「悪かったよ。それで許せとは言わないが、喉乾いてるだろ？」

七迷「えっと、ありがとうございます」

須川「別にいいよ。それより何か困ってることあるんだろ？」

七迷「そ、それは」

須川「いや、やっぱ言わなくていいや。はじめは聞き出そうかと思
っていたが、言いたくないなら聞かないよ」

七迷「そうですか」

須川「だが、俺に出来ることがあったらちゃんと言えよ」

七迷「そうしてみます」

須川「そろそろ俺行くわ。数時間ここで泊まってるから、また明日
な」

七迷「はい。また明日です」

七迷（まったく変な人ですね。ていうか明日も来るんですか!?!）

強化合宿2日目哀川零（前書き）

バカテスト 体育

水泳の個人メドレーの種目を答えなさい。

姫路瑞希

1 バタフライ

2 背泳ぎ

3 平泳ぎ

4 自由形

教師のコメント

正解です。さすが姫路さん。

哀川零

1 のし

2 立ち泳ぎ

3 水蜘蛛

4 水遁の術

教師のコメント

君は何時代の人ですか！

吉井明久

1 アンソンメドレー

2 懐メロメドレー

3 鳩サブレー

教師のコメント

先生も鳩サブレは好きです。

強化合宿2日目哀川零

強化合宿2日目

つーか、Aクラスとの合同授業つっても主要キャラはFクラスに移ったから意味無いんだよな。

あつ、あの人がいたか。

あの人は

零「高橋女史。ちょっといいですか？」

高橋「何でしょう？」

零「数学で模擬試召戦争をしたいんですが」

高橋「はい、分かりました。どなたが相手ですか？」

零「高橋女史とです」

Aクラス&Fクラス「何っ!？」

合同大合唱

あいつ正気か？

でも、哀川って数学が得意じゃなかったか？

高橋先生にはかなわねえだろ。

高橋先生に3000円

と騒ぎ始める。

Fクラスで賭け始まつてるし

零「須川！俺は自分に10000円」

須川「分かった」

高橋「賭けごとは感心しませんね」

零「模擬試召戦争で負けたら反省しますよ」

高橋「それでは全力でいくしかありませんね」

零「始めから全力のつもりだったでしょうが」

高橋「ま、そうですね」

零「鉄人！召喚フィールドを」

鉄人「西村先生とよべ。まあいい。承認する」

零・高橋「サモン！」

【哀川零VS高橋洋子】

数学

749VS783】

Fクラス&Aクラス』どっちも700点オーバー!？」

零「数学教師より高いんじゃないですか？」

高橋「あなたも生徒の点数じゃないでしょう」

高橋女史の召喚獣は原作通り鞭

ここは曲弦系を張り巡らすか。

高橋女史は鞭で攻撃してくるが、張り巡らされた曲弦系が邪魔で俺の召喚獣に届かない。

高橋「やっぱり曲弦系は厄介ですね」

零「相性的にはこっちが有利ですね」

たいていの場合に曲弦系は最強を誇るからな。

高橋「そうみたいです。ですが大体理解しました」

零「はい？」

高橋女史の召喚獣はダッシュで俺の召喚獣に曲弦系を避けながら向かってくる。

そして、俺の召喚獣を殴り飛ばす。

零「解除！」

張ってあった曲弦系を全て回収する。

【零 数学 625】

高橋「とっさの判断素晴らしいですね」

零「そこまで分かってるのかよ」

高橋「口調が変わってますよ」

あそこで解除してなかったら俺の召喚獣は曲弦系でバラバラになってたな。

零「あの攻撃は曲弦系の位置を確認するための物か」

高橋「ええ。あなたの曲弦系は動きをパターン化して使いやすくされています。そうなるとどの位置に張られているのかもいくつかのパターンになってしまいます。ですが今までに見た配置ではないということとは、曲弦系の配置はランダムということですね」

零「理解が早いことで。これは武器が鞭だから出来たことすね」

高橋「攻撃は近距離なので武器として使うことが出来ませんけど」

頭のいい奴は嫌いだ。

つか、その攻略法人間技じゃねえし。

高橋「さて、どうしますか？吉井くんに行ったように手で頑張りますか？」

零「あれは点数の低い明久だから使えたわけで高橋女史の点数を減らす自信はありませんよっと！」

不意討ちはどうかな？

バシン！

鞭で弾かれたし。

高橋「嘘ですね。曲弦系の切断方法は力ではないみたいですから」

零「そこまで分かりますか。そして普通に不意討ち対処してスルーは酷くないですか？」

高橋「それで手動を使つつもりですか？それとも諦めますか？」

またスルーかよ。

零「どっちも選ぶのは止めましょう。どうせ対策はあるみたいですし」

高橋「それではさっきみたいに簡易操縦に頼るわけですか」

零「いや、それも止めましょう」

高橋「では、どうするつもりですか？」

零「こっしょうしょう。『箱庭』ボックス！！」

召喚大会の商品を使わせてもらいましょう。

俺の召喚獣の肌の色が褐色になり、ボクシングのポーズをとっている。

零「『ハードラッピング刺包装』」

高橋「能力付与型でしたね」

零「さて、どんな能力何でしょうね？」

高橋「あなたは分かっているんでしょう？」

高橋女史の不意討ち

零「不意討ちなんて似合わないですよ」

高橋「全部避けてるじゃないですか」

俺の召喚獣は無傷で立っている。

零「あっ本当ですね。じゃあ、こっちからも行きますよ」

その瞬間俺の召喚獣は高橋女史の召喚獣との距離を詰め、蹴りを入れる。

【高橋 587】

高橋「くっ、ボクシングじゃなくてキックボクシングですか。それに今の攻撃とさっきの召喚獣の回避でどんな能力が分かりました」

零「さすがですね。たった2回で見抜くなんて」

高橋「あなたは召喚獣の動きをコントロールしてませんか？いや、どいう行動をするか少し考えただけで勝手に動いてくれるみたいですね」

零「八割正解です。攻撃の時はそうですが回避の時は考えてすらいません。つまり、反射神経が異常で俺の召喚獣は自動操縦なんです」

高橋「……………自動操縦」

零「それでは頑張ってください」

俺の召喚獣は的確な攻撃をし、高橋女史の召喚獣の不規則に動く鞭を擦りもせず避ける。

高橋「くっ!」

零「FINISH!」

【高橋 0】

『ウオオオオオーーーー!』

『本当に勝ちやがったよ!』

明久「すごいよ！零！」

雄二「8000円すった」

零「おい雄二！てめえ俺が負けると思ったのかよ！」

高橋「負けました」

零「なんで腕輪使わなかったんですか？」

高橋「あれは多数じゃないと使いにくい物ですから」

零「そうなんですか。」

高橋「悔しいですね。ですが面白かったと思います」

零「光栄ですね。それでは」

高橋「次は負けませんから」

零「須川、この金額はおかしくないか？」

須川「それで合ってるよ」

零「いやおかしいだろ！賭け金10000円で一万越えて！？」

須川「お前に賭けた奴がたったの5人。それ以外が全員高橋先生に賭けたからな」

零「俺信用ないな!!」

須川「俺も負けたから少し貰いたいくらいだよ」

零「御愁傷様」

鉄人「おい、哀川!」

零「なんすか?」

鉄人「お前の午後の補修の教師が代わった」

明久「零は出来るのも出来ないのもみんなと同じ授業じゃ会わないからね」

零「で、誰になったんすか?」

高橋「私です」

零「高橋女史!?!」

高橋「私に勝ったのですから、酷い点数を取ってもらっては困ります」

零「さいですか」

高橋「保健がどれくらいのレベルか試してみましょう。男女特有の体つきになることをなんといいでしょう?」

零「第二次世界大戦」

全員「はい？」

ちなみに正解は二次性徴

二次しか合ってねーし

強化合宿2日目須川亮（前書き）

バカテスト 歴史

『西暦1492年、アメリカ大陸を発見した人物の名前をフルネームで答えなさい。』

姫路瑞希

『クリストファー・コロンブス』

教師のコメント

『正解です。卵の逸話で有名な偉人ですね。コロンブスという名前は有名ですが、意外にファーストネームはあまり知られていません。意地悪問題のつもりでしたが、姫路さんには関係無かったみたいですね。』

須川亮

『コロン・ブス』

教師のコメント

フルネームは分かりませんでしたか。コロンブスは一語でファミリーネームであってコロン・ブスがフルネームというわけではありません。気をつけましょう。

島田美波

『ブス』

教師のコメント

『過去の偉人になんてことを』

哀川零

『男だからブスじゃなくてコロンブサイク』

教師のコメント

『そういう問題ではありません。』

強化合宿2日目須川亮

須川サイド

あーあ、300円すつちまった。

でも、哀川の奴すげーな。高橋女史に勝つなんて。

須川「おついたいた。七迷！」

七迷「しゅ川さん」

須川「人の名前を噛んでんじゃねーよ！」

七迷「しょうがないじゃないですか。誰だって噛んでしまうことはあります。須川さんは生涯一度も噛んだことがないと言っているのですか？」

須川「ないとは言わないが人の名前を噛むような失礼な真似はしない」

七迷「なら、なまむみなまもめなままもと3回言ってみてください」

須川「お前が言えてないし、それ人の名前じゃない」

七迷「……………いえ、これで合ってます。噛んだわけではありません。それにこの名前は知り合いに5人もいます。ですからポピュラーな名前だと思われます」

須川「なんだ今の間は！誤魔化すな！はあ、しょうがねーな。分かったよ。なまむみなまもめなままもなまむみなまもめなままもなまむみなまもめなままも」

あつ言えちった。

七迷「平仮名が沢山並んできると気持ち悪いですね」

須川「それについては同感だが、こっちの方が難しいだろ。なままももって一体どうやって噛んだんだよ？なままももって言ってみ」

七迷「にやみやみやみやみよー！ー！」

須川「本当にお前どうやって噛んでんだよ！」

原型が分からねーよ！

七迷「須川さんと話すのは楽しいですね」

須川「そう言ってもらえるとは光栄だな。俺もお前と話すのは楽しいよ」

七迷「そうですね。つまり須川さんはロリコン野郎ってことですね」

須川「何故その結論に至るんだ！？」

七迷「修学旅行に来て友人とではなく、そこで会った小学生と楽しく会話してるなんてロリコン以外の何者でもありません」

須川「友人とも楽しく会話したしさつきなんて賭けまでしてきたからな！」

七迷「唾を飛ばさないでください。ロリコンがうつります」

須川「うつらねーよ！」

七迷「さてロリコンの須川さん」

須川「断じてロリコンじゃねー！」七迷「では私のスカートの中は気にならないということですね」

須川「是非とも詳しく聞かせてください」

七迷「変態」

須川「しまったあああー！」

七迷「しょうがないですね。少しだけですよ」

須川「マジしか!？」

未知の領域が今……………

チラッ!

須川「スパッツかよ！」

七迷「スカートの中を見せるところ言っただけですから」

須川「騙された。死のう」

七迷「なにこんなことで絶望してるんですか！」

須川「冷静になれ俺！」

七迷「そうですね。変態さん」

須川「俺は須川だ！」

七迷「そうですね。ロリコン野郎」

須川「言葉の暴力って知ってるか？」

七迷「なら言葉の警察を呼んでください」

須川「扱いが前より酷くないか？」

七迷「変態に対する一般的な態度だと思います」

須川「安心しろ。冷静になってみたら小学生に欲情するわけ無いじゃねーか」

七迷「むか！私これでもクラスでは発育良い方なんですよ！」

須川「確かに見た目よりあったな」

七迷「触ったんですか！？何時触ったんですか！？」

須川「昨日気絶したお前を運んだ時に」

七迷「キスもしたこと無いのに胸を触られたなんて」

須川「だから缶ジュース奢っただろうが」

七迷「あれってそういう意味だったんですか!？」

須川「そうだが？」

七迷「あなたには絶望しました。それに私に言わないといけないことがあるんじゃないですか？」

須川「ごちそうさまでした？」

七迷「違います!謝罪を要求してます!」

須川「そう怒るなよ。減る物じゃないし。むしろ増えると聞くぞ」

七迷「殺します」

須川「ぐは!そこ(男の急所)に蹴りは卑怯だろ」

七迷「あなたが卑猥だからです。クソ虫」

須川「どんな等価交換だ!？」

七迷「銅40グラム亜鉛25グラムニッケル15グラム照れ隠し5グラム殺意97キロで私の暴力は錬成されています」

須川「ほとんど殺意じゃねーか!」

七迷「ちなみに照れ隠しというのは嘘です」

須川「1番大事な要素が抜けちゃった!? もう怒った! せっかく芽生え始めていた罪悪感が無くなったぞ! もう触ったとか触らないとかどうでも良くなるくらい揉んでやる!」

七迷「キャー……!」

小学生女子に本気でセクハラをする男子高校生の姿がそこにはあった。

それは俺ではないと信じたい。

――

須川「……なんかごめん」

七迷「……反省してくれたならいいです」

やり過ぎた。

その場のテンションに身を任せたらダメだ。

七迷「そういえば須川さん」

須川「なんだ七迷?」

七迷「この辺りでお化けが出るらしいです」

須川「なるほど。そのお化けに会いたくてこの辺りに来てんだろ」

七迷「まあそんなところですよ。それで須川さんはお化けを信じますか？」

須川「召喚システムにオカルトが混じってるし、信じるかな」

七迷「そうですか！」

須川「嬉しそうだな」

七迷「いえそんなことはありません。では須川さんはそのお化けと友人になれますか？」

須川「んーどうだろうな？怖いし無理かもな」

七迷「……………そうですか」

須川「元気が無くなったな」

七迷「そんなことは無いです……………そろそろ時間なので帰ります」

須川「そうか。じゃあまた明日な」

七迷「さようなら」

強化合宿2日目夜哀川零（前書き）

バカ日誌 3日目

土屋康太

『前略（坂本雄二に続く）』

教師のコメント

リレー形式ですか！？

坂本雄二

『そして翔子が俺の前で浴衣を緩めようとするので、俺は全力でそれを止め、思いとどまるように説得した。隣では島田が明久に迫っていて、高橋女史に零が土下座していた。（高橋女史に続く）』

教師のコメント

高橋先生まで参加するのですか！？

高橋洋子

『あのセリフはやはり大胆だったのでしょうか？しかし、タイミン
グが悪いところで吉井くんが声をあげましたね。（吉井明久に続く）』

教師のコメント

本当に何があったのですか？早く吉井くんを見なければ。

吉井明久

『後略。』

教師のコメント

ここでその引きは無いでじょう。

強化合宿2日目夜哀川零

零サイド

そろそろ清水の尻に火傷があるかがメールでやってくる。

プルプルプルプル

ナイスタイミング！

潤『零。お前の言った通りに清水の尻に火傷があったぞ』

零「ビンゴ！サンキューな潤」

潤『その言葉優子や愛子にも言ってやれ』

零「そうだな。あいつらも手伝ってくれたし、後でこっちの部屋来いよ。菓子くらいはあるぞ」

潤『分かった！後でそっちに行く』

零「そんじゃ後でな」

潤『ああ、後で』

ガチャ

零「お前らやつぱり犯人は清水だったぞ」

雄二「これで俺の人生は安泰だ」

明久「でも犯人見つけたけどどうする？」

零「鉄人に頼む」

明久「躊躇ないね」

零「躊躇？何それ食えんの？」

秀吉「女子との賭けはどうするつもりじゃ？」

零「清水を呼び出す放送と一緒に流す」

土屋「……………撮影は合宿が終わってからでいい」

零「分かった。あつ潤達が来るから菓子や飲み物を準備してくれ」

雄二「確かに今回協力してくれたからな」

明久「分かったよ」

零「じゃあ鉄人に電話するわ」

プルプルプルプル

鉄人『西村だが』

零「零です」

鉄人「零か。お前らいつになったら覗きに来るんだ？」

零「アンタは教え子に何を望んでんだ!？」

鉄人「すまんすまん」

零「それより脱衣場のカメラの犯人が分かりましたよ」

鉄人「そうか。犯人はやはり土屋か？」

零「ムツツリーニ信用無いな!でも違いますよ。犯人は清水です」

鉄人「清水が犯人だと!?!証拠は？」

零「同じ奴に明久と雄二が脅迫などで困ってたんですが、その犯人の情報と重なってんでって面倒なんで全部渡しに行きます」

鉄人「分かった。教員の部屋にいる」

零「それでは」

ガチャ

零「ちょっと証拠を鉄人の所に行ってくるわ」

明久「それじゃ準備して待ってるね」

教員用部屋

零「失礼します」

鉄人「来たか」

高橋「来ましたか」

零「高橋女史までいたんですね」

鉄人「お前が来」

高橋「女子の脱衣場なので女性がいた方が良いと思ひまして」

零「確かにそうですね」

高橋「西村先生余計なこと言わないでください！」

鉄人「わ、分かりました」

教師のアイコンタクトは分からねーな。

鉄人「それで証拠は？」

証拠を説明中

鉄人「清水を呼び出すか」

零「その放送は俺にやらせてくれませんか？」

鉄人「別にいいが」

零「それでは『脱衣場のカメラの犯人が分かりました。犯人の清水美春は教員用の部屋に来やがってください。賭けに負けた女子は合宿終了日翌日にムツツリーニ商会に来やがってください。ホイコツトしたら容赦しません』と」

鉄人「賭けというのは何だ？」

やべ

零「それでは退散します」

鉄人「待て哀川！」

待つかこんちくしょー！

部屋に戻って鍵を閉めればなんとかなる！

部屋が見えた！

いっけー！

幻の左のスライディング！

部屋の中に入った！

零「ムツツリーニ！鉄人が来る！ドアに鍵をかける！」

土屋「……………了解」

ガチャン

ミッションコンプリート!

雄二「これじゃあ弁解出来ねえだろ!」

明久「それが僕の状況だ!」

零「何があつたんだお前ら?」

明久・雄二「ケータイを貸してくれ零!」

零「島田と霧島のアドレスは消してみた」

明久・雄二「何故に!?!」

零「なんか消したら面白いことになるぞ!と宇宙人から受信した」

明久・雄二「電波男!?!」

雄二「しょうがない。それでもいいから貸せ」

零「断る。」

明久「どうしてさ!」

零「てめえらが一番分かってるだろ。ケータイが壊れるような真似はしたくないからな」

明久「雄二」

雄二「明久」

明久・雄二「行くぞ！」

零「何すんだてめえら！！」

こいつら力付くでケータイ奪いやがった！

零「誰に何送ったんだ！」

From 哀川 零

TO 高橋 洋子

高橋女史、生徒と教師の垣根を越えた話があります。なので夜12時に部屋に来てください。

零「ブハッ！よりによって教師にやるか普通！？」

雄二「ダッシャア！」

ケータイの逆折り！？

雄二「悪いな。帰ったら新しいの買ってやる」

零「シャレにならんだろ！てめえらより傷が一番深いぞ！？」

高橋女史って冗談じゃ済まねえよ！

明久「ごめん」

雄二「さすがに悪いと思う」

零「そう思うなら始めからやるな！」

優子「何騒いでるのよ」

明久「一旦押さえて」

雄二「協力者をもてなすんだろ？」

零「ちつ！本当はmicroSDにバックアップしてあったから弁解出来たのによー」

明久・雄二「先にそれを言え！！」

潤「客を放っておくのはどうかと思うぞ」

零「すまないな」

明久「あつケーて」

零『てめえケータイ借りたらクロス』

明久「やっぱなんでもない！」

うんうん。素直な子は好きだよ。

ちよつと本気で殺気出しちった。

零「それじゃあ何かするか」

秀吉「トランプがあるのじゃ」

零「ちようどいいな。ダウトでもやるか」

愛子「面白そうだね」

数十分後

現在上半身裸です。

明久・雄二・ムツツリーニは女装中&脱落。

あれ、おかしいな？楽しくトランプやってたはずだよな？

どうしてこうなったのか思い出してみよう。

？ダウトをやりながら菓子やジュースを飲み食い。

？ジュースと間違つて雄二が持ってきた酒を女子&秀吉が飲む。

？多数決によりビリは脱衣することに。

？脱ぐ物が無くなつたら女装。

？明久 ムツツリーニ 雄二の順に脱落。

？現在この状況に。

はっはっはっはっ。

理解がついていかなー。

笑うしかねーな。

しかも現在4対1だぜダウト成立しねーよ。

零「ダウト!」

愛子「残念でした。これで上がりだね」

1対1になった今が勝負!

零「13ダウトするか?」

秀吉「ダウトする必要は無いからの」

秀吉 手札1

零 手札47

シクシクシクシク。

秀吉「1で上がりじゃ。ダウトせんのか?」

零「自分の手札見れば分かるよ!手札に無いのはさっき出した13と1だけだからな!」

優子「早くズボンを脱ぎなさい」

結果 パンツオンリー

よし逃げよう。

零「ちよつとトイ」

潤「ダウト」

零「だからト」

優子「ダウト」

零「ト」

愛子「ダウト」

零「もういいです」

秀吉「次のゲームに行くかの」

オワタ

神はこの世にいないのか!!

あつ使えないイタズラ娘はノーカンで。

鉄人「もう遅いから部屋に戻れ!」

女子&秀吉「「「「えーーーーー!」」」」

零「あなたが神でしたか!」

鉄人「なんて格好してるんだ！それに何を言っているか分からん」

零「先生が言ったりことだし部屋に戻れ」

優子「しょうがないわね」

愛子「またやろうね」

潤「女装」

潤さん。恐ろしい呪文を言わないでください。

女子は部屋を出てく。

よし、あいつらも帰ったし寝るか。

????「……………さい」

んー誰だ？こんな時間に。

????「いい加減起きてください」

零「高橋女史！？」

すごいな俺。小さな声で驚くをマスターしたぜ。

零「何で？」

高橋「あなたがメールを送ってきたのでしょ

う！しまった！ダウトに気を取られすぎた！

零「えつとすいませんでした」

土下座

高橋「いきなり何ですか！？」

零「えつと」

考える俺！ここで失敗したら人生が終わると思え！理由を考えるんだ！

み、見えた！

下着がというわけじゃねーぞ。

零「今日の模擬試験戦争は平気でしたか？」

高橋「へ？」

零「いや、考えたら高橋女史にはフィードバックがあったじゃないですか。700点オーバーのフィードバックはすごくきつかったと思っただけですよ」

高橋「そのことで呼び出したのですか？」

零「はい。そうですが」

高橋「はぁー」

零「許して貰えますか？」

高橋「嫌です」

零「マジすか!？」

高橋「これから2人きりの時は名前で呼んでくれるなら許します」

零「別にいいですけど？」

高橋「それでは呼んでください」

零「洋k」

明久「今の僕に役立つ物は無いな」

雄二「俺を助けるという選択肢は無いのか!」

零「2人きりではないみたいですね。高橋女史」

高橋「そうですね」

周りを見ると

明久 美波に押し倒されてる。

秀吉 寝てる。

雄二 霧島に浴衣を脱がされてる。

土屋 フラッシュ無しで撮影。

俺 高橋女史に土下座に頭だけ上げて会話。

まさにカオスだね！

明久「みんな静かにしないと先生が来ちゃうよ！」

零「もう、1人いるがな」

鉄人「吉井の声が聞こえたぞ！何事だ！」

明久「なんで僕のせいみたいになってんの！？」

雄二「明久のせいで面倒なことになっちまった！」

零「明久のせいだがなんとかするぞ！」

明久「文句言いたいけどどうする？」

雄二「鉄人に向かってアキちゃん爆弾だ！」

明久「それは僕が凄い被害をこうむるから却下」

零「ワガママだな。しょうがない。俺、明久、雄二が囿になって鉄

人が引き付けるからそのうちに女子は戻れ」

明久「やっぱ、そうなるね」

鉄人「ドアを開ける！」

雄二「1、2、3で行くぞ」

明久「1」

雄二「2」

零「3」

ドアが開いた。

零・明久・雄二「「ダッシャアーーーーー！」」

トリプルライダーキック！

と見せかけて

明久「ってあれ？なんで僕だけ」

零・雄二「「ガンバ！」」

明久は鉄人にライダーキックを浴びせた。

明久「チクシヨーーー！すいません。西村先生、雄二のエロ本と零の酒を隠す為にこんなことしてしまっ

雄二「何！？」

鉄人「吉井、坂本、哀川！逃がさんぞ！」

零「悪いがもう逃げてる」

明久がまき添いにしようとした時にはスタートしてたぜ！

明久・雄二・鉄人「」「待てえええ！」「」

明久と雄二がスタート！

鉄人は立ち上がり体勢を直しスタート！

零 明久&雄二 鉄人の順

明久と雄二とは差が全然無いな。

零「しょうがない。俺が囷になるから明久と雄二は自販機の裏に隠れてる」

明久「いいの？」

零「俺はさつき鉄人から逃げきったからな」

雄二「任せたぞ」

零「ああ」

明久と雄二は自販機に隠れた。

零「明久と雄二が自販機に隠れてるぞ！」

明久・雄二「ヴォーーーーーイーーーー!?」

スクアール?

鉄人「そうか。吉井、坂本！」

明久「裏切ったな！」

雄二「明久はいい。俺だけでも助ける！」

零「お前ら置いて先に行く！」

明久・雄二「主語と目的語が逆だ！」

零「知るか」

零さんがログアウトしました。

逃げきったぜ!

眠気がぶっ飛んじまったな。

零「そっぴやぬらりひょんからの仕事にそろそろ手をつけないとな」

プルプルプルプル

ケータイか。

零「哀川です」

ロキ『はい！あなたの愛しのロキちゃんですー！』

零「間違い電話か。切るか」

ロキ『ごめんごめん！そろそろ力を貸して欲しいかなと思ってね』

零「お前の力が必要になることなど無い」

ロキ『なんでそんなに冷たいの？』

零「お前が何がしたいのか分からねーんだよ」

ロキ『キミと同じだよ。楽しみたいんだよ。この世界を』

零「その玩具の中には俺も入ってんだろ？」

ロキ『どうだろうね？キミは玩具というより遊び相手だね』

零「遊び相手ねえ」

ロキ『それで今は納得してくれないか？』

零「最低限は認めてやる。俺もお前と遊んでやるよ」

ロキ『良かった。良かった。キスしたいくらいだね』

零「それでどんな要件だ？」

ロキ『つれないねー。そこがいい所だけど。その幽霊の内容だよ』

零「お前どっかで見てるだろ」

ロキ『寝てる潤ちゃんを使ってるからね』

零「俺以外への迷惑を考えないな！」

ロキ『アタシは悪戯の神だよ。それに潤ちゃんはアタシの一部だし。話が進まないから説明しちゃうよ』

零「頼む」

説明中

ロキ『そういうわけだからそれじゃあね』

零「ありがとうよ」

ロキ『……………そういうのズルいな』

零「ん？」

ガチャ

切りやがったよ。

零「『迷い鏡』って怪異ねー」

強化合宿3日目（前書き）

前回、バカ日誌で3日目と表記してしまいましたが、今回が3日目で前日が2日目です。

バカ日誌 3日目

姫路瑞希

『今日は少し苦手な物理の勉強をしました。いつもと違ってAクラスの人達と交流しながら勉強出来たし、とても有意義な経験になりました。』

教師のコメント

Aクラスとの交流で姫路さんに良い影響を与えたみたいでなによりです。次回の振り分け試験では同じクラスになるかもしれないので良い関係を築いてくださいね。

431

哀川零

『今回シリアスパートをほとんど須川に持ってかれた。』

教師のコメント

作者に言ってください。

土屋康太

『前略夜になって寝た。』

教師のコメント

昨日も言おうと思ったのですが、前略はそう使うわけではありませんん。

吉井明久

『全略。』

教師のコメント

盛大な手抜きありがとうございます。

強化合宿3日目

強化合宿3日目

須川サイド

昨日の放送は哀川だよな。

ムツツリーニ商會が關係してることとはやっぱり色々な商品が入荷されるな。

そろそろ七迷に会いに行くか。

須川「ちょっと行ってくるわ」

新田「お前、昨日もそうだけど何してんだ？」

須川「いや、ちょっとな」

新田「悩みがあるなら話せよ」

須川「なんでそんなセリフが出てくんだ？」

新田「お前には悪いけど昨日お前の後をつけたんだ」

ヤバイ！七迷と話してる所が見られてたら異端者として殺られる！

須川「まさか見たのか？」

新田「見ちまったよ」

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ

新田「お前が1人で叫びながら暴れてるところを」

はっ？

新田「どんなことがあるうと友達だからな」

須川「ちょっと待て！小学生くらいの女の子は見えなかったのか？」

新田「本当に大丈夫かお前？」

俺に見えていて新田に七迷が見えてない？

どういうことだ？

新田「おい須川」

須川「悪い。俺は大丈夫だから。心配するな」

新田「それならいいが」

須川「行ってくるわ」

新田「どこに！？」

須川「小学生女子に会いに」

俺は走り出す。

新田が後ろで叫んでるが、知るか！

七迷はなんでこの合宿場にいた？

お化けを探しにきたと言ってた。

いや違う。俺が言った言葉にそうだと返しただけだ。

なら何故だ？

お化けの話を振ったのは七迷だったが信じるかどうかだった。

その後七迷はなんて言った？

お化けと友達になれるかと聞いてきた。

何故そんな質問をした？

お化けと友達になりたかったからか？

いや違う！

七迷自身がお化けだったからだ！

お化けのあいつは俺と友人になろうとしてたんだ！

あの質問に俺はなんて答えた？

バカだ俺は！

友達になろうとしてたあいつを

零「須川！止まれ！」

哀川が前方で壁に寄りかかっている。

須川「悪い哀川！急いでんだ！」

零「妖怪に会いにか？」

須川「どうしてそれを」

俺は哀川のところまで立ち止まる。

零「その調査と対処が俺の仕事だからな」

須川「調査？対処？」

零「だから後は俺に任せろ。お前は教室に帰って平和な日常を満喫してろ」

須川「で、でも」

零「お前にどうにか出来るのか？」

須川「くっ」

零「俺は出来るだけお前らを巻き込みたくない。お前らのためじゃ

ない。自分のためにだ。それに死ぬかもしれないんだ。帰れ」

確かに哀川の言う通りだ。俺は帰った方がいいのかもれないな。だけど

須川「だけど七迷の友達になってやらないといけないんだよ！」

あいつは俺と話して楽しいと言っていた。

須川「哀川。確かに俺は不良退治くらいしか出来ない一般人だ。だがな、あいつと会わなかったことにしてこのまま平和な日常とやらを過ごすことなんて出来ないんだよ！」

零「本当に死ぬかもしれないんだよ！分かってんのか？」

須川「俺はあいつの友達になるって決めた、いや、あいつは俺の友達だ！友達のためなら地獄にだって行ってやるよ！」

零「本当にいいんだな？」

須川「決めたからな」

零「こいつを持ってけ」

須川「これは？」

零「俺のコレクションの一つだ貸してやる」

布に包まれたものが渡される。

零「死ぬなよ」

須川「死神が死ぬってか？笑える話だな」俺はまた走り出す。
友達へ返事を返すために。

――――

零サイド

プルプルプルプル

ケータイか

零「はい」

ロキ『本当にそれで良かったのか？』

零「ああ」

ロキ『お前がいいならいいが』

零「この世界終わるかもな」

ロキ『そしたら次の世界に連れてってあげるよ』

零「楽しみにしてるよ」

――
須川サイド

須川「七迷！」

会えるならここだ。いつもあいつと会っているこの林なら。

須川「いるんだろ！七迷！」

七迷「なんで来たんですか？」

七迷が後ろに立っていた。

最初からそこに居たように。

それが当たり前のように。

須川「お前に会うのに理由が必要か？」

七迷「私がおなのか知ってるんでしょう？」

須川「ああ」

七迷「そうですね。なら私は怪異らしくあなたに向き合います」

するといきなり夜のように暗くなった。

七迷「これが須川さんの迷いですか」

一瞬、目を七迷から離れた次の瞬間に姿が変わっていた。

その姿は

須川「死神」

――

鏡

銀にガラスを貼りつけ物。

姿を写すために使われる。

零サイド

昨晚

ロキ『そっちで問題なってるのは迷い鏡だよ』

零「迷い鏡」

ロキ『迷い神の派生怪異、亜種と言ってもいいね』

零「迷い神ってのは久保と清水のオカルト召喚獣だった奴だろ」

ロキ『相変わらず原作知識が豊富だね。迷い神に似ているのだが違うところもある』

零「それはなんだ？」

ロキ『迷い鏡は長い間迷っている者にしか見えない。そしてその迷いの形になる。つまり、迷いと向き合わないといけないんだね』

零「それはきついな」

ロキ『迷い神もそうだけど迷い神 迷いし神 迷い死神。その名の通り死神に近い奴もいるから』

零「対処方は？」

ロキ『人それぞれだね。まあ、基本的にキミが用意してるアレで大丈夫だよ』

零「なら安心だ」

現在

キン！

須川サイド

ちっ 実力は全く同じか。

だが、あっちは体力が切れそうにはないな。

長期戦はこっちのが不利だな。

哀川がこの水玉模様の大鎌を貸してくれなかったら終わってたな。

武器はこっちが上、持久力はあっちが上か。

集中を切らした方が負ける。

七迷「何を考えてるんですかね？」

キン！カン！キン！

須川「どうやってたら勝てるのかと考えていたんだよ」

お互い殺りあいながら会話を始める。

七迷「あなたは死神をやっていることを迷ってますよね？」

須川「さあ、どうかな？」

七迷「誤魔化しても意味無いですよ。迷いに反応する怪異なんですから」

須川「じゃあ、始めから聞くなよ」

七迷「いいじゃないですか。これが最後になるんですから」

須川「最後になんかせねえよ！」

七迷「無理ですよ」

しなかった。

須川「えっ？」

七迷の鎌は地面に刺さっており、俺の全力は全て七迷が受けている。

須川「なんで……………」

七迷「これでやっと死ねます」

須川「お前は幽霊なんだから！幽霊が死ぬってなんだよ！」

七迷「私が迷い鏡になった理由を教えます。嫌みかもしれませんが私は天才でした。才能がありました。でも、才能しかありませんでした。友人も親も全てがありませんでした。そんな私は死にながら生きてました。そう。私は生と死を迷っていました。」

須川「……………七迷」

七迷「そのまま死んだ後も迷い続けてました。体は死んでるんだから死ぬために頑張っていました。おかしいですね？死にたかったはずなのになんで泣いてるんでしょう？」

須川「生きたいからだろ！体が死んでようと怪異になろうと生きたかったからだろ！」

七迷「そっか。私は生きたかったからですね。生きて遊んだり話をしてたらしかったんですね。バカですね私。そんな簡単なことに気付かなかつたなんて」

須川「ああ。お前はバカだ。物凄いバカだ」

七迷「あーあ。頭の悪い須川さんにバカって言われてしまいました。そろそろさようならですね。生きたかったな」

須川「七迷！！」

七迷の体が透け始める。

七迷「さようなら。って須川さんも泣いているじゃないですか」

と言って七迷は消えた。

強化合宿4日目(前書き)

バカ日誌は後書きです。

強化合宿4日目

4日目

って言うより今回のオチ。

島田サイド

どうしよう。2日目にアキに告白されるなんて。

瑞希を裏切ったことになるかな？

でも、一年の時からウチも好きだったし。

明久「おい！美波！」

島田「アキ!？」

ちよつと前

明久サイド

明久「色んなことがあったけど強化合宿楽しかったな」

零「こつち着いてからは2日目しか出番無かったのにな。原作主人公」

明久「それ言ったらバトルパートを全部持ってかれただろ！オリ主」

零・明久「……………」

雄二「バカだなお前ら。傷つくなら言わなきゃいいのに」

零「だが明久。その2日目に島田に誤解があつたなら、帰る前に謝つてこい」

明久「あつ！忘れてた。ちょっと行ってくるね」

明久が島田の所に向かう。

雄二「忘れてたって本当バカだな」

この後、明久が瀕死で帰ってきたのは別のお話し。

小山サイド

哀川の奴！

あいつのせいで女子生徒の信用を失ってしまったわ！

2学期になったら試召戦争で潰してあげるわ！

2学期に試召戦争が起きたかどうかは別のお話し。

高橋サイド

教師が生徒にこんな感情を抱いてはいけないと分かっているんですが。

哀川くんの周りは可愛い女の子が多いですし、歳が離れた私なんてダメですかね？」

高橋「はあ」

零「どうしたんですか？ため息なんかついちゃって」

高橋「哀川くん！？いつからここに？」

零「い、今ですけど」

高橋「そうですか」

零「大丈夫ですか？洋子さん」

高橋「大丈夫ですって今、洋子さんって言いましたか？」

零「2人っきりの時はそうしろって言われましたから。嫌なら元に戻しますが」

高橋「嫌じゃありません！すごくいいです！」

零「なんか洋子さん反応が可愛いですね」

高橋「かかかかかかかか可愛い？」

ショートしました。

零の鈍感野郎の恋バナは別のお話し。

須川サイド

七迷。

あいつとの短いけど長い思い出はこの先死神になることに思い出す
だろう。

だが、俺は死神であることをもう迷わない。

俺は死神としての行動が正しいのかずっと迷ってた。

七迷のような女の子の泣き顔を見たくない。

????「しゅぎゃわさーん！」

はっ？

須川「な、七迷。お前どうして？」

七迷「ちゃんと噛んだことに触れてくださいよー！」

須川「その前に状況を説明しやがれ！」

七迷「そうですね。説明します」

須川「頼む」

シリアスパート突入

七迷「あれは紀元前7777年前」

須川「何を説明する気だ!？」

七迷「分かりました。前置きは抜きにします。その後」

――

七迷が消えた後

七迷サイド

七迷「ここはどこですか?」

机が沢山並んでいるし、

七迷「教室?」

確か

七迷「須川さんに切られて」

死ねた。いや、死んでしまった。

七迷「ここが死後の世界?この教室が地獄ってことですかね?」

???「そんなわけではないでしょ」

誰かいるみたいですね。

???「教室が地獄つてのは同意見だけどね。まあ学校なんて行ったことは無いからね」

七迷「あなたは誰ですか？もしかして閻魔大王様ですか？」

???「違う違う。文化圏が違うよ。どちらかと言うと良いか悪いかは別として神様だ」

七迷「てことは悪い神様。邪神ですね」

???「正解。悪戯の神口キ様だ」

七迷「でも、口キって男性じゃ」

口キ「彼も言ってたけどね。それは間違いだ。さっき君が言ってた閻魔大王も女だよ」

そんなこと初めて知りましたよ。

七迷「それで口キさんが何のご用ですか？」

口キ「生きたくないか？」

七迷「えっ？」

口キ「だから生きたくない？迷い鏡としてだけど」

七迷「そんなこと出来るのですか!？」

ロキ「今回に限って特別に裏技のような方法があるからね」

七迷「代償は何ですか？」

ロキ「用心深いね」。無いよそんな物」

七迷「じゃあタダでやってくれるのですか!？」

ロキ「うん。そうだよ。私は面白いことに投資を惜しまないんだよ」

七迷「方法は？」

ロキ「ただ強く生きたいと願うだけさ」

七迷「それだけで」

ロキ「だから裏技なんだよ。君が七迷って名前だからね。七迷しち迷い 死地迷い。この名字だから迷い鏡になったんだと思うし」

七迷「私が迷い鏡になるのは決まってるんでしょっか？」

ロキ「別にそんなことないよ。だって君の家族はなってるないし。やっぱり思いの強さだね。だからこそ今回の裏技が出来るわけだし」

七迷「思いの強さ」

ロキ「じゃあ願って。生半可な気持ちだと本当に閻魔大王に会うこととなるよ」

七迷「分かりました」

ロキ「目を瞑って願いな」

生きたいです。

学校に生きたい。

友達と遊びたい。

須川さんに会いたいです！

目を開くと林にいた。

ロキ「成功だね」

ロキの声はするが姿は見えない。

ロキ「君の四肢に付いてる輪は零が作った怪異を実体化する物だ。
どんな人にも君は見えるよ」

見てみると灰色なりリングが付いてる。

ロキ「君が天国か地獄に行けるのは須川亮が死んだ時だ。彼のことを
考えてたね？」

七迷「そ、そんなことは！」

ロキ「まあいいや。あの教室に来てから1日が経っているから須川
の所に行つてきな。文月学園に通えるように零に頼んだから」

七迷「でも私小学生ですよ」

ロキ「知識は高校生並みだから平気でしょ？」

七迷「高2辺りまでなら」

ロキ「ちょうどじゃん」

七迷「それではありがとございました」

ロキ「感謝するなら楽しませてね」

現在

七迷「ということがあったのです（須川を思ったことは話してませ
ん）」

須川「そうか。良かった。本当に良かった」

七迷「須川さん泣かないでくださいよ」

須川「悪い悪い。すごく嬉しくて」

七迷「そうですか。あ、そうだ須川さん」

須川「なんだ？」

七迷「須川さん蕩れ」

なんだそれ？

須川「どういう意味だ？」

七迷「教えてあげません」

これが今回のお話し。

強化合宿4日目（後書き）

バカ日誌 全体

姫路瑞希

『他のクラスの人と勉強することで良い刺激が得られました。伸び悩んでいた科目についての学習法や使いやすい参考書について教えてもらったので、今後は更に頑張って行きたいです。』

教師のコメント

姫路さんは全体的にそつがなくこなしているように見えたので苦手な科目があるなんて驚きました。本来なら教師がなんとかしないといけないのですが、無事問題が解決して良かったです。

島田美波

『勘違いだったなんて悩んだウチがバカじゃない！アキは絶対に殺す』

教師のコメント

文字から殺意が溢れ出てます。

吉井明久

『あまりにトラブルが多過ぎて驚いた。初日は意識を失って合宿所に運ばれたので記憶がない。ついてそうそう覗きの犯人だと疑われ。そして最終日に美波に殺されかけて意識を失ったので記憶がない。』

教師のコメント

そうですか。

須川亮

『これから七迷には今まで出来なかったことをやらせてやりたいと思う。』

教師のコメント

七迷さんは新しい友達ですね。仲良くしてあげてください。

召喚獣保管計画？（前書き）

「IS カオスに原作ブレイク」が書き飽きたので久しぶりに投稿

召喚獣保管計画？

学園長室

零「おい。俺がいない間に何があった？」

藤堂「私も居なかったから分からんね」

零「お前技術開発の責任者だよな？お前が離れるのが一番マズいだろうが！」

どうしてこんなに騒いでるかと言つと。

召喚獣が暴走しやがりました。

Fクラスで召喚したところ俺と明久以外の召喚獣が勝手に動きます。

つまりアニメ版の原作です。

というわけで

藤堂「あんた達2人でバックアップのスイッチを押してくるさね」

零「教師が行けばいいだろうが」

藤堂「教師の召喚獣も暴走しちゃったんだよ」

あれ？

藤堂「だから設定をいじくっているあんた達の召喚獣が一番なんだよ」

零「報酬は？」

藤堂「あんたには強化合宿と同じで更衣室を男子に戻してやるよ」

零「怪異に対してちゃんと対処しただろ！」

藤堂「活躍したのは須川じゃないか」

零「あの実体化する装置作ったの俺だぞ！」

藤堂「対処した怪異を実体化させただけだろ」

零「じゃあ須川への報酬はなんだよ？」

藤堂「七迷の転入などの手続きや資金の援助だよ」

零「はあー。分かった。明久にも報酬を用意してやれよ」

藤堂「もちろんさね」

――――

高橋「それではこの排気管からサーバー室に侵入し、スイッチが2つあるので同時に押してください」

零「俺の召喚獣は実体のある物は触れないんだが」

高橋「それについては問題ありません。腕輪を使い『キメラ』を使ったのち、『ダブル』を使ってみてください」

零「やってみるか」

零・明久「サモン」

零「それじゃあ『キメラ』」

合体した召喚獣はナイフとピストルを持った目の死んだ少年。

明久「次に『ダブル』」

召喚獣が分かれ、ナイフを持った髪が斑模様の少年が現れる。

零「傑作だな」

明久「戯言だよ」

明久そのネタ知ってたの!?

零「雄二。オペレートを頼む」

雄二「任せろ」

藤堂「そんじゃあ頼んだよ」

零「明久行くぞ」

明久「うん」

排気管にGO！

雄二「零そこを右だ」

姫路「明久くんはそのまま真っ直ぐです」

明久「なんか迷路みたいだね」

零「防衛の一つだろ」

雄二「零。そこを左に曲がると」

姫路「明久くん。二つ目の右に」

零「左か」

明久「二つ目の右ね」

雄二・姫路「毒の沼がある（あります）」

零・明久「イダダダダダ！」

雄二「進路を修復する」

零「言っのがおせえよ雄二！」

雄二「お前が何も考えずに進むのが悪いんだよ」

零「やるのか？」

雄二「上等だ！表出る！」

秀吉「お主ら何をしておるのじゃ！」

土屋「……………マズい。敵が来る」

零「敵か。ならいつちよ殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」

明久「雄二！秀吉！ムツツリーニ！」

零「お前の相手はこいつらか。俺の相手はと」

船越女史。大島教諭。福原教諭。

零「全員教師って差別し過ぎだろ！悪意しか感じねーよ！」

雄二「零の御冥福を祈ろう」

零「縁起でもねーこと言うな！」

明久「みんな止めさせてよ！」

零「グホッ！教師レベルのフィードバックはキツイ」

明久「ギヤアアーーーーー！」

零「明久！」

姫路「明久くん。やられました」

西村「戦死者は補習！」

残り83点。このままじゃ補習。

零「一か八かだ！補習になってたまるか！」

最後の攻撃が当たる瞬間。

零「『キメラ』解除！『ボックス』発動！」

攻撃をネジで受けとめる。

教師の召喚獣がネジで磔になる。

そこに髪が黒く、学ランを着た零の召喚獣が立っている。

零「『教師様の召喚獣って』『確かフィードバックってあったな！』

『まあ、あつちから攻撃してきたんだし』『ボクは被害者だ』『』

雄二「なんだ今の！？」

零「『ボクは誰よりも弱さを知っている』『だから先生達の弱点を知っているんだよ』『』」

雄二「試召戦争の時に使えるな」

零「『狙って出せるわけじゃないからね』『それに見てみな』『』」

教師の召喚獣は消えずに点数も変わっていない。

雄二「どういうことだ？」

零「『ご覧の通り点数が減らないんだよね』『ボクの点数も減らないけどね』」

雄二「なるほど」

零「『それじゃあ、ボクは回復試験を受けてくるよ』」

召喚獣保管計画？（前書き）

前回、バカテスト忘れてました。

歴史

第二次世界大戦中にドイツが使用した爆撃と航空機をもちいた戦法はなんでしょう？

姫路

電撃戦

教師のコメント

正解です。

明久

ガンガン行こうぜ！

教師のコメント

命大事にしてください。

零

永続トラップ『最終突撃命令』発動！

教師のコメント

カウンタートラップ『神の宣告』発動です。

召喚獣保管計画？

零「やっと終わったわ」

雄二「お疲れ」

零「つか、キツ過ぎたる教師の召喚獣って。『大嘘憑き（オールフィクション）』が発動しなかったら俺も補習室だったぞ」

雄二「そうだな。一つチート臭いが対処法がある」

――――

ピンポーン！

ピンポーン！

ピンポーン！

原作通り小学生レベルの問題で点数を稼いでる。

雄二「これなら零の保険体育以外点数が取れる」

島田「小学生レベルで点数が取れないって」

零「思ったんだが、お前らも受けて白紙で出せばいいんじゃないの？」

藤堂「それは無料さね」

また原作と違うし。

藤堂「暴走とともにこちらから点数が変えられなくなっていたからね」

零「いい案だと思ったんだが」

ブー！

零「おい明久。何間違ったんだ？」

明久「え、えっと」

大化の改新は何年？

零「ねー。こいつのこと殴っていいかな？」

雄二「普通あれだけ重要な問題忘れるか？」

明久「だって、結局出なかったし、どっちがどっちか分からなくなっちゃったんだよ！」

藤堂「もうこれぐらいでいいさね。充分点数取っただろ」

零「じゃあ、高橋女史。総合点でフィールドを」

高橋「承認します」

零・明久「サモン！」

総合科目

零 & 明久

13794&8835

優子「1万点オーバーって」

零「高橋女史。大丈夫なんですか？」

高橋「何がですか？」

零「1万点オーバーのフィードバックって、ショック死するでしょ」

高橋「……………（ダラダラ）」

零「変な汗かいてますよ」

高橋「学園長大丈夫ですよね？」

藤堂「こっちからは設定は変えられないよ」

高橋「どうするんですか！」

藤堂「我慢しな」

高橋「そんな！」

雄二「排気管に侵入を開始した」

高橋「ちょっと待ってくださいよ！」

雄二「零、そのまま真っ直ぐ行くと」

零「真っ直ぐか」

雄二「毒の沼だ」

零「イダダダダ！いい加減にしろコラ！お前絶対殺す」

明久「零。この状態での腕輪はどうなるか次ので試してみようよ」

零「そうだな。使ってみるか」

潤「敵来たぞ」

零「てめえら話聞いてたたる！タイミング良過ぎだ！」

明久「僕は根本くんと小山さんだけどそっちは？」

零「常夏変態だ。はあ、腕輪をこいつらに使うのはもったいないな」

明久「確かに」

零「ま、しゃあない使ってみるか」

明久「じゃあ、僕から」

根本の召喚獣が明久の死んだ目をした召喚獣に攻撃を仕掛けた瞬間にメイドが現れて根本のぶっ飛ばした。

メイドはそのまま小山の召喚獣を倒し消える。

明久「お助けキャラ？」

雄二「何故にメイド？」

零「俺の能力はと」

零の召喚獣の束ねていた髪はオールバックにグラスンはメガネに服がスーツにナイフがハサミらしき物に変わる。

零「装備の変更か」

常夏変態コンビは14枚の刃によって八当分になる。

霧島「……………零の能力は吉井の能力と違って、点数消費が無いみたい」

工藤「なら、ずっと使ってられるね」

零「さて、先に行くぞ」

雄二「また敵来るぞ」

零「早っ！」

明久「わっ！教師の召喚獣だ！」

零「なら俺は生徒かな」

優子「確かに生徒みたいよ」

零「今回は楽だな」

優子「100体はいるみたいだけど」

零「俺が楽だったこと無くね!？」

明久「しょうがないよ。零だし」

零以外「確かに」

零「何故に納得する!」

零以外「零が苦労するのはいつものことだし」

零「はあー。もういいや。100体しか居ねえけど、一騎当千見せてやるよ!」

明久「僕も教師相手に頑張るよ」

敵の召喚獣が零と明久の召喚獣に突撃してくる。

零「バーカ」

バラバラバラバラ

生徒の召喚獣がバラバラになる。

零「曲弦系はこの召喚獣でも使えんだよ。範囲は狭いけど」

明久「課題の恨みだ！」

教師の召喚獣に目潰し。

その頃、職員室

教師「目、目がああー………！」

ムスカの名言を吐き、のたうち回っていた。

戻ってサーバールーム前

鉄人「吉井。今、課題の恨みと聞こえたんだが」

明久「あははは。気のせいですよ」

鉄人「ならいいが。おっ、俺の召喚獣が来たぞ」

明久「補習の恨みを食らえ！」

鉄人「嘘だ。そういうことで吉井………歯をくいしばれ」

明久「すみませんでした！」

雄二「本当に鉄人の召喚獣が来たぞ！」

明久「間に合え！」

パン！

明久の召喚獣の発泡し、

鉄人の召喚獣の頭が吹き飛んだ。

鉄人「吉井、貴様にはみっちり補習してやる」

バタツ

秀吉「保健室に運ぶのじゃ！」

雄二「俺が運ぶ！死ぬなよ鉄人！」

鉄人「うっ、……………お、俺を舐めるな」

高橋「休んだ方がいいですよ西村先生」

鉄人「お、俺は倒れるわけにはいかん！戦死者を補習室に連行するまでは！」

雄二「迷惑な執念だ！」

零「やっと終わった」

潤「何がだ？」

零「100体召喚獣倒したんだが」

工藤「えっ、そうなんだ」

土屋「……………見てなかった」

零「なんか扱い酷くね」

そんなこんなで

その後も敵と戦ったり、毒沼に入ったり、敵と戦ったり、毒沼に入ったり、毒沼に入ったり、毒沼に入ったり、敵と戦ったり、毒沼に入ったり、毒沼に入ったり、教師の召喚獣と戦ったり、毒沼に入ったり、毒沼に入ったり、毒沼に入ったり、雄二達の召喚獣と戦ったり、毒沼に入ったりで点数が1000点もねー。

つか、毒沼率高くね？

まあ、雄二達は補習室送りにしてやったけどね（ニコッ）！

零「こっちはサーバー室に到着した」

明久「僕も到着したよ」

零「スイッチを探すぞ」

明久「うん」

姫路「二人共、早くしてください！でないと」

高橋「私達が来ます！」

明久「姫路さん！」

零「高橋女史！」

マジかよ。

明久の所に姫路の召喚獣。

俺の所に高橋女史の召喚獣。

零「やっぱり、俺の方が相手キツイじゃねーか！」

明久「ど、どうしよう?」

零「全力で逃げながらスイッチ探せ！」

くっ、今までのフィードバックで上手く動かねえな。

零「明久！腕輪は後何回使えるんだ？」

明久「使えて一回だけ」

零「ギリギリになったら使え！点数が0になるよりはマシだ！」

明久「分かった！」

曲弦系で罾を仕込みながら逃げる。

零「ちつ。鞭を振りまくってるせいで位置がバレて足止めにしかねーか。だが、それでいい」

今はそれでいい。

生き残ることだく考えろ！

明久「あつた！スイッチあつたよ！」

零「悪い！こつちはまだだ！」

姫路の召喚獣が明久の召喚獣に迫る。

明久「ここは守りきる！」

明久は腕輪を発動する。

全身が真っ赤な女が現れ、姫路の召喚獣と戦う。

明久「さつきと違う!?!」

でも、

明久「さつきより強い？」

真っ赤な女性は姫路の召喚獣をおしている。

明久「このまま行けちゃう？」

この人強過ぎ。

赤い召喚獣「飽きた。帰る」

そう言つて真つ赤な召喚獣は消えた。

明久「はいっ？………はいいいい……！」

えっ？ちよつと待つてどうすればいいの？

明久「もう点数100点もないよ！」

零「スイッチやつと見つかった……！」

明久「早くして……！」

零「きよ、距離が」

スイッチとの距離は結構離れている。

零「ちつ明久、ボタンを押せ！」

明久「でも！」

零「押せ！」

明久「う、うん」

零「ダツシャアア……！」

ブ………！

姫路の召喚獣の攻撃が寸前で止まった。

システム停止

明久「助かった。でも、どうして？」

零「ケータイ電話って言うんだ。投げたアレ」

藤堂「よくやったねアンタ達」

零「あ、そくだ。補習室でのびてる天宮教諭は今回の原因だ。鉄人にも捕獲させとけ」

藤堂「いつの間に調べたんだい？」

零「雄二に補習の代わりとして監視データの確認を頼んでおいたんだよ」

藤堂「分かったよ。高橋先生修理を手伝いな」

高橋「はい」零「明久。飯でも食いに行くか」

明久「そうだね」

こうして俺の長い1日は終わった。

補習室

戦死者『哀川と吉井の奴許さねえ！』

戦死者は補習でまだまだ1日が続く。

召喚獣保管計画？（後書き）

感想をください。

バイト騒動？（前書き）

感想をください。

特別コーナー

鉄拳先生の人生相談室

零「このコーナーでは、鉄拳先生こと28号じゃなくて、西村先生が生徒からのお悩みを解決してくれるという物です。では、鉄拳先生」

西村「哀川。遠回しに鉄人と言っただろ」

零「そんなことゆり早く自己紹介」

西村「くっ。私がこのコーナーを受け持つ鉄拳先生だ。諸君らの悩みに答えよう」

零「そして、アシスタント（おちよくり役）のゼロっちです」

西村「本当にアシストするんだろうな？」

零「はい！ガンガン（ちよっかいを）して行きます！」

西村「心配なんだが」

零「前回の恋愛テクニク講座は大成功でしたよ。いくら儲けたと思ってるんですか」

西村「はあー」

零「それでは一つ目の相談にいきましょうー!」

三年生T村Y作さんからの相談

鉄拳先生、ゼロっちさん、僕の悩みを聞いてください。僕には好きな子が居ます。

その人はとても可愛らしく人気があるのです。そのK下H吉さんはどうやら戸籍上男のようなのです。これは同性愛者になってしまうのでしょうか？先生、僕はどうしたら良いのか教えてください！

鉄拳先生とゼロっちさんのアドバイス

零「死にやがれHENTAI」

西村「どうしたいいきなり？」

零「いや、気に食わねえ奴が過りまして。気を取り直して、鉄拳先生。いきなり凄じ質問ですが、お答えをどうぞ」

西村「正直このコーナーを受けなければ良かったと後悔してる」

零「気持ちはこちらからですが、教師と受けとめて上げてください」

西村「君の好きになった相手には双子の姉がいたはずだ。容姿に惚れたなら彼女に思いを告げることだ。容姿でなく内面に惚れたなら……良く考え直すことだ。一部の間では『彼は第三の性別【秀吉】だから同性愛じゃない』という説があるが、決して惑わされないように。君が健全な学校生活を送れることを祈ってる」

零「それは双子の姉に失礼じゃないか？双子の姉はそいつの代わりじゃないんだから」

西村「確かにそうだな。すまなかった。だが、どうすればいいと思う？。」

零「俺がいい闇医者紹介するんで、そこで整形してから出直してこい」

西村「相変わらず酷いな」

零「さて、次行きましょう」

2年生K保T光さんの相談

最近、寝ても覚めても頭から離れない人が居ます。彼ーY井A久くんが笑う姿を見ていると僕まで幸せになり、彼が沈んでいると僕まで悲しくなります。彼は同性なのですが、この気持ちは恋愛感情なのでしょうか？

鉄拳先生とゼロっちゃんのアドバイス

西村「ここ最近頭を打ってないか？記憶にないとしても念の為病院で検査を受けることを推奨する。同性愛云々はその後だ」

零「それでは彼にもさっきの変態と同じように闇医者を紹介します。」

西村「普通の病院に行ってくれ」

零「腕は凄くいいんですよ。ただ金が高いだけで」

西村「闇医者だろ」

零「はあー。顔に黒人の肌を移植した黒い」先生に患者送ろうと思つたのに」

西村「その先生、直訳すると凄い人だぞ！」

零「話を変えて次の相談です！」

2年生S水M春さんの相談

私には1年生のころからずっと好きなお姉様が居ます。最近そのお姉様が悪い男に騙されています。どうしたらその男を殲滅出来るのか教えてください！

西村「貴様らには同性愛以外の悩みは無いのか！」

零「退室してしまった鉄拳先生には俺が常備してる頭痛薬と胃薬をプレゼント！今回も皆さんも買えるようにセットで販売します！」

今回もバカ売れしたよ。

バイト騒動？

零「明久、雄二。お前らにはここでバイトをしてもらおう」

雄二「なんだいきなり」

明久「なんで僕達がそんなことしなくちゃなんないの？」

零「強化合宿の時に俺のケータイ壊したのはどこのどいつだ？」

明久・雄二「……………」

零「はい。目を逸らすな」

明久「実際に折ったのは雄二だから僕は関係ない」

零「連帯責任だ。異論は認めん」

明久「分かりました」

雄二「だいたいどんなバイトなんだ？」

零「喫茶店」

明久・雄二「！！！？」

零「なんで驚いてんだ？」

明久「零が持ってきたバイトにしては普通過ぎるから」

雄二「ああ。俺はてつきり新薬の実験動物あたりかと思った」

零「お前らが俺をどう思ってるかよく分かった」

秀吉「お主らは何の話をしてるのじゃ？」

土屋「……………気になる」

零「丁度良かった。お前らもバイトしねえか？」

秀吉「バイトかの？」

零「5人までの喫茶店のバイトなんだが、時給が結構良くてな」

秀吉「いいかもしれんの。役の幅も広がりそうだし」

土屋「……………新しいカメラの資金になる」

零「決まりだな」

—————

バイト当日

零「こんにちは。哀川零です。よろしくお願いします」

ちゃんと初対面の人には挨拶から入ろう。

店長「ああ……………。よく来てくれたね……………。こちらこそよろしく頼む

よ……」

駄目だ。貧乏神が見える。

秀吉「零。その手に持つてる塩はなんじゃ」

零「恐山メーカーの浄めの塩だ。今から除霊する」

明久「駄目だよ。気持ちは分かるけど人間だから」

店長「ちよつと制服を取ってくるからちよつと待っていてくれ……」

店長は扉の奥に消える。

零「だいたいどうしたんだあの人。富士の樹海に向かいそうな勢いだったぞ」

雄二「噂で聞いたんだが、奥さんと娘さんに逃げられたらしい」

零「なるほど、俺達は奥さん達が帰ってくるまでのつなぎか」

明久「けど、僕達以外にアルバイトがいなくて変じゃない？」

土屋「……この前来た時はバイトの女子が何人かいた」

零「来たことあるのか？ああ、そのバイトの子を撮りにか」

土屋「……フルフルフル」

雄二「まあ、なににせよ仕事は仕事だ。詮索は後にしようぜ」

店長「待たせたね……。これが君達の制服……。サイズが合わなかったら言ってくれ……………」

明久・雄二・土屋「サイズが合いません」

零・秀吉「性別が合いません」

殴っていい？こいつ全然駄目だ。目が節穴過ぎる。

店長「あれ？おかしいな……。さっき目測で測ったのに……………」

明久「僕は少し小さいだけですが、雄二とムツツリー二じゃなかった。坂本さんと土屋くんのサイズが明らかに合ってます」

店長「おかしいな。坂本くんがS、吉井くんがM、土屋くんがEロじゃなかったしだと思ったんだけど……………」

前言撤回。こいつらの性癖を一発で見抜きやがった。

土屋「……………Eロになんて興味ない」

雄二「なに！？」

零「ダウト！」

明久「嘘だ！」

秀吉「嘘は騙せる範囲でつくもんじゃぞ」

土屋「……………フルフルフル」

店長「ああ。うっかり制服と性癖を間違えちゃった」

秀吉「じゃから、わしは性別が合っていないのじゃ」

零「秀吉はいい！なんで俺まで女の制服なんだ？」

店長「いや、吉井さんと坂本さんから昨日電話があって哀川くんは女の制服にしてくれと頼まれたから」

零「おい。どこ行くんた2人とも？」

明久・雄二「ビクッ」「」

零「ちょっと待っててくれ」

明久と雄二の襟を掴んで引き摺ってく。

ドナドナー

ボタン！

隣の部屋に行つて。

しばらくお待ちください。

ボカスカボカスカボカスカ！

ボタン

零「店長。代わりの制服はないんですか？」

秀吉「中で何があったんじやろうか」

土屋「……………恐ろしくて聞けない」

店長「すまないね。用意してないんだよ」

零「しょうがない。女ので我慢するか。雄二とムツツリー二は交換すれば大丈夫だろ」

土屋「……………雄二は？」

零「大丈夫。もう少しで起きるんじゃないか。生きてればだが」

秀吉「今さらりと恐ろしいことが聞こえたぞい！」

明久・雄二「うう」

土屋「……………良かった。生きてた」

明久「ここはどこ？」

雄二「僕は誰だ？」

秀吉・土屋「！！！！」

ボタン

零が明久と雄二を連れて隣の部屋に戻る。

ガスッ！

ボタン

明久「あれ？なんでこんなところで寝てるんだろ？」

雄二「俺は一体？」

零「バイトに来てたんだろ。早く制服に着替えるぞ」

明久「そうだね。時間かけるわけにいかないし」

雄二「どうしたんだ2人とも？顔が青いぞ」

秀吉「な、なんでもないぞい」

土屋「……………俺達は何も見てない」

明久・雄二「????？」

—————

秀吉「なんだか学園祭の時みたいしゃの」

雄二「喫茶店に縁があるな」

零「確かにな。2人とも接客頑張りよ」

ボタン

明久とムツツリーニが着替え終わって出てくる。

明久「零は接客しないの？」

零「どこかの誰かさんが俺の制服を女物にしなければそれもいいか
と思ったんだがな」

明久・雄二「「ヒュー」」

零「口笛で誤魔化すな」

秀吉「では、わしらも着替えてくるとするかの」

雄二「そうだな。行くか？人ととも」

明久「何を考えてんの雄二！秀吉と零と一緒に着替えるなんて！」

土屋「……………万死に値する」

零「ちよつと待て。秀吉は知らんが俺は男だ。殺すぞ」

秀吉「わしも男なのじゃ！」

明久「それは戸籍上の話でしょ！」

土屋「……………秀吉の性別は秀吉。零の性別は男女比率5対5」

零「アホらしい」

ボタン

ガチャッ

俺、秀吉、雄二は更衣室に入り、鍵を閉める。

明久「雄二。もし行動を改めないなら」

零「ドアとか壊して突入は止めるよ。弁償することになるから」

明久「霧島さんにこの状況を包み隠さず暴露する」

雄二「俺は廊下で着替えよう」

明久「よし。僕達は店長のところに行くから」

秀吉「ファスナーが上がらんのお。すまぬ。雄二上げてくれて、雄二はどこに行ったのじゃ？」

零「アイツも命が惜しいんだよ」

秀吉「それじゃあ零。頼むぞ」

零「構わないぞ。教えてほしいんだが、この制服はどうやって着るんだ？」

秀吉「そんなことも分からんのか。今までどうやって女物の服を着てたんじゃ」

零「そんな機会普通は滅多にないからな」

滅多にもありません。

はあー、着替えの時点でこれって、先が思いやられる。

バイト騒動？（前書き）

バカテスト 英語

次の言葉を正しい英語に直しなさい。

『ハートフルラブストーリー』

姫路瑞希

「heartfull love story」

教師のコメント

正解です。映画や本の謳い文句ですが、heartの部分の間違える人が良くいます。

島田美波

「hurt full rough story」

教師のコメント

hurt ケガ

full いっぱいの

rough 荒っぽい

story 物語

意図的に間違えたのではないかと思う程綺麗に間違ってますね。このハートフルラブストーリーを演じるのはあなただけだと思います。

霧島翔子

「hurt full rough story」

教師のコメント

もう1人いました。

哀川零

「hurtful rough story」

教師のコメント

訂正します。結構居るみたいです。

バイト騒動？

着替えが終わって明久達のところに行くと

零「お前ら何やってんだ？」

ドアの前にへばりついていた。

明久「あれどうしたらいいだろ？」

指差した先には生気の無い店長が。

零「どうもこうも声かけるしかないだろ。後ムツツリーニ、写真を撮るなら金払え」

明久「そこは撮るのを止めるところでしょ」

零「金さえ貰えればそれくらいいい。報酬は俺の写真の売り上げの半分だ」

土屋「……………交渉成立」

零「OK。明久、ちょっと会話してこい」

明久「分かったよ」

ガチャッ

明久「失礼します」

店長「……………」

返事が無いただの屍のようだ。

零（リハビリに軽い日常会話からしろ）

明久（了解）

明久「よし、あの店長？」

店長「ん……？ああ、なんだい？」

明久「今日はいい天気ですね」

店長「ああ。そうだね。お父さんってウザいよね」

言葉のキャッチボールが成り立たねえ！

明久「お客さん。いつぱい来るといいですね」

店長「僕の可愛い娘はね……。一歳になるまで『お父さん大好き』だったんだよ」

明久「それは記憶の捏造です」

駄目だ。末期患者だ。

明久（どうしよう。もう挫折そうだよ）

零（諦めるな。相手の興味がある話をしろ）

雄二（娘さんについてはどうだ）

秀吉（それなら会話になるかもしれんの）

明久「あの」

店長「……うん？」

明久「店長の娘さんってどんな」

店長「五秒やる。神への祈りを済ませろ」

店長が一瞬で明久の首にナイフを押しつける。

やべえ。稀に見る人外の動きだ。

明久「店長待ってください！落ち着いてください！だいたいそのナイフどこから出したんですか！？」

店長「あ、ああ……。君はアルバイトの子だったよね？僕の可愛い天使を誑かしに来た輩じゃなかったよね？」

明久「そ、そうですよ。当たり前じゃないですか。あはははは」

明久（ねえ、みんな。あの店長はアウト？セーフ？）

雄二（ワールド負け）

ノーゲーム
零

明久（そういえば言うのが遅れたけど2人とも制服が凄く似合ってるね）

零「このタイミングで言うことかバカ久！」

ボタン！

店長「ディア マイ ドーター！」

明久のバカな発言にドアを開けて突っ込んだら、店長が俺と秀吉に襲い掛かってきた。

零「なんだいきなり!?!」

明久「店長！なにとち狂ってんですか!?!」

店長「ディア マイ ドーター！」

秀吉「駄目じゃ！言葉が通じないのじゃ！」

雄二「面倒だ！取り押さえろ！」

零「無理だ！速過ぎて当たらねえ！」

ドン！

零「雄二！大丈夫か！？」

雄二「なんとか防いだ。くっ、鉄人クラスだ」

零「秀吉！『父親に日記を読まれた思春期の女子』のセリフを大声で！」

秀吉「分かったのじゃ！『お父さんなんか大嫌い！』」

店長「そうかい。それじゃあ今夜はお父さんと一緒にお風呂に入る
う」

零「駄目だ会話が成り立たねえ！しょうがねえな！来やがれ変態！」

店長「ディア マイ ドーター！」

零「悪霊退散！」

恐山メーカーの浄めの塩で目潰しをし、象用睡眠薬を静脈注射乱れ
撃ち！

零「はあー。堕ちたか」

――

明久「で、どうする？」

零「どうするもこうするも店長は当分起きないぞ」

秀吉「わしらだけで店を回すのは無理があるじゃろ」

雄二「外に臨時休業とでも貼っておこう」

零「そうだな」

カランコロン

客か。悪いが休みと言って帰ってもらおうか。

明久「いらっしやいませ！」

って、明久何やってんの!?

客「良かった。やってたんだ。これで時間潰せるね」

客「ホント、良かった」

零（何やってんだ明久!）

明久（ご、ごめん。頭の中でシミュレーションしてたらお客さんが来て、つい）

秀吉（困ったのう。追い返せる雰囲気じゃないぞい）

零（しゃあない。俺がメニュー見て、適当に作るから接客してこい）

明久あめと

零（まあ、気にするな。学園祭の要領で頑張れ）

明久（うん！頑張るよ）

零「さて、作るか」

明久「ご注文はにやんでしょうか？」

あ、噛んだ。

明久「す、すいません」

また、噛んだ。

客「君、バイト始めて？」

明久「は、はい！」

客「気にしないから頑張って」

明久「はい。ご注文はなんでしょうか？」

お、言えた。

客「それじゃあ、ミルクティーとコーヒブラックで」

明久「ご注文を繰り返しましゅ。ミルクティーとコーヒをブラックでしゅね」

2回噛んだ。

明久「失礼します！」

明久が逃げかえってきた。

明久「僕には高度過ぎて無理だったよ」

零「あのミスは好印象を得られるから大丈夫だ」

明久「本当？」

零「ホントだからまた客来たから行ってこい。次は嘸まないようにな」

明久「うん。今度は失敗しないよ」

さて、ミルクティーとコーヒーマグだな。

明久「あつ！変態先輩！」

常村「常村と夏川だ！お前の記憶力はどうなってんだ！」

別にいいんじゃない。

さてと紅茶とコーヒーマグはこれでいいな。

後はと、あつ！

零「秀吉。どうやらミルクが切れてるみたいだから明久と注文した客に伝えてきてくれ」

秀吉「分かったのじゃ」

客が増えてきたな。

秀吉「すみませんがお客様。注文されたミルクティーですが、ミルクが切れてしまいアイスティーになってしまいますが、よろしいでしょうか？」

客「それならそれでいいわ」

秀吉「かしこまりました。すぐにお持ちいたします」

さすが秀吉、完璧な受け答えだな。

常村「俺はアイスコーヒー」

夏川「俺はアイスミルク」

明久「すみませんお客様。現在ミルクが切れておりますので」

ちゃんと明久も出来て

明久「アイスでよろしいでしょうか？」

なかった。

夏川「それってただの氷だよな」

明久「では少々お待ちください」

常村「話聞けよ！」

ま、いつか。

可哀想だから水をサービスしとくか。

常村「このコーヒーは何をブレンドしてあるんだ？」

明久「はい。ホットコーヒーとアイスコーヒーをブレンドしております」

常村「その2つを混ぜたらダメだろ！？ただぬるくなるだけだろ！」

明久「備え付けのタバスコとつまようじはお好みで入れてください」

常村「居ねえよ！そんな特殊な好み持った奴なんて居ねえよ！」

明久「ところでお客様」

常村「あん。なんだよ？」

明久「今回はウェイレスに手を出さないんですね」

常村「責任者を出しやがれ！」

零「私が責任者ですが。何か問題でも？変態共」

常村「問題もなにも今罵倒されたんだが」

零「襲われた身となればこの対応が当たり前じゃないでしょうか？
また埋めますよ」

常村「お、お前」

夏川「可愛い」

零「えっ！嘘！？何その反応！？」

明久を超える斜め上の解答だぞ！

夏川「もって罵倒してくれ」

零「止めてください！警察呼びましたよ！」

常村「早っ！警察呼ぶの早っ！」

夏川「警察なんか俺の愛は止められない！」

零「お連れの方！なんとかしてください！」

常村「お、おつ。落ち着け夏川」

ピーポーピーポーピーポー

変態共は警察に連れていかれました。

常村「えっ！？俺も？」

バイト騒動？（前書き）

バカテスト 化学

（ ）を埋めなさい。

『分子で構成された個体や液体の状態にある物質において、分子を結集されている力のことを（ ）力という』

姫路瑞希

『（ファンデルワールス）力』

教師のコメント

正解です。別名、分子間力といいます。

土屋康太

『（ワンダーフォーゲル）力』

教師のコメント

なんとなく語感で覚えたのが分かりました。残念ですが、それは登山家の間で働く力です。

吉井明久

『（努）力』

教師のコメント

先生はこの答えが嫌いではありません。

哀川零

『（100万馬）力』

教師のコメント

先生もアトムは見ていました。

バイト騒動？

カランコロン

明久「いらつしゃいませ」

姫路「こんにちは。明久くん。遊びに来ちゃいました」

明久「え。姫路さん」

潤「俺達もだ」

女子組入店

霧島「……………雄二。妻への隠し事は浮気の始まり」

雄二「はは。おかしいな。居るはずのない翔子が目の前に立っているんだが。呪いか？」

工藤「零くんはどこかな？」

明久「零なら厨房に」

島田「一応あいさつしとく？」

秀吉「零から伝言じゃ。厨房に来たらコ・ロ・ス そっじゃ」

島田「止めておいた方がいいみたいね」

秀吉「霧島にも伝言じゃ」

霧島「……………何？」

秀吉「バラしちまうが、雄二はお前へのプレゼントを買う為にバイトしてんだよ」

霧島「……………私にプレゼント。嬉しい」

雄二「何、勝手なこと言っつてやがんだ！」

秀吉「雄二は照れ屋なんだから、隠し事くらい大目に見てやらなきゃ」

霧島「……………うん。雄二が素直じゃないのは私が良く知ってる」

雄二「勝手なこと翔子に吹き込むな！」

秀吉「うるせえ！人生の墓場へのカウンターダウンを0にするぞ！」

優子「なんで伝言なのに会話が成立してるのよ？」

秀吉「それは秘密だ。最後に霧島。お前に今日1日雄二を好きに出来る権利を一万で売ろうと思うんだが」

霧島「……………買った」

秀吉「まいどあり」

雄二「物凄い早さで俺の人権が無くなったぞ！もうやってられるか！こんなバイ」

ヒュン

カスッ

厨房から何かが飛んできて、雄二の頬が切れており、後ろの壁にはバターナイフが刺さっている。

秀吉「次は当てる」

雄二「……………はははは！途中で仕事を辞めるのはいけないことだよな」

秀吉「そうそう。早く霧島を席に連れてけ」

雄二「了解した」

秀吉「伝言は以上じゃ」

明久「アドリブじゃなかったの!？」

秀吉「雄二達と違う席に案内するのじゃ」

雄二「なぜこっちの席を使わない!？」

秀吉「零が夫婦水入らずにしてやれと言っておったのでの」

霧島「……………零、いい人」

雄二「ちくしょう!もう好きにしる!」

秀吉「零が好き勝手やってるのはいつものことじゃろ」

――――

明久「ご注文が決まりましたらお呼びください」

姫路「オススメは何ですか？」

明久「えーっと、この前来た時にはパフェが美味しかったよ。零もいるし、どれも美味しいと思うよ」

潤「前に来たことあるのか？」

明久「うん2ヶ月くらい前にね。美波と2人つき（ゴキン）今手が外されたよ！」

土屋「……………秀吉。コーヒー溢れてる」

そっちにも被害が行ったか！

姫路「美波ちゃんと2人つきりですか？」

美波「そんなことある訳ないじゃない。ねえアキ？」

明久「そ、そうだよ。雄二と4人で来たんだよ」

バカ。足し算くらい間違えるな。

霧島「……………雄二。浮気は許さない」

雄二「今日の扱いは一段と酷いぞ！」

姫路「後1人は誰何ですか？」

明久「後1人は七迷ちゃんと（ボキッ）僕の手首に終止符が打たれた！」

島田「どうしてそんなバレバレの嘘しかつけないのよ！暦ちゃんの転校してきたのはつい最近だったでしょうが！」

姫路「えっ！？やっぱり嘘なんですか！？それじゃあ2人だけで来たんですね」

工藤「普通に嘘でしょ」

霧島「……………雄二。私は悲しい。雄二を失うことが」

雄二「なんで翔子が臨戦体制に入ってるんだ！？」

零「秀吉！そつちを止める！」

土屋「……………涙目で出て行った」

零「その可能性は予想外だった！ならムツツリーニお前が」

土屋「……………明久を殺るので忙しい」

零「お前も敵か！ちっ、俺が出る！」

明久達のテーブルに向かう。

零「潤、優子、愛子手伝わってくれて、なんで顔を赤くして倒れるをだ!？」

うわっ、カオス!

今は欲しくなかった状況。

店長「き、君たちお客様の前で何やってるんだ!」

零「店長目が覚めたんですね」

店長「私が気絶?してる間良くやってくれた」

すごい!普通の真面目な社会人に見える!

店長「ところで、気絶する前の記憶が無いんだが」

零「あはははは。きつと、頭を打って気絶したから記憶が少し無くなったんですよー(棒読み)」

あれは正当防衛だ。

だから俺は悪くないぞー。

麻酔(致死量)うっただけだもーん。

店長「そうか。頭を打ったのか」

零「そんなことより、止めるのを手伝ってください!」

店長「そうだな。後は私に任せる」

なんて頼もしいんだ。

久しぶりに誰かを頼る気がする。

カランコロン

清水「どうお父さん。少しは反省した？って、哀川零！なんでここに
いるんですか！」

店長「美春。ディア マイ ドーター」

そつえば親子でしたね。アンタ達。

さて、原作を思い出すとさっき行った店長を頼るといふ行いは撤回
した方がいいかもしれない。

だって、嫌な展開しか思いつかないんだもん。

美春「ああ！そこにいるのはお姉様！美春に会いに来てくれたんで
すね！」

店長「み……は……る」

店長が壊れたよ。ヤミヤミの実の能力者かと思うくらどす黒いオー
ラが見えるし。

店長「キサマが」

さて、これからどうするか？

店長「キサマが私の娘を誑かす女かーーーーー!!」

すげえ。ムツツリー二の速度を超えたぞ。

明久「店長、落ち着いてください！お客様の前ですよ！だいたい『娘を誑かす女』という日本語に疑問を持ってください!」

店長「ディア マイ ドーター!」

姫路「そんなことより明久くん!まだちゃんと美波ちゃんとデートしたことについての質問が終わってませんよ」

土屋「……………明久、覚悟」

美春「お姉様とデート?今日という今日は許しませんわ!みじん切りにしてあげます」

店長「ディア マイ ドーター!」

霧島「……………大丈夫。痛いのは一瞬だけだから」

雄二「なんで俺の処刑が開始されようとしている!」

よし。状況は良く分かった。

この最悪の状況から導ける最善策は、

零「明久!雄二!島田!店の外に逃亡しろ!」

明久・雄二・島田「……分かった」

言われた通りに明久達が逃げる。

それを姫路達が追っついていった。

ふうー。問題が出て行っただぜ。

零「えーっと、お客様。ご迷惑をおかけしました。(ニッコ)」

混乱を収める営業スマイル

結局、俺一人で店回しましたよ。コンチクショー！

まあ、奥さんに話つけてバイト代は増やしてもらったけどね。

明久の違和感（前書き）

バカテスト 政経

日本国憲法第76条『裁判官の職権の独立』について（ ）を埋めなさい。

全ての裁判官は（ ）に従ひ（ ）して（ ）を行ひ、この（ ）及び（ ）にのみ拘束される。

姫路瑞希

全ての裁判官は（良心）に従ひ（独立）して（職権）を行ひ、この（憲法）及び（法律）にのみ拘束される。

教師のコメント

大変よく出来ました。これは日本国憲法における重要な条例ですね。

吉井明久

全ての裁判官は（peer）に従ひ（peer）して（peer）を行ひ、この（peer）及び（peer）にのみ拘束される。

教師のコメント

憲法第76条が大変なことに。

土屋康太

全ての裁判官は（本能）に従ひ（脱衣）して（全裸体操）を行ひ、この（現行犯逮捕により警察の手）及び（手錠）にのみ拘束される。

教師のコメント

全ての裁判官に誠意のある謝罪を求めます。

哀川零

文月学園で日本国憲法が適用されるのはいつになるのだろうか。

教師のコメント

先生もそう思いますが、あなたも人のことを言えないと思います。

明久の違和感

零「ちっ、遅くなっちゃった」

たくぬらりひよんの野郎、召喚獣が暴走したから、直すついでにいじくるのはいいが、俺の仕事を増やすなよ。

さて、夕飯の買い出しも終わったし、早く家に帰らねえと。

バスローブを来た女性が現れた。

はい？

玲「あのう、ちょっとよろしいでしょうか？」

はっはー。いつも通り厄介事に巻き込まれたぜ。

周りの視線が痛い！

零「えっと、なんででしょうか？」

玲「このマンションにはどうやって行けばいいのでしょうか？」

地図を見ると、

零「ここなら知り合いの住んでるところなので分かりますよ。えっと、この道を真っ直ぐ行って、その後は~~~~で行けますよ」

玲「そうですか。ありがとうございました」

零「いえいえ。ところでなんでそんな格好をしてるんですか？」

玲「これには深い訳があるんです」

零「そりゃあ、その格好するには深い訳があったでしょう」

玲「私は久しぶりに弟と会うんです」

零「なんかそれっぽいですね」

玲「電車の窓に写った自分の姿を見るとまあ大変、汗だくでありませんか」

零「汗だくで弟に会うのはマズいですね」

玲「そこで、汗を吸収してくれるバスローブに着替えたわけです」

零「はい、そこがおかしいことに気が付きましょう」

玲「いけないんですか？急いで着替えたのに。しょうがないですね。着替えますか」

零「そう言っつてバスローブを脱ごうとする。」

零「ストップ！何脱ごうとしてるんですか！？」

玲「脱がないと着替えませんよ」

零「まさかと思いますが、バスローブにはどこで着替えたんですか」

「？」

玲「もちろん電車の中に決まってるじゃないですか」

零「アンタに羞恥心は無いのか!？」

玲「うるさいですね。常識がありませんね」

零「まさかこんな人に常識云々言われると思わなかったわ!」

玲「そろそろ遅いので向かわせてもらいます」

零「はあー、ちょっと待ってください。これでも着てください」

カバンから白衣を取出し渡す。

零「これを羽織れば少しはマシだと思っんで」

玲「何から何までありがとございました」

零「礼なんていいですよ。好きでやってるだけなんで。それじゃ」

俺はその場を後にした。

原作通り滅茶苦茶な人だった。

翌日

零「よお、明久」

秀吉「おはようなのじゃ、明久」

明久「お、おはよう零、秀吉」

零「珍しいな。シャツにアイロンがかかってるなんて」

秀吉「寝癖も直っておるしの」

明久「そ、それは週の始めだから」

零「お前がそんなこと気にするはずがねえだろ」

秀吉「怪しいのう」

明久「ホ、ホントに何もないうて」

秀吉が明久の顔を下から覗きこむように見ている。

常村「朝から見せつけてんじゃねーぞコラァ！」

久保「そちらの先輩の言う通りだよ。吉井くんはもう少し木下くんと距離をとるべきだと思う」

秀吉「儂は男じゃ」

零「よお、変態。もう片方はどうした」

常村「あいつは反省の色が見えないからまだ警察の厄介になってる」

零「そのまま終身刑になれ」

秀吉「明久に逃げられたのじゃ」

零「気になるから先に行くぞ」

秀吉「どうして普通に壁を登っていくのじゃ？」

ガラガラ

零「おはよう」

雄二「お前はどこから入ってきてんだ」

零「窓」

雄二「普通に答えるなよ」

零「お前こそ、なんちゅう格好してんだ」

雄二「実は今朝」

霧島「……………雄二」

雄二「なんだ翔子？」

霧島「……………携帯電話を見せてほしい」

雄二「どうした？なんでいきなりそんなことを言いだすんだ？」

霧島「……………昨日ＴＶで言ってたから」

雄二「ＴＶで？何を？」

霧島「……………浮気の痕跡はケータイに残るって」

雄二「ほほう」

霧島「……………だから見せて」

雄二「断る」

霧島「……………歯を食い縛ってほしい」

雄二「待て！今途中経過がとんだぞ！？いきなりグーか！？グーで殴る気か！？」

霧島「……………見せてくれる？」

雄二「あー、実は今日はたまたま家に忘れてギヤアアアアア！目が
ああああー！」

霧島「……………最初からこうするべきだった」

雄二「結局いつもの目潰しじゃねーか！歯を食い縛ってというのは
なんだってんだよ！フェイクだったのか畜生！」

霧島「……………雄二。手をどけてほしい。携帯電話が取れない」

雄二「わ、渡してたまるか！やっと直って帰ってきたのにお前に奪われてたまるか！」

霧島「……………抵抗するならズボンとトランクスごと持ってく」

雄二「トラッ！？百歩譲って、ズボンはまだしもお前は俺に下半身裸の状態で投稿しろっていつのか！」

霧島「……………お義母さんが言ってた。男子は裸ワイシャツが好きだつて」

雄二「違うからな！好きだからって自分がなりたいわけじゃないからな！そこはかなり重要だから間違えるな！」

零「なら霧島になってもらえ」

雄二「ぶっ！変なことをはさむな！続けるぞ」

霧島「……………私も気になる」

雄二「お前は変態か！？」

霧島「……………変態じゃない。幼なじみの私は雄二の成長を確認する義務がある」

零「お前も霧島の成長を確認しとけば」

雄二『お前いい加減にしろよ！次余計なことを挟んだら話さねえぞ！』

雄二「分かったからベルトに手をかけるな！ズボンのフックを外そうとするな！」

霧島「……………そう」

雄二「なぜ露骨にガツカリした顔をする」

霧島「……………じゃあケータイを見せて」

雄二「やれやれ、頼むから壊してくれるなよ。機械音痴」

霧島「……………努力する」

雄二「そうしてくれ。どうだ？特に面白い物もなかっただろ？だから大人しくケータイをもってどうしてズボンに手をかける？ケータイは渡しただろうが！」

霧島「……………私より吉井のメールが多い」

雄二「それがどうした？」

霧島「……………浮気相手は吉井ということになる」

零『優子。トリップするなよ』

雄二『マジでやめてくれ』

雄二「いや、ないだろ」

霧島「……………だからお仕置き」

雄二「どうして俺の周りには性別を些細なことで考える奴が多いんだ？よく見る遊びの約束ばっかだろ。友達だからそれくらい当たり前だろ」

霧島「……………でも」

プルプル

雄二「つと、今のメールは俺のケータイからだな。ケータイを返せの前にスリもビックリの手際で抜き取ったベルトを返せ！」

霧島「……………ダメ。返さない」

雄二「はっ？何で……………つてウオイ！今度は更にズボンを狙う気か！？ここは天下の往来だぞ！……………分かった。千歩譲ってズボンは譲ってやるう。だからせめてトランクスだけは！」

霧島「……………ダメ」

雄二「お前は自分が何をしようとしてるか分かってるのか！？」

霧島「……………浮気。絶対に。ダメ」

雄二「畜生！さっきのメールになんて書いてあったんだ！」

from 吉井明久

雄二「家に泊めてくれないかな？今日は……家に帰りたくないんだ。」

――

雄二「てなことがあって、ギリギリトランクスだけは死守した」

零「優子がトリップしたぞ！潤、なんとかしといてくれ！」

雄二「ここで零。一生のお願いがある。ズボンを貸してくれ」

零「断る。だいたい体育着を着るバカ。そっちの方がまだマシだ」

雄二「その手があったか」

ガラガラ

明久「おはようって、雄二なんて格好してるの！？それに零はなんで先に着いてるの！？」

雄二「てめえのせいだ明久！てめえのせいで下半身超クールビズで登校するはめになったんだ！死んで償えこのクソ野郎！」

明久「えええー！いきなりどうしたの！？一体何があったのさ！？」

雄二「黙れ！死ね！制服を寄越せ！」

零「説明するのタリイ」

『おい、坂本の話聞いたか？』

『トランク스로登校してきたんだろ』

『女装は見慣れてきたけどあれは度肝が抜かれたぜ』

零「ということだ明久」

明久「雄二。何か悩み事があるなら相談に乗るよ」

雄二「ち、違う！自ら好き好んであんな格好になったわけじゃない！あとトランクスだからギリギリセーフのはずだ！」

零「その状況はギリギリじゃなくてアウトだ」

明久「零。そんなこと言ったらダメだよ。雄二の精神はギリギリのところまで行っちゃったんだから」

雄二「だから違っつて言ってるだろ！そもそもお前があんなメール送ってくるから！翔子に見つかって」

明久「いくら霧島さんだって男からのメールでそんなことしないでしょ」

雄二「いや、正直お前のメールはかなり際どかったぞ」

零「優子がトリップしてたし」

明久「別にただの頼み事のメールでしょ」

雄二「ほほう。そう思うなら俺に送ったメールを大声で読んでみる」

明久「別にいいけど？それじゃあ行くよ」

ガラガラ

秀吉「おはようなのじゃ」

姫路「おはようございます」

島田「おはよう」

明久「雄二の家に泊めてほしいんだ。今日は………家に帰りたくないんだ」

秀吉「儂じゃダメなのかう！」

姫路「明久くんにはまだ早いと思います！」

島田「ウチにはアキの本心が分からない！」

登場と同時に退場した3人。

零「タイミングすげーな」

愛子『優子が鼻血出して倒れたよ！』

零「気にしないことにしよう」

須川「吉井。朝から何変態的なことを叫んでるんだ？」

明久「ち、違うよ！僕はそんなムツツリーニみたいな真似をしないよ」

土屋「……………失礼な」

雄二「ムツツリーニ、凄い荷物だな」

ムツツリーニ「……………ただの枕カバー」

明久「枕カバー？それにしては大き過ぎない？」

土屋「……………そんなことはない」

明久「ごめんムツツリーニ。ちょっと中身を見せてもらっつよ」

土屋「……………あ」

中から出てきたのは等身大の明久（セーラー服）がプリントされた白い布。

明久「ムツツリーニ。これは何？」

土屋「……………ただの抱き枕カバー」

明久「ただのじゃない！枕カバーと抱き枕カバーには大きな隔たりがあることを覚えておくんだ！だいたいなんで僕の写真なの！」

土屋「……………世の中にはマニアというのがある」

零「この学園じゃ結構需要があるしな」

明久「嘘だ！僕の抱き枕カバーを欲しがる人なんて」

零「ほれ、来た」

明久「へっ？」

玉野「ムツツリーニくん抱き枕カバー出来たんだ！貰っていくよ」

土屋「毎度あり」

久保もこちらを見ているが動かない。

明久が震えてる。

安心しろ明久。それは平常の証だ。

まあ、本人を前に買えるのは玉野しかいないしな。

零「分かったか」

明久「はあー。とにかくその抱き枕カバーは没収するからね。作った分は秀吉のをプリントして僕に渡すように」

須川「俺も秀吉の欲しい！」

カチャッ

七迷「何、当初の目的を忘れてふざけたことを言ってるんですかね？須川さんは」

須川の首にデスサイズを向ける七迷。

須川「はははは。忘れてないよ。だからこれを下ろして」

キンコーンカンコーン

七迷「チャイムが鳴りましたし、後で話しましょう」

須川「また後で来るわ」

――――

昼休み

『吉井くん。保険室に行つてきなさい』

このセリフを午前中に二桁は聞いたぞ。

明久「まったく失礼だな」

島田「アキ。朝から様子がおかしいけどどうしたの？」

明久「別に何でもないよ。ただ勉強に目覚めただけで」

ガクッ

須川「あの吉井に勉強の志で負けるだと」

零「安心しろ須川。明久の妄言だ」

島田「大丈夫。ただの幻聴よ。熱でもあるんじゃないアキ」

島田が手で体温を測ろうとすると

明久「これはマズい！」

咄嗟に島田から距離を取る。

島田「何よそのリアクションは！人がせっかく心配してあげてるのに！」

明久「ゴメン！これには事情があつて」

零「事情？」

明久「う……………。えっと、その。あつ！そういえば須川くんと七迷さんの話つて？」

零「逃げたな」

須川「実は哀川に頼みなんだが、勉強を教えてくださいませんか？」

零「お前までおかしくなったのか？」

須川「そうじゃない。召喚獣を強くしたいんだよ」

零「どうして？」

須川「そんなことどうでもいいだろ」

大方、七迷にいい所見せたいってところか。

零「そんなお前にいい情報だ。なんと次の期末試験の結果で装備が変わる」

雄二「それはホントか！」

零「ああ、召喚獣が暴走したから点検のついでに装備をリセットするんだよ」

雄二「これで勝つ確率が増えた」

零「今度はどこを目指すんだ？」

雄二「まずは打倒3年。その後は打倒教師だ」

明久「また凄いこと考えたね」

雄二「世の中は学力じゃないって証明するにはAクラスを倒すだけじゃないからな」

零「俺は倒しちまったんだが」

雄二「お前を倒すのも目標だよ」

零「それは面白い。やってみな」

明久「そういうことなら僕も参加していい？零の家で」

零「いいぞ。明久の家で」

雄二「そうと決まったらいつものメンバーに須川と七迷を加えて勉強会だ。明久の家で」

須川「よろしく頼む。明久の家で」

明久「なんで僕の家に決定されてんのさ！」

という訳で吉井家訪問決定！

明久の違和感（後書き）

3巻の内容を壊し過ぎた気がする。

3巻の覗きは他の場所で書きたいと思っている。

アンケート結果

本日アンケートが終了しました。

結果

バカとカオスと原作ブレイク 11票

IS カオスに原作ブレイク 28票

よって、IS カオスに原作ブレイクになりました。

アンケートに参加してくださった方、まことにありがとうございます。

もしかしたらアンケートをとったばかりなのにテストの点数が悪かったらケータイを取り上げられるかもしれないのでご了承ください。

アンケート内容

バカとカオスと原作ブレイクとIS カオスに原作ブレイク。

どちらを先に進めた方がいいか迷っています。

なので、8月30日までにどちらの続きが読みたいか、感想に書いてください。

どちらも登録していない人でも感想を書くことは可能です。

なので、気軽に選んでください。

このアンケートは8月31日に消します。このアンケートの感想には返信が出来ないと思います。

このアンケートの結果は8月31日に掲載します。

たくさんの方が投票してくれることを願っています。

明久家（前書き）

IS4巻を借りてくるまでこっちを進めます。

バカテスト 国語

次の熟語の読み方を答え、例文を作りなさい。

『相殺』

姫路瑞希の解答

読み方 そうさい

例文 取引の利益で借金を相殺する。

教師のコメント

そうですね。差し引いて帳消しにするという意味なので、お金の貸し借りで良く使われます。

吉井明久の解答

読み方 そうさつ

例文 パンチにパンチをぶつけ威力を相殺した。

教師のコメント

おしいですね。確かにそうさつという読み方もありますが、『互いに殺しあう』という意味になってしまうので、この場合の威力を消すという意味にはなりません。

哀川零の解答

読み方 そうさつ

例文 俺の相手をするには弱過ぎたので、相殺ではなく虐殺になつてしまった。

教師のコメント

正解なのですが、解答用紙についた赤い染みが気になります。

島田美波の解答

読み方 あいさつ

例文 のどかな朝、私は友達と相殺をした。

教師のコメント

それは決してのどかな朝ではありません。

明久家

放課後

雄二「よし。明久んちで期末試験の勉強会だ」

明久「期末試験の勉強会は雄二の家でしょうよ」

「おい、聞いたか？」

「ああ。俄かに信じがたいが」

「あの吉井と坂本が」

「『『期末試験の存在を知ってたなんて!?!?!』』」

零「その驚きに驚きだ!?!」

雄二「はあー。だいたい勉強なんて何を今さら」

零「自分のバカさに嫌気がさしたんだろ」

雄二「なるほど。明久はまだ七の段が分からないのか」

明久「違うからね!九九の暗唱が出来ないわけじゃないからね!ど
んどん2人が予想外の方向へ進んでいったから口を挟めなかったよ!」

零「違うぞ雄二。明久は三角形の面積の求め方が分からないんだよ」

明久「高さ×底辺÷面積！2人共いい加減僕をバカにするのは止めてよ！」

零「ほらな」

雄二「よしよし明久。そこに÷2を入れたら三角形の面積だ」

明久「……ふう。雄二と零は人の揚げ足とりが上手いんだから」

雄二「すげえ！その返しは俺でも予想外だ！」

零「甘いな雄二。これも予想済みだ」

雄二「だいたい、なんで自分の家にいたくないんだ？」

明久「えー、あー、そのー」

零「嘘だっ！！！（ひぐらし風）」

明久「今日は都合が悪くてって否定するのが早いよ！」

雄二「都合が悪いだと。何かあるのか？」

明久「う、うん。今日は家に改装工事の業者が来るから」

雄二「嘘つけ。今日はお前の家で新作のボクシングゲームをやる予定だっただろう。改装業者が来るはずがない」

明久「じゃなくて家の鍵を落としちゃって」

雄二「マンションなんだから管理人に頼めば開けてもらえるだろうが」

明久「でもなくて家が火事になっちゃって」

雄二「火事になったのに服にアイロンをかけてきたのか。どんだけ大物なんだお前は」

明久「じゃなくて、えーっと、その」

零「嘘つくならもう少し厚みのある嘘をつけ」

雄二「そんじゃ、明久の家行くぞ」

明久「ダメだよ！今は部屋が物凄く散らかってるんだよ！」

姫路「そうですか。なら片付けるのを手伝いますよ」

明久「散らかってるのは2000冊のエロ本なんだ」

土屋「……………任せておけ（グッ！）」

明久「しまった！ムツツリー二の興味を煽る結果に！物凄い逆効果だ！」

零「それじゃあ出発ってことで」

明久「待ってええええ！」

—————

マンション

雄二「観念して鍵を出せ明久」

明久「絶対に嫌だ！」

雄二「そうか。ならお前も裸ワイシャツの苦しみを味わうか？」

土屋「……………ボタンは上2つ開けてくれる嬉しい」

明久「なんか段階を飛ばしてる！」

姫路「上目遣いの涙目をお願いします」

土屋「……………了解」

秀吉「一体何を隠しておるのじゃろ」

雄二「アイロンに弁当ということは女でも出来たか？」

零「気付いたか。実は明久は大学を卒業した社会人でスタイル抜群の女性と同居している。しかもおはようのチューもしょうとしてい
る」

明久「確かにあってるけどなんで誤解を招く言い方をするかな！だ
いたいなんで知ってるの！？」

島田「アキ。鍵を開けなさい（ニコッ）」

明久「顔は微笑んでるのに目が笑ってない！分かりました！今すぐ開けます」

ガチャツ！

扉が開いて目に入ったのは

干されたブラジャー

明久「駄目だ！いきなり弁解出来ない物が」

須川「哀川の言った通りみたいだな」

雄二「本当に女が出来たなんて」

姫路「駄目じゃないですか明久くん」

明久「へっ？」

姫路「あれは明久くんが着けるには大きすぎますよ」

零「認めねえ気だ！？」

明久「そんな誤解されるなら殴られた方がマシなんだけど！」

七迷「じゃあ、あれはなんですか？」

七迷は机の上のパットを指す。

姫路「あれはハンペンです」

雄二「ハンペン!？」

土屋「……………じゃあ、あれは？」

女性用と思われるヘルシー弁当

姫路が崩れ落ちて

姫路「もう無理です!弁解のしようがありません!」

明久「なんでブラジャーとパットが良くて弁当が駄目なの!？」

優子「で、吉井くん。いい加減観念したら」

明久「実は姉さんが帰って来てて」愛子「普通のことじゃん」

潤「姉を迷惑に言うのはいただけないな」

明久「そうなんだけど、姉さんは珍妙な人なんだ」

雄二「まあなんだ。家族について言うのは止めてやるうぜ」

明久「始めて雄二に慰められた気がする」

零「雄二も母親には苦労してるからな」

雄二「なんでそんなこと知ってたんだ!？」

零「霧島に聞いた」

霧島「零に雄二と結婚するための作戦会議のために雄二の私生活を話した」

雄二「俺にとって問題の発言が聞こえたんだが！」

明久「そういうことだから姉さんが帰ってくる前に」

ガチャッ

玲「アキくん。今帰りました」

明久「間に合わなかった」

玲「おや。アキくんのお友達ですか？いつもこの愚弟がお世話になっています」

雄二「おい、どういうことだよ。普通の姉じゃねえか。俺の母親なんて」

玲「吉井玲です。これからも愚弟ともどもよろしくお願いします」

雄二「坂本雄二です」

土屋「……………土屋康太」

須川「須川亮です」

秀吉「僕は木下秀吉じゃ。良く勘違いされるが僕は男なのじゃ」

玲「ええ。分かっていますよ。男の子ですよね」

秀吉「なんと！儂を一目で男と見抜いたのはお主と零で2人だけなのじゃ！」

玲「だってうちの愚弟が女の子を家に連れて来るわけないじゃないですか」

愛子「はい？」

玲「だからそちらの8人も男の子ですよね」

明久「違うよ！8人もちゃんとした女の子だからね！」

零「ちなみにその8人に入ってるのは俺じゃなくて秀吉だからな」

秀吉「儂は男であってるのじゃ！」

玲「女の子。そうですか。アキくん300点減点です」

明久「姉さん酷いよ！まだ何もしてないのに！」

零「バカ」

玲「『まだ』？訂正します。800点減点にします」

明久「しまったあああああああああああああ！」

雄二「明久。俺が悪かった」

玲「すいませんね。皆さん。失礼なこと言って。あっ、あなたは。」

昨日はありがとうございました」

零「いえいえ。困った時はお互いさまですから」

明久「零は姉さんのこと知ってるの？」

零「昨日、道を聞かれたんだよ」

玲「あの白衣は洗ったので返しますね」

須川「なんでそんな物貸したんだ？」

零「さすがにバスローブ姿を放っておくわけにはいかないだろ」

潤「言ってる意味が分からんのだが」

零「そのままの意味だけど」

明久「零。本当にありがとう。少ない時間でもあの格好をさせなかつたこと」

まあ、身内が道路でバスローブか白衣だったら、絶対に後者だよな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9813n/>

バカとカオスと原作ブレイク

2011年10月21日07時06分発行